魏√END後…新しい始まり。

もやち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魏√ＥＮＤ後…新しい始まり。

【Ｎコード】
Ｎ２１３９Ｖ

【作者名】
もやち

【あらすじ】
魏√ＥＮＤ後の話です。天の御遣いの北郷一刀が消えて3年が経った恋姫の世界…そこに再び北郷一刀が舞い戻り新しい物語の始まりです。

注意！！
キャラ達の会話文が大変多いので、読者様の妄…想像力が必要かも

しれません，笑

新しい物語の始まり（前書き）

読者の皆様、初めまして。

今日から恋姫の魏√ＥＮＤ後を書かせてもらう「もやち」と言います。

一応、女です，笑

精一杯書かせて頂きますので、暖かい目で見て頂けると幸いです。

新しい物語の始まり

「此処に来るのは何度目になるのかしらね。」

そう呟いた彼女の名前は曹操、真名は華琳。此処とは…彼が消えた場所であり、曹操の1番嫌いな場所…いや、正確には嫌いになった場所だろう。

「あれから3年も経ったというのに…1人の男に情けないわね。」

呟いて曹操が振り返り歩き出した時、後ろの空では綺麗な流星が流れていた。

次の日のある場所

「う…また、来れたのか？」

目を擦りながら立ち上がる1人の青年が其処にいた、彼の名前は北郷一刀。この物語の主人公である。

「こ，この景色…間違いなく来れたんだな。」

そう思って当然である。一刀の目の前には見渡す限りの荒野が広がっていたのだから…

新しい物語の始まり（後書き）

如何でしたでしょうか？

少しでも展開が楽しそうと思って下されば、続きを見て頂けると幸いです。

再び舞い降りた御遣い（前書き）

あ…

「」↑口に出してる文章です。

『』↑心の中の文章です。

再び舞い降りた御遣い

『それにしても、相変わらず凄い荒野だな。５年振り…か。みんな元気にしてるのか…ん？』

一刀が呟きながら歩いていると向こうから騎兵が来るのが見えた。

その朝のとある場所

「うぅ…朝？」

自分に驚き、思わず声を出していた曹操がいた。曹操は彼がいなくなってから、ゆっくり寝る事が出来なくなっていたからだ。

『本当に久しぶりに寝れたわね。何かの前触れかしら？』

曹操は思った。そして、心の片隅では彼が帰ってきてくれたからだと…願っていた。

一方、別の場所

「報告です！！」

朝から兵士の声が響き渡っていた。

「どうした！！敵襲か！！」

その声に大きく反応したのは、赤壁の戦いの後に姉の孫策より次の呉王を任された孫権だった。因みに孫権の真名は蓮華。

「蓮華～どうしてそうなるのよぉ。少し落ち着きなさい。」

少し呆れ顔で蓮華に話し掛けるのは孫策である。真名は雪蓮。

「全くです。蓮華様。」

孫策の発言を後押しするかのように、孫策の隣にいる女性が述べた。

「う…申し訳ありません。」

彼女は周瑜、真名は冥琳。周瑜もまた孫策同様に第一線を退いていた。

「それで、何があったの♪」

勝手に兵士に話掛けたのは孫策である。

「は，はい！！此処より５里程離れた場所で流星を見た民・兵士が多数という情報が。」

「流星？」

キョトンとする孫権を横目にして孫策が言った。

「その場所の様子を見て来てくれるかしら？そうね…多分、騎兵を５００程で大丈夫よ♪」

「ちょっと姉様！！勝手に…」

「蓮華、ごめんね♪」

満面の笑みで手を合わせながら返してくる孫策に孫権は諦めていた。

「勘なのか？」

「えぇ、でも間違いない。久しぶりの勘だけど分かる。また新しい何かが始まる予感がするの♪」

「全く。珍しく朝から軍議に出てるかと思えば…」

孫策・周瑜が2人にしか聞こえない声で話している。

「冥琳…嬉しそうよ？」

「お前の勘を聞いたのは久しぶりだからな。」

「さて、一体何が始まるのかしらね♪」

再び舞い降りた御遣い（後書き）

さて、雪蓮姉様・冥琳・蓮華には初登場していただきました。

雰囲気が出てると良いのですが…

恐怖の出会い

「あれは騎兵かな?」

一刀は遠くから来る騎兵を目にして願っていた。

『もし、魏の誰かだったら…涙を堪える自信はないなぁ。』

考えている内に一刀は目頭が熱くなっていた。そして、目の前まで来た騎兵の集団から誰かが出てきた…というより物凄い速さで駆けてきていた。

「貴様、何者だ?」

「あ,あの…」

刹那、一刀の首筋には刃が向けられていた。

「真っ二つになりたいか?」

「ほ,北郷一刀と言います。」

「北郷?どこかで聞いた名だな。」

彼女は一刀に刃を向け一刀を尋問する。

「実は前に魏に…」

「魏だと!!貴様、魏の者か!!此処で何をしている!!」

「あ、いや…」

本当に華琳が三国を統一してるんだろうかと不安になる一刀。

「そういえば此処ら辺りで流星が目撃されているんだが、貴様が関係しているのか?」

「流星?…多分、それが俺だと思う。」

「貴様、私がそんな戯れ言を信じると思っているのか?」

『怖い。怖すぎる。』

彼女の名前は甘寧、真名は思春。

「お前と話していても埒があかないな。こいつを縛り上げろ!!」

結果、手と足を紐でグルグルに巻かれて身動きの出来なくなった一刀は捕まった。

「今は大人しくするしかない。それにしても華琳達が危ないって言われて来ちゃったけど、本当に俺の前にいた世界なんだよな?だ,大丈夫だよな?しかし、コッチはどれぐらい経ってるんだ?分からない事が多すぎる。」

「貴様…何をブツブツ言っている?」

「あ…あの…刀を出しながら近寄って来ないで下さいます?」

「フン！！」

『はぁ。とりあえず、話した事のある人と会話をしないと…俺の命が危ない。彼女は確か呉との戦いで見た事がある。しかし、話したことはない。つまり、此処が呉だとすると俺を知るのは…孫策・周瑜・孫権・黄蓋ぐらいか…黄蓋さん…やっぱり死んじゃったんだよな。』

一刀は考え込んでるうちに城に着き玉座の間に連れてこられていた。正座をさせられて、その直ぐ後ろに甘寧が立っている状態である。

『この造り…間違いなく帰って来たんだな。』

一刀は正座をしながらも内装を見て確信した。再び来れた事を…

「大人しくしていろ。」

「へっ？」

一刀が振り向いた時には既に甘寧の姿はなかった。

『おいおい、怪しい人物を呉の玉座の間に1人って…』

暫くすると王が出てくるであろう扉が静かに開かれた。

恐怖の出会い（後書き）

さって、今回は思春に初登場して貰いました。

実は私…前まで思春が1番大好きでした♪

蓮華に嫉妬する思春…可愛すぎます！！笑

本当の再会

「え！！」

驚きと一緒に一刀の目からは…涙…いや、汗が出ていた。そこに立っていたのは、孫策でも孫権でもない。髪は少しクセのある金髪で頭には独特の人形がいた。一刀の知る中にそんな人物は1人しかいなかった。

「あはは。これは参ったな。」

目からの何かが止まらないままの一刀は笑顔を溢しながらその子を見つめた。

「ふふふ♪お兄さん、本当にお久しぶりですね～」

彼女もまた…泣いていた。彼女の名前はテイイク、真名は風。テイイクは目を擦りながら、一刀の目の前までトテトテと歩いてきた。

「風…少し背も伸びて大人っぽくなったね。」

「おうおう！！いきなり口説くのかよ！！相変わらずだな。」

「ちょっと静かにしてくれますかね～」

「ははは、懐かしい会話だな。では改めて…ただいま、風」

「おかえりなさいですよ、お兄さん♪」

「おっ！！」

相変わらずの返しだったが、テイイクは返事と同時に一刀の胸に飛びついてきた。一刀もまたテイリツを抱きしめた。

「うぅ…」

「風？」

「うわぁぁあぁぁん。お兄さん、お兄さ～ん。」

一刀は驚いていた。

『風がここまで大泣きをする子だっただろうか？別に自惚れてる訳じゃない。』

一刀は自分が魏の皆に本当に愛されていた事…そして、自分が消えた事での魏の皆に与えた影響の大きさを改めて感じた。

『本当に最悪だよな。』

心に自責の念を抱きながら力強くテイイクを再度、抱きしめた。その時、一刀の目からも一筋の涙が流れた。

ようやく落ち着いてきたのか、テイイクは静かに話し掛けてきた。

「お兄さん…少し背が大きくなりましたね～」

「そ，そうかな?風も同じじゃないか。」

「せっかく風が大きくなっても、お兄さんも大きくなっては意味がないですね～」

「俺は大きくなった風が見れたから、十分だよ。」

テイイクは俯いてしまう。

「お兄さん…背が変わっても、そういう所は相変わらずですね～」

「?」

「まぁ、そこがお兄さんの良い所でもあるんですけどね。」

「よく分からないけど、良い所なら良いか。」

「ふふふ♪そうなのですよ。そういえば、お兄さん?」

「ん?」

「抱きついて思ったんですけど、背は伸びたのに身体は痩せたんじゃないですか～?」

「…」

一瞬の沈黙がその場に流れた。

「あ，アレだよ!!背が少し伸びた分だけ、肉も伸びたみたいな感じだって。」

「そういうもんですかね～」

テイイクは見逃さなかった。一瞬だけ一刀がとても悲しい顔をしたことを…

本当の再会（後書き）

魏の子での最初の再会は風ちゃんにお願いしました。

少しでも読者様の涙を誘えたかな？

私ですか？

…

軽く涙目です，笑

変な空気

ゴホン！！

「そ…そろそろ良いか？」

一刀・テイイクが再会を果たしてから何分経ったのだろうか？不機嫌そうなのだが、どこか顔の赤い孫権が困ったように話し掛けてきた。テイイクはキョトンとしながらも、直ぐに状況を理解した。流石は軍師である。一刀の横に並んで座り直ぐに孫権に向き直った。

「長々と失礼しました～」

孫権の横には孫策・周瑜・甘寧の姿があった。

『孫呉の皆さん…黄蓋さんは…いないな。』

一刀は直ぐに黄蓋の姿を探して辺りを見まわしたが、姿は確認出来なかった。テイイクは隣でそんな一刀を見ながら何をしてるか想像はついていたが、何も言わなかった。

「まずは北郷殿、本当に申し訳なかった。」

不意に言われた孫権の言葉と同時に呉の皆が一刀に頭を下げた。

「や，やめて下さい！！別に孫呉の皆様に謝られる事なんて…」

言いながら一刀には１つの覚えがあった。荒野に一刀がいた時の甘

寧の行動である。甘寧だけ頭を最後まで下げていた。

「本当に申し訳なかった。まさか、いなくなったと言われた北郷殿が呉の荒野にいるとは…姉様意外は誰も予想してなくて。」

申し訳なさそうな孫権の横で孫策がニヤニヤしている。

「孫呉の将である甘寧の非礼を許して欲しい。」

「別に気にしてませんよ。」

「え？」

孫権が眼をパチクリさせていた。

「甘寧さんの行動は当然だったと思いますよ。流星の落ちた荒野に見慣れない服を着た男が立っていた…自分で言うのも変ですが、怪しすぎますし。」

一刀は照れるような笑顔で答えた。

「そ，そうか。」

顔を赤くする孫権。一刀をジロッと見るテイイク。ニヤニヤする孫策。何故かドス黒い殺気を一刀に放つ甘寧…一刀は直ぐにその場の変な空気に気づき、無理矢理に話を変えようと試みた。

「そ，そういえば、どうして呉に風がいるのですか？」

この一刀の発言に対し、咄嗟に孫権はテイイクを見た。テイイクも

孫権を一直線に見返した。そして、孫権は悟った。

「北郷殿…部屋を用意する。今日は風と色々と話しもあるだろうから、話は明日聞こう。」

こうして孫権の言葉により会議のようなものは一度終わり、一刀は与えられた部屋に行った。しばらくして…

コンコンコン！

一刀の部屋がノックされた。

「どうぞ。」

「入りますよ～」

「今はノックが当たり前なのかな？」

「そういえば、お兄さんが発案したんでしたね～」

一刀は嬉しかった。自分がいなくなっても知識が使われていた事…いや…ただ単純にノックをされた事が…そしてお互いが向かい合うように座り、一刀は言った。

「風…今から俺はたくさん君に質問しちゃうと思うんだ。疲れると思うけど許して欲しい。」

「はい～」

変な空気（後書き）

ニヤニヤする雪蓮姉様、最高です，笑

本質

「分かりました～あ、でも風の新しい殿方については聞かないで下さいね～」

テイイクが少しニヤっとしながら、一刀を見た。一刀はそのテイイクと目を合わしていられず、下を向いた。

「…分かったよ。じゃあ、今から何個か質問するから答えてくれるかい？」

「…」

反応がない。一刀は顔をあげてテイイクを見た。

「すぅ～すぅ～」

「って寝るな！！」

「おぉ。風の冗談に本気で気を落としてくれるお兄さんを見てたら眠くなってしまいましたぁ～」

『風…性格悪くなったな。』

思った一刀だった。

「じゃあまずは、俺が消えてから何年が経ってるんだい？」

「もうすぐ、3年ですねぇ～」

「3年…か。やっぱり違うんだな。」

「違うとは何ですかね～？」

テイリツは直ぐに返答した。

「あ…いや、大した事じゃないんだ。」

一刀は別に自分の世界では5年が経った事を言っても良いと思いながらも、あえて何も言わなかった。その5年間の間の事を聞かれるのを恐れて…その間、テイイクは真剣に一刀の表情を見ていた。

「じゃあ、次は風はどうして孫呉にいるんだ？三国同盟での何か決まりかい？」

「流石お兄さん、読みが良いですね～その通りです。ただ本質は違うのですよ。」

テイイクがそう言いながら、何かを訴える目をしていた。一刀はその目を見て1つの事を思い出した。さっきの玉座の間での孫権とテイイクの目線でのやり取りである。只、一刀はその事には触れずに返事をした。

「本質が違う？」

「名目上は三国がお互いの利を得る為に他国に1人ずつ将を1年間派遣しています。」

「今年は呉に風なんだね？」

「はい～。蜀には稟ちゃんが行ってますよ～」

稟とは魏の軍師の１人であり、郭嘉の真名。

「稟が蜀に…でも本質が違うっていうのは？」

「この規約の意味は恐らく、魏を心配してくれる呉・蜀の計らいだと思いますよ～」

「魏の…心配？」

一刀は不思議そうに答えた。それもその筈、魏には曹操がいるのだから。一刀の知る曹操が他国を心配させる事をするわけがないと思っていた。

「…」

テイイクは黙って俯いてしまった。

「風？どうしたんだ？」

心配そうに顔を下から覗き込んだ一刀…すると、テイイクの目には涙が溜まっているのが直ぐに分かった。そして、一刀も悟った。

「原因は俺…なんだね。」

コクッ。

テイイクは何も言わずに只…うなずいた。

本質（後書き）

3年と5年…違いますよね。

あ～3年経った恋姫の子達の姿が見たい！！

はい、妄想してますけど何か？笑

そういえば稟は名前と真名だけ初登場です，笑

此処にいるという事（風

部屋には一瞬の沈黙が訪れたが、それをテイイクがかき消した。いつもの笑顔で…

「でも、お兄さんが今此処にいる事実があるんですから大丈夫ですよ～」

「風…」

一刀にはテイイクの笑顔がとても辛かった。自分のせいで魏がそこまで…あの曹操までが…という事実に圧し潰されそうになっていた。

「全く、俺は本当に此処にいる意味があるのかな？そんなに大勢の人を…大切な人を悲しま…！！」

バチン！！

一刀が喋っている最中、部屋に頬を叩く音が響いた。何が起こったのか最初はよく分からなかったが、頬に伝わる痛みと前に立つテイイクを見て何が起こったのか一刀は理解した。

「おかしいですね～風が最も信頼する殿方は弱音を言うような人じゃないんですけど、偽物じゃないかと思って手が勝手に動いてしまいました～」

一刀は頬を抑えながら、テイイクの言葉を聞いて一瞬呆れた顔をしながらも笑顔を洩らした。

「風って怒ると手が出る子だったんだね。」

「魏に居れば嫌でも怒ると手が出ちゃいますよ～」

一刀は魏の面々を思い出して苦笑いを浮かべた。

「確かに…華琳を筆頭に春蘭・桂花・季衣・霞・凪・地和なら、怒ったら間違いなく手が出るもんな。」

「報告しておきますね～」

「風さん…ごめんなさい。」

「ふふふ♪じゃあ、風とお兄さんだけの秘密という事にしておきましょう。」

『風…本当に性格が…』

一刀は無邪気な笑みを浮かべるテイイクを見ながら、時間は人を変えると改めて感じた。

「それで、お兄さん。他に質問はまだあるんですか～」

「そうだ！！俺がいなかった間に…五胡！！…五胡に何か動きはなかったか？」

一刀の急な態度の変化にテイイクもまた何かを感じ真剣に答えた。

「そうですね～五胡に最も近い蜀の方達と少しだけ本当に小さい戦

いが数回あっただけですよ～」

「そう…か。」

「どうかしたのですか～？」

「いや…良いんだ。」

一刀は答えながら、窓を眺めて気が付いた。

「もうすっかり夜になっちゃったね。」

「…」

「風？」

「すぅ～すぅ～」

「だから寝るなっての！！」

「おぉ。丁度良い時だと思ったんですけどね～」

「いきなり寝ないでくれよ。寝るなら自分の部屋でって、風！！」

一刀は驚愕した。テイイクの方を見れば突如に服を脱ぎ、何も纏わない状態で土下座をしていたのだ。

「風！！何してるんだよ！！は，早く服を…」

一刀はテイイクの真っ白な身体を横目に見ながらも、焦って服を着

せようとしていた。

此処にいるという事（風（後書き）

風ちゃんが手を出したくなる気持ち…分かります。

それにしても風の性格…風が大好きな方で気分を悪くした方がいましたら、申し訳ありません。

というか一刀…風の身体をチラ見するな！！笑

夢での再会

生まれた姿で土下座するテイイクが急いで服を着せようとする一刀に口を開いた。

「お兄さん…いいえ、天の御遣いである北郷一刀に私は暴力を振るいました。如何なる仕打ちでも、お受け致します。」

一刀はキョトンとしたが、直ぐにテイイクの悪い冗談が始まったのかと思い少し意地悪してやろうという気持ちで土下座するテイイクの肩に手を置いた。そして驚いた。テイイクの肩が…震えていたのだ。笑いを我慢してる訳でもなく、本当に怯えるように…一刀はどうしたら良いのか分からなかった。何と声を掛けるのか?本当に何かをするのか?時間だけが過ぎていく。そんな中で一刀の行動は…

ふわっ

一刀の羽織っていた上着が軽く宙を舞い、テイイクに掛けられた。

「風…そんな冗談には引っ掛からないぞ。後、誰かさんみたいに簡単に男の前で服を脱いじゃダメだろ。風邪ひいちゃうぞ。」

テイイクは最初は何を身体に掛けられたか分からなかったが、温かい感じに包まれソレが何か気付いた。

「お,お兄さん。」

テイイクも天の御遣いの上着を掛けてもらっては、顔を上げるしか

なかった。顔を上げれば風の大好きな笑顔がそこにはあった。

「お兄さんには一本取られてしまいましたね～」

「何の事かな？」

何も無かったかのように答える一刀と笑みを溢しながら自分の服を着るテイイク。その後も少しテイイクと一刀がいない間の他愛のない話をした後、テイイクは自室に戻って行った。最後にテイイクの頭のアイツが何か言っていたようだが、一刀は聞き流した。そして、その夜に一刀はベッドで1人思っていた。

『コッチでは3年…か。向こうでは5年も経ったというのに。本当に地獄の5年だったよな全く。とにかく誰にもコレだけは見せる訳にはいかない…絶対に。それにしても風…また一段と可愛くなってたなぁ。他の皆も3年経って…ゴホンッ。さて、明日は孫呉の皆と会議だったな。今日はもう寝よう。』

新しい始まりと決意を胸に、一刀は眠りに入った。

「…ん」

「なんだ？何か変な声が…」

一刀の頭の中で何かが聞こえてきた。

「…だ…り」

「誰だ！！」

「ダーリン、気付くのが遅いわよん。」

「お前は…」

「分かりやすく言うなら、ダーリンをこの世界に連れてきた者よ。忘れちゃったのん？」

「あの時の！！」

「そんな事より、私との約束は守ってくれてるようねん。」

「あぁ。身の破滅に繋がる…だろ？」

「そうよん♪ダーリンが、なぁ～んの為に来たのかは絶対に言ってはいけないわよん。」

「敵は…五胡なのか？」

「それは私にも分からないわぁん♪ただ、十分に注意してちょうだいねぇ～ん。」

夢での再会（後書き）

そして、とうとうアイツを出してしまった。

…オリキャラだと思ってくれても構いません，笑

点検と大混乱

「う…朝…か？」

会話の終わりと同時に一刀は窓から射し込む太陽の光で朝と認識した…が身体に妙な違和感を感じていた。

「お，重い、身体が鉛のようだって…風ぅ！！」

当然である。一刀が目を覚ますとテイイクが覆い被さるように寝ていたのだから。

「おぉ！！お兄さん、おはようございますですよ～」

「はい、おはようございます…じゃなくてですね！！どうして風が？」

「それは魏の種馬であるお兄さんが昨日の夜に風に何もしなかったから、朝から異常がないか点検に来たんですよぉ～」

「点検？」

一刀は苦笑いしながらも、点検の意味が分からず首を傾げていたが、テイイクは一直線に何かを見て言った。

「どうやら朝からある意味、異常が発生してるようですが魏の種馬が健在のようで何よりですよ～」

「風…昨日して欲しかった？」

一刀の予想外の切り返しにテイイクが顔を赤くして俯くのだった。

そんなやり取りから少しの時間が経って玉座の間、凄い顔ぶれが集結していた。孫権・孫策・周瑜・陸遜・甘寧・呂蒙・周泰と孫呉を代表する者達である。玉座の真ん中には机のような物が置かれており、皆着席していた。

因みに陸遜の真名は隠。呂蒙の真名は亞莎。周泰の真名は明命。

勿論、一刀とテイイクも着席しており…孫権が話を始めた。

「風・北郷殿、おはよう。」

「はい、おはようございますですよ～」

「孫権さん、皆さんおはようございます…いきなりですけど…あの…」

一刀が苦笑いしながら、その場に立って孫呉の者達を見まわしながら言った。

「あの…堅苦しいのは苦手なので、俺の事は北郷か一刀と呼んでいただけませんか？」

一刀の発言に呉の者達がザワつく中で1人が元気に右手を上げて答えた。

「はいは～い！じゃあ、今日から一刀って呼ばせて貰うわね♪私の事も雪蓮で良いわよ。」

「ち，ちょっと姉様！！」

「こら雪蓮！簡単に人に真名を預けるな。」

「何よ～別に自分の真名をどうしようと勝手じゃない。ブーブー！」

更にザワつき始めた呉の者達、その状況を見て苦笑いする一刀…横にいるテイイクが一言

「お兄さんのせいで朝から大混乱ですね～。」

「やっぱり俺のせいだよね。」

そのザワつく中で周瑜が一刀に問い掛けてきた。

「北郷殿…どうして、急にそのような事を言われる。」

少し含みのある周瑜の一言に他の者達も静まり、一刀の方に視線をやっていた。だが、その中でテイイクだけは少し笑顔で一刀を見ているようだった。まるで一刀が何と言うか知っているように…

点検と大混乱（後書き）

とりあえず、風の点検…じゃなくて拠点フェイズらしきなものを終えて孫呉との座談会の始まりです。

やっぱり雪蓮は生きてなくちゃいけませんね♪

・注意

何人か携帯だと出せない漢字の子がいるのでカタカナで表記する事があると思いますが、申し訳ありません←←

三国同盟での結び付き（前書き）

暑い。本当に暑いですね。
でも小説を書いてる時は何も感じず、家のチャイムにも気付きません。笑

それぐらい、１話１話を本気で書かせていただいてます。

全ては作者の自己満の為に！！↑オイ！！笑

さて、とうとう私の小説も１０話に突入致しました。
ここまで読んでくれた読者の皆様には本当に感謝しています。

また、気軽に感想を下さると助かります。
ここ変じゃね？・誤字脱字報告等、どんな事でも構いません。

返事は必ず致します。

周瑜の言葉を受けて静まる孫呉の玉座の間…そして一刀は周瑜だけにではなく、呉の皆に言ってるかのように答えた。

「俺がこんな事を急に言ったのは先程も述べたように堅苦しいのが苦手という事もあります…が、他には昨日の事と孫権さんの先程の挨拶です。」

「昨日の事と私の挨拶？」

「はい。昨日の事というのは孫呉の玉座の間での風との再会です。」

その言葉を聞いた時に孫策・周瑜・陸遜は3人にしか分からないような視線のやり取りを交わしていた。

「それにどんな意味があるんですか？」

呂蒙は一刀が何を言いたいのかよく分かっていなかった。

「え…だって、孫呉の玉座の間ですよ？俺は怪しい者として捕らえられた立場でしたし、王の孫権さんが出てくる扉から最初に出てきたのが、風だったんですよ？」

「なるほどな。」

孫権は一刀が何を言いたいか分かった様子だった。

「絶対に普通はあんな事は有り得ませんよね?だから、それだけ三国同盟での結び付きが強い事を感じました。それに少しの間とはいえ、2人だけの状態って…」

「アハハ♪魏の軍師に魏の重要人物とはいえ孫呉の玉座の間に2人きりなんて少し前迄なら本当に笑っちゃうわよね。」

孫策が我慢もせずに、大爆笑していた。孫権はそんな姉にポカンとしながらも、内心は一刀の状況を見る能力に驚いていた。

「孫策さんの仰る通りです。そして先程の孫権さんの挨拶というのは…」

「真名ね♪」
「真名だな。」
「真名ですか?」
「真名ですよね~。」

一刀の言葉を先に述べるように孫策・周瑜・陸遜・テイイクが同時に答えた。

孫策は恐ろしい迄の鋭さだろうが周瑜・陸遜の2人はさっきの一刀の玉座の間の話を聞いて、状況を見る能力では軍師として負けられないという意地から口に出たのかもしれない。テイイクには初めから分かっていた。

「その通りです。孫権さんは挨拶の時に先に風と真名で呼んでからにも関わらず、俺は北郷殿と呼ばれました。これは明らかに風と俺への対応を意識して変えてると感じました。」

コクコクとテイイクが薄ら笑顔を出しながら小さく頷いていた。

「ご存知の通り俺は只の魏の人間です。天の御遣いなんて呼ばれてますが、魏の人間には変わらないのですから風のように真名…はありませんが北郷や一刀と気軽に読んで下さい。」

そう言いながら、一刀は深々と頭を下げた。

三国同盟での結び付き（後書き）

とりあえず…時間の進み具合が遅過ぎてスイマセン，笑

真名の理由

気付けば太陽は高く、あっという間に昼を過ぎていた。結局、一刀の事を北郷や一刀と気軽に呼んでくれるのは孫権・孫策・周瑜・陸遜・甘寧の5人になった。呂蒙・周泰も一刀が言いたかった事を理解しながらも、むしろ気軽には呼べないという事だった。また一刀に真名を預けてくれたのは孫策・周瑜・陸遜・呂蒙・周泰の5人であった。孫策は最初から真名を預ける気満々という感じだったが、周瑜・陸遜・呂蒙は孫策が預けてる事と一刀の洞察力への敬意も込めて真名を預けたようだ。周泰は孫策・周瑜が預けたという事に大部分が起因していた。孫策の妹であり、孫権は少し違った。

「べ，別に北郷殿に真名を与えたくないという訳ではないが、自分で天の御遣い北郷一刀という人物を見てからにしたい。」

「蓮華は相変わらずね～」

そんな孫権にうっすらと笑みを浮かべた孫策が直ぐに横槍を入れていた。甘寧は…

「現呉王である孫権様が真名をお許しになった時には、私も真名を授けてやる！！」

何故か一刀は凄まれた。隣で孫権が頭に手をあてて呆れてるように見えたが…一刀は見なかった事にした。昼食を摂って、昼からまた一刀達は玉座の間に来ていた。少し顔ぶれが減っており、孫権・孫策・周瑜・陸遜は同じだが甘寧・呂蒙・周泰の姿は見えなかった。

「北郷、皆忙しい身である為にすまない。」

「そんな、謝らないで下さい。むしろ俺なんかの為に時間を削ってしまい申し訳ありません。」

「一刀が何も気にする事ないわよ♪ね～蓮華。」

「姉様…静かにしてて下さいね。」

「一刀さんには聞きたい事が山ほどあるんですが、まずは…」

「真名だな。」

孫家の言い争いを何もない事かのように周瑜と陸遜が一刀に問いかけた。

「真名ですか？」

「あぁ、午前中の会話から察するに私達が気軽に風と呼んでる理由が分からないだろ？」

「それは三国同盟をしたという事のせいじゃないんですか？」

「桃香の案なのよ。」

桃香…劉備の真名。

少し呆れた顔で孫策も話に入ってきた。

「…劉備さんですよね？」

「そうですよ～。蜀王である桃香様が三国同盟が結成された時に仰ったんですよね～」

「何て言ったんだい風？」

「確か…せっかく三国同盟で私達は本当の仲間になったんだから、真名で呼びあう事にしましょうよ♪だったわよのね？」

「あれには華琳様も呆れてましたね～」

「ははは…劉備さん、らしいな」

真名の理由（後書き）

内容はふざけて書いてるつもりもなく、必要だと思ったので物語の中の時間では1時間ぐらいしか経ってないかもしれませんが書きました。

今更の解説になりますが、見てて下さってる方々の分かります通り一刀は魏の仲間達以外とは消える前は殆んど会話をしてない設定になっています。まぁ、同盟した後に直ぐに一刀は消えちゃいましたからね。

賊の討伐（前書き）

う～ん。

今回の話は直ぐに内容は浮かんでいたのですが、２０回近く書き直してしまいました←←

思うように自分の納得の出来る感じが出ず、本当にこの話は必要なのか…意味があるものに出来るのか…と悩みながらもようやく投稿出来ました。

あと小説なので私の地の文があるのは当たり前なのですが、少しでも恋姫の子達の会話を聞いて欲しいと考えて地の文は控え目です。

少しでもこの子達の会話の特徴が出せてればと思います。

一刀は劉備が話題に出た事で1つ思い出していた。

「あの…孫権さん。」

「どうした?」

「実は昨日の夜に風から聞いたのですが、三国同盟の決まりで将を孫呉なら魏と蜀に派遣してるんですよね?」

「その通りだ。」

「あの…蜀からは誰が来てるんでしょうか?昨日も今日も姿も名前も出てないのですが…」

何故か一瞬の沈黙が流れた。一刀は自分が変な事を言ったのかと不安になる。

「…北郷、蜀からは鈴々が来ている。」

周瑜が歪んだ微笑を表しながら答えた。

「アハハ♪冥琳そんな顔しないの。」

「張飛さん…の事だよね風?」

「そうですよ~」

張飛、真名は鈴々。

「凄い人が来てるんだね。全然、姿を見ないけど、鍛練でもやってるのかな？」

「あ～それはですね～」

「賊の討伐ですよ。」

「賊の討伐？」

「はい、この孫呉に限らず魏や蜀もだと思いますが、良からぬ事を考える方達はいつもいるものです。勿論、規模は小さいものですが…人間の欲には際限がないですからねー」

陸遜が分かりやすく一刀に教えてくれた。

「でも蜀の武将1人にそんな事をさせるなんて、三国同盟は本当に固い絆なのですね。」

「いや…1人じゃないんだが…な。」

孫権の眉間がピクピクしてるように一刀には見える。

「あ…あの、誰かと討伐に行ってるんでしょうか？」

聞いてはいけないのかもしれないが、一刀は勇気を出して尋ねた。

「小蓮よ♪」

「？」

「孫尚香ちゃんですよ～」

孫尚香、真名は小蓮。

「あ！！確か戦乱の時に戦った事が…あった…気がする。」

「あまり覚えてないようですね～」

「ごめんなさい。」

「別に構わないわよ♪でもそろそろ帰ってくるかもしれないわね。」

「予定より少し早いんじゃないか？」

「いや…私の勘が間違いないって言ってるわ。」

そんなやり取りを孫策と周瑜が行っていると玉座の入り口から周泰の声が聞こえた。

「孫権様、会議中に失礼致します！！孫尚香様と張飛殿がお帰りになられました！！」

「ほらね♪」

「はぁ、あなたといると本当に私は孫呉の大都督なんて呼ばれて良いのかと思うわ。」

一刀は孫策の勘の凄さに恐ろしさを覚えながらも、孫策と周瑜の会話を笑顔で眺めていた。

「分かった。直ぐに小蓮と張飛殿をここに来るように伝えてくれるか？」

「分かりました。」

賊の討伐（後書き）

さて、次回は小蓮・鈴々が初登場致します♪

少しでも2人の雰囲気が出せるように一生懸命に書かせていただきます。

嵐の2人（前書き）

さて、少し時間の経った小蓮・鈴々の登場です。

少しだけ、子供っぽさが消えた2人が表現出来ていればです。

嵐の2人

少し時間の経った玉座に2人が姿を現した。

「ただいま～雪蓮お姉ちゃん、蓮華お姉ちゃん。」

「鈴々が帰ってきたのだ！！」

「あ…張飛ちゃん、背が少し伸びてる。」

一刀も魏以外の国の将達とは面識は少ないが、流石に張飛はよく覚えていた。

「お兄さん、華琳様に全部報告しときますからね～」

「た，只、背の事を言っただけなのに…」

「小蓮おかえり～♪」

「も～雪蓮お姉ちゃん、いつまでもシャオは子供じゃないんだからね。」

嫌がる言葉を吐きながらも、孫策に抱きしめられる孫尚香は嬉しそうだった。

「鈴々。シャオがお世話になったわね。」

「鈴々は何もしてないのだ！」

「え～よく言うよ。１人で突撃！粉砕！勝利なのだ～！とか言って殆んど倒してたくせに～。お陰でシャオが全然活躍出来なかったじゃない！！」

「鈴々殿、小蓮様が世話になったな。」

流石の張飛も孫権と周瑜に言われ照れていた。

「それで蓮華お姉ちゃん、風の隣にいるのが天の御遣いの人？」

「…シャオ、あなたには何も教えてない筈だけど。」

「誰だって身なりを見れば分かるよ～。それに…」

「それに？」

「勘…かなぁ？何か天の御遣いが呉にいるかな～って♪」

「あなた…」

「なんだか、雪蓮さんみたいだな。」

孫権が言う前に一刀が先に声に出していた。その声に最初に反応したのは、本人の孫尚香である。

「雪蓮お姉ちゃん、真名を預けたんだ～♪ふ～ん♪」

呟きながら、一刀を見る孫尚香…そして彼女は言った。

「私は孫尚香、真名は小蓮よ。シャオって呼んでね、か～ずと♪」

玉座の間に一瞬の静寂が訪れた後に…孫権が爆発した。

「シャオ!!あなた何を言ったか分かってるの?まだ会って間もない人に真名を預けるなんて!!」

「別にシャオの真名を誰に預けたって良いじゃない!!」

「あなたはもっと次代の呉の王としての自覚を…」

「鈴々も預けるのだ!!」

孫権と孫尚香の話し中に平気で割り込む張飛。

「張飛ちゃん…預けるって?」

「鈴々の真名は鈴々なのだ!今日から鈴々はお兄ちゃんと呼ぶのだ。」

孫権は呆れて頭を抱えている。一刀もポカンと2人のペースに完全に流されていた。

『2人とも天真爛漫というか自由というか…凄いな。』

こうして嵐の2人から真名を授かった一刀だった。

嵐の2人（後書き）

シャオは私の感覚では小さい雪蓮です♪

悪い点・変えた方が良いのでは?と思った所があったら気軽に教えて下さいね。

感想の返事は必ず致しますので、多くの意見をお待ちしております。

質問と嘘（前書き）

ちょっと更新が遅れて申し訳ありませんでした。

決して、アニメを見てて忙しかったとかじゃないですよ（汗

さて、今回は少しだけ…本当に少しだけ話が進みます。

いつかの変態が出てきた時の中の会話を思い出してくれると、ありがたいかもです，笑

質問と嘘

嵐の2人の襲来で玉座の間が少し乱れたが、陸遜が2人から報告を聞くという事で2人を連れて出て行き落ち着いた。

「北郷殿、2人の非礼を許して欲しい。」

「い，いえ、俺は別に。」

言いながら、一刀は気づいた。此処には孫権・孫策・周瑜・テイイクしかいない事を…

「お兄さん、ここからは真剣にお願いしますね～」

「え？俺はいつも真剣に…」

孫権・孫策・周瑜に漂う雰囲気が今までとは明らかに違う事を一刀は感じた。

「北郷、今からお前に質問をしたい事が幾つかある。」

「昨日は風に独り占めにされちゃったからね♪」

「ふふふ♪そうでしたかね～」

「それで、何でしょうか？」

「まず1つ…天とやらから此処に来たのは昨日なのか？」

「はい、気づいたら呉の荒野に倒れていました。」

「ふむ…それで何で再び北郷は天から？」

「それは…勿論、魏の皆に会う為です！！」

一刀は嘘をついた。夢の中での声の通り、本当の事を言えば身の破滅に繋がる。

「噂通りの男なのね♪」

「え？」

「魏の種馬とか♪」

「あ…いや…」

「お兄さん、否定しないんですね～」

「雪蓮。場を乱すな。じゃあ、どうやって天から来たのだ？」

当たり前の質問である。

「あの…気づいたら、荒野で眠っていて…」

「いきなり連れて来られたとでも言うのか？」

「…はい。」

「それにしては不思議よね～」

またも孫策が話に乱入してきた。

「雪蓮姉様、何がですか？」

「だって一刀は魏の子達に会いに来たんでしょ？なのに昨日も今日の今までも『魏に行きたい』って一言も言わないじゃない。」

「雪蓮…私の言葉を取らないでくれるか？」

「ごめん、ごめん♪」

「…鋭いですね。雪蓮さん、冥琳さん。』

「お兄さん、少し考えれば誰でも分かりますよ～」

「そう…だよね。」

一刀は苦笑いでテイクの方を見た。

「それで、どうして北郷は何も言わないのだ。魏に帰りたいのではないのか？」

「それは…皆さん、自分に置き換えて考えてみて下さい。もし身体も許した男性が何も言わずに消えて、急に姿を現したらどうしますか？」

「間違って殺しちゃうかも♪」

「まずは拷問だな。」

「せ，説教だ！！」

…一刀は分かっていたが、女性の口から改めて聞くと冷や汗が出ていた。

質問と嘘（後書き）

雪蓮と冥琳の尋問…怖すぎますよね。

私には嘘を突き通す自信は…ない！！笑

因みに魏√ラストの一刀と華琳には号泣しましたが、何か？笑

御遣いの危険性（前書き）

え～ん。
スロットで負けちゃいました。

では、更新です♪
今回も会話が多いので誰が喋ってるか分かると良いですが…

御遣いの危険性

周瑜の軽い尋問後

「理由は分かった。少し納得出来ない点もあるが、聞かれたくないのだろうな。」

「…バレてましたか？」

「当然だ。」

ニヤっと嫌な顔をする周瑜に直視され目線を離す一刀

「それで、北郷殿はこれからどうするつもりなんだ？」

「呉に北郷がいるのを知ってる者は将以外では殆んど少ないが…」

「どうして伏せてくれたんですか？」

周瑜が話してる最中にも関わらず、一刀は切り出した。

「当たり前の事ですよ、お兄さん。」

「当たり前？」

「お兄さんは過去に魏を天下に導いた天の御遣いさんなんですよ～」

「別に導いたわけじゃ…」

「でも民にはそう思ってる人も少なくないのです。そんな人が今度は最初に呉に…しかも、同一人物の人がですよ～」

「…うん。」

一刀はテイイクが何を言いたいのかイマイチ分かっていなかった。

「つまり、呉が…三国が大混乱になる可能性があるわ。」

孫策が答えた。

「大混乱に？」

「そう、呉の民には今でも三国が魏によって統一された事を妬む者や、天の御遣いが来たなら今度は呉を天下にと思う者」

「魏の民なら最初に何故同じ御遣いなのに呉に？と思う方もいるでしょうね～」

「蜀の民なら、魏と呉に天の御遣いが来たのに蜀には…と思う者も少なくないという事か。」

「考え方によっては三国同盟が一気に崩れる可能性があるという事だ。」

一刀は黙ってしまった…が沈黙を破るように言った。

「魏に…魏に行きます！！」

「それが良いと思いますよ～」

「私も賛成♪もう天下に興味が無いって言ったら嘘だけど、今を気に入ってるのよね。」

「雪蓮！！…物騒過ぎるぞ。」

「雪蓮姉様、冗談が過ぎます！！」

「アハハ、ごめんなさい。でも今の魏なら…」

言いながら、孫策はテイイクを見て話を打ち切った…のだが…

「雪蓮さん！！今の魏ならってどういう意味ですか！！」

一刀が孫策の発言に突っ掛かった。

「あら一刀。怒っちゃった？」

「答えて下さい！！」

一刀は少し声を荒げていた。

「だって～今の魏って抜け殻みたいで、本当に呉と蜀の同盟軍があの魏に負けたのかしら？って感じなのよね。」

「風！！そんなわけ…ない…」

一刀はそれ以上何も言えなかった。テイイクを見れば俯いてしまっていたから…

「雪蓮も言い過ぎだぞ！！北郷すまない。別に魏は国としては相変わらず凄い国なのだが、どうも今は前に魏にあった覇気が感じられなくなっていてな。」

一刀は何も言えなかった。いや、言えるハズがなかった。原因は全て自分だったから…

御遣いの危険性（後書き）

書いて思ったのですが、ヤッパリ地の文を多めの方が良いですかね？
皆様、誰が喋ってるか分かってると良いのですが…

読者の皆様は地の文とキャラ達の会話のどちらが多い方が好きなんですかね？

感想を頂けると助かります。

しかし、雪蓮お姉様は怖いなぁ。笑
でも小悪魔的なとこが可愛すぎるんですよね♪

一刀は今、自分の寝台にいた。自分のせいで衰退したかもしれない魏…そして自分の存在。様々な事を考えていた。

「華琳…俺が帰りたくないと思わせる国にするって言ったじゃないか！！」

ドン！！

拳を強く寝台に叩き付けて、一刀は眠りに入っていった。

「此処は？」

「はぁい、ダ～リン♪」

「またアナタか。」

また、一刀の眠る意識の中に声だけが響いてきた。

「それにしても、危なかったわねぇ～ん。」

「あぁ、孫呉の皆は…特に雪蓮さんは恐ろしい程に鋭くてね。」

「とにかく、どうして来たのか？は絶対に秘密よん♪」

「もし…万が一に言ってしまったら？」

「間違いなく、あなたの身体に災いが起こるはよん。気をつけてねぇん。」

「災い？」

「そうよん♪いきなり消えたりとかはしないけれど…前にダーリンが消える時の頭痛よりも酷い事よ。そして、ご主人様は完全に消滅しちゃうわん。」

「…気をつけるよ。」

「とりあえず、そう遠くない未来に何かが起こるわよん。十分に気をつけてねん♪」

「何か…か。」

答えながら、一刀は目を覚ましていた。

コンコンコン

同時に一刀の部屋が何者かにノックされた。

「どうぞ。」

ギィィ

ゆっくりと一刀の部屋のドアが開けられた。

「お兄さん、起きてたんですね～」

「少し前にね。」

訪ねて来たのはテイイクである。

「いよいよ今日は魏にお兄さんの存在がバレますね～」

「そうだね…みんなどんな反応するのか、正直怖いよ。」

冗談で苦笑いする一刀の直ぐ横に座るテイイクが一刀の胸にもたれ掛かってきた。

「今日で唯一、魏でお兄さんの帰りを知ってる風の日も終わりですね～」

一刀はそんなテイイクを優しく抱きしめながら…

「風…」

口づけを交わしたのだった。

「お兄さん、今のは？」

「唯一、魏で俺を知ってくれてる風にご褒美だよ。」

…一瞬の沈黙の後にテイイクが…

「お兄さんのご褒美のような気がしましたけど、何も言わずに受け取った事にしておきましょう。」

テイイクの顔が少し赤みを帯びていた。

「さ，さて、行くか。」

「ふふふ♪はい～」

一刀とテイイクは並んで玉座の間に向かって行った。

風の日（風（後書き）

さて、いよいよ魏に一刀の存在がバレ始めますよ。

さて誰に力を入れようか。ニヤニヤ，笑

御遣いの移送準備

呉の玉座の間には孫権・周瑜・陸遜・テイイク・一刀の姿がある。

「ではこれより、天の御遣い北郷一刀殿の魏への移送についての会議を行う。」

「御意。」
「はーい。」
「はい～」
「よろしくお願いします。」

と、それぞれが声をあげる。

「まず、北郷は昨日も述べた通り危険な存在である事は間違いない。」

「そうですねー」

「そこでまず、北郷殿は魏に降り立った事にしたいのだが、皆の意見を聞かせて欲しい。」

「私は構わないと思います。呉の民に流星の目撃情報が多々ありますが、兵の方は思春の騎兵５００程ですし事の重大さを分かっているでしょう。」

「しいて言うなら、小蓮様と鈴々ちゃんには改めて言う必要がありますねー」

陸遜が周瑜の発言に付け足すように言った。

「つまり、次に呉の皆さんとお兄さんが会う時が一応、初対面という形になるんですね～」

「その通りだ。」

「何だか、ややこしいね。」

一刀が口を滑らすと、全員から『誰のせいで？』という目線をされ一刀はただ大人しく黙って聞いていた。

「じゃあ、次は魏ですね～」

「そうだな。」

「華琳には全て伝えるとして、口裏を合わせるのに1番適した将は誰になる風？」

「そうですね～」

「風が魏に居てくれたらな。」

一刀が余計な事を言うと、また全員から『テイイクは隣にいるだろ！！』という目線を浴びせられ何も言わずに決定に従う事にした。

「候補としては、秋蘭様・桂花ちゃん・霞ちゃんですかね～。凛ちゃんも適任だと思いますが、蜀に行ってますので。」

「私達には判断出来ないな。風と北郷殿で決めて頂きたい。」

「風、3年経って皆の性格は変わったのかい？」

「お兄さんは、風を見てどう思いましたか～？」

一刀は心の中で思った。

『多分、みんな悪くなってるかもしれないな～』

「お兄さん？」

「あ…あぁ、そんなに変わってないって事なら無難に秋蘭が良いんじゃないかな？」

秋蘭とは夏侯淵の真名。

「華琳様に伝えるにも秋蘭様なら大丈夫そうですしね～」

「よし。じゃあ、口裏を合わせる役は秋蘭に任せよう。風は華琳と秋蘭宛の手紙を頼む。」

「はいはい～」

「早くても手紙が着いて、返事が来るにも4，5日は掛かりますね～」

「北郷殿…街に出るのは流石に承諾出来ないが、城の中なら自由にして構わないので好きにしてくれ。」

「分かりました。」

一刀は夏侯淵からの返事が来るまでの間、呉の城で過ごす事になった。

御遣いの移送準備（後書き）

さて一刀は手紙を待つ間、城にいることになりました。

1回の更新で1日が経てればと思っています。…好きな子は長くなるかもしれません，笑

では呉のプチ拠点フェイズ…頑張ります！！

元気過ぎる2人（小蓮・鈴々（前書き）

さて、今回から秋蘭からの手紙待ちまでの間に呉の子達を出せればと思います。

簡単な拠点フェイズです♪

元気過ぎる2人（小蓮・鈴々

夏侯淵からの返事の手紙まで、城の中なら自由に出来るようになった一刀。会議も終わり呉の中庭に出て1人歩いていた。

コツン

「痛っ！！」

一刀の頭に何かが当たった。

「なんだ？小石？って誰だ！！」

周りには人の気配も感じられない一刀…しかし。

コツン

「痛っ！！」

頭を擦りながら一刀は両腕をあげて答えた。

「もう降参だ。誰かいるんだろ？出てきてくれないか？」

ガサガサ。そして茂みから出てきたのは見覚えのある2人だった。

「一刀ぉ～あんなのも避けれないのぉ？」

「お兄ちゃんはノロマなのだなぁ。」

「シャオちゃんに鈴々ちゃんだったのか。酷いじゃないか。」

「シャオちゃん？ちゃんはやめてよ～！！」

「鈴々も鈴々でいいのだ！！」

「了解。それで2人は中庭で何をしていたんだい？」

「鍛練よ。」

「鈴々がシャオに稽古をつけてあげていたのだ！！」

「稽古ぉ？完璧に苛めだったじゃない！あんなの避けるだけで精一杯よ！」

「にゃはは。」

「少し見ていっても良いかな？」

「もちろん♪」

「鈴々も構わないのだ！！」

2人が鍛練を行っていた場所に来て武器を構えれば、途端にお互いの顔つき・雰囲気が変わっていた。

「鈴々！！さっきまでのシャオだと思わないでよね！！」

「鈴々に1回でも当てれたら、考えてやるのだ！！」

「たぁぁあぁぁ！！」
「でやぁぁあぁぁ！！」

もう何分経っただろう。相変わらず2人は鍛練を行っているが流石は張飛、全く疲れが見えない。一方の孫尚香は流石に疲れが見えたが、それでも必死で頑張っているのが分かった。

「鈴々…もう疲れたぁ。」

「シャオはだらしないのだなぁ。」

「あんたが怪物なだけよ。」

孫尚香は大の字に倒れ、張飛も横に並んで倒れた。

…ペタッ

咄嗟に2人の頬に何かが触れて…

「つ，冷た！！」
「気持ち良いのだぁ。」

「鍛練お疲れ様。」

一刀が真上から濡らしてきた布を頬にくつけていた。

「一刀、ありがとう。」
「お兄ちゃん、ありがとうなのだ。」

２人の元気溢れるありがとうに一刀も笑顔で応えた。

しかし!!その後が最悪だった。

何故か流れで一刀も鍛練に参加する羽目になり、１日中２人に城の中を追いかけられて１日目が終わりを告げたのだった。

元気過ぎる2人（小蓮・鈴々（後書き）

如何だったでしょうか？

本当はもう少し長く書きたかったのですが、恐らく私の携帯とこのサイトの機能を上手く使えない私には精一杯です。笑

小蓮は3年経ったという事で少し武の方で成長してるという事で書きました。

まぁ、私の自己中な解釈だと小さい雪蓮なので強くなるのは必然だと考えてます。

さて…次は誰を書こうかな♪

猫と団子（明命・亞莎

「イタタタタ。」

昨日は孫尚香・張飛の鍛練…鬼ごっこで筋肉痛になりながら、今日も城を徘徊する一刀。

にゃ～ん

「猫…かな？」

一刀は鳴き声の聞こえた方に行ってみれば、２人の将の姿があった。

１人は猫の前で何やら身体をクネらしている。もう１人はその様子を見つめながら、お茶を啜っていた。

「こんにちは明命ちゃん、亞莎ちゃん。」

「はぅあ！！一刀様！！」

「か，一刀様！！」

２人の大きすぎる声に猫は何処かに消えてしまった。

「あうあう～」

「明命、いつまでも落ち込んでいてはダメですよ。一刀様に失礼です。」

「ごめんね、明命ちゃん。というか2人とも様はやめて欲しいんだけど…」

「良いんです!!私達の呉は魏に負けてしまいましたけど、今があるのも一刀様と魏のお陰なのですから。」

「それに一刀様、私達も年齢が年齢なのでちゃんはやめて欲しいんですが…」

「ごめんね。昨日、小蓮と鈴々にも言われたんだけど、可愛いからついね。」

「か，一刀様!!」
「噂通りのようですね一刀様」

「え?あ!!違う違う!!只、本当にそう思っただけだから。」

「か，可愛い…初めて言われました。」

周泰が顔を赤くしながらも、素直に答えた。

「ど，どう致しまして。」

一刀も周泰の一直線な感想に戸惑いながらも照れていた。

「ゴホンッ。」

何かを感じとったのか、呂蒙が軽く咳払いをした。

「そ，それで今日は2人はお仕事は休みなのかい？」

一刀も呂蒙の咳払いの意味に気づき直ぐに話題を変えた。

「いえ、私は昼から新兵の調練があります。」

「私も昼から冥琳様の部屋に行かねばなりません。」

「2人共、大変なんだね。もしかして、お邪魔しちゃったかな？」

「いえ、とんでもありませんよ。明命があんな状態だったので暇でしたから。」

「亞莎…ヒドイです。」

「あはは。」

「あの…一刀様？」

「なんだい、明命。」

「天の世界にもお猫様はいらっしゃるんでしょうか？」

「お猫様？」

「一刀様、猫の事ですよ。」

「あ，あぁ、いるよ。」

「おぉ～♪」

「明命？」

「それで、そのモフモ…じゃなくて…お猫様はみんなフカフカなのでしょうか？」

「フカフカ？」

一刀は苦笑いを溢していた。

「一刀様？」

「あぁ、フカフカのからフワフワやモフモフまで色々いたと思うよ。」

「ちょっと、一刀様！！」

ガシッ！！

「一刀様！！」

一刀の手を握る明命の目が恐ろしく燃えていた。

「な，なんでしょうか？」

「いつか私も天の国にお供させて下さい！！」

本気だ。…周泰の本気の目に一刀は煽り過ぎたと思いながらも、いつか行けたらと約束した。その後は何故か呂蒙に胡麻団子のレシピを教える羽目になり、昼からは誰にも会えず一刀はフテ寝するのだ

った。

猫と団子（明命・亞莎（後書き）

うでしたでしょうか？

書いてみて思ったのですが、亞莎のセリフは難しいですね。

閨に関してですが、非常事態が発生しない限りは魏意外の子とは一刀は寝かせません！！笑

2人の軍師（冥琳・隠）（前書き）

ここまで書いてきて、ようやく長文の書き方が分かったダメ作者です。笑

でも、文章の長さよりは中身優先で頑張ります→→

2人の軍師（冥琳・隠

「暇だ～」

一刀は今日こそ誰かに会いたかった。昨日は昼から誰にも会えずだったから…

『でも部屋を訪れる訳には行かないしな～』

思いながら、今日は城壁を歩いていた。

「しかし、凄い景色だなぁ～。日本で見た絶景にも劣らない景色だ。」

「そうなのか？」

「そんなに凄いんですかー？」

「え？」

振り向けば、そこには呉の軍師2人立っていた。

「冥琳さん・隠さん」

「そろそろ一刀さんがお暇だと思い会いに来ましたよ。」

「蓮華様に行って来いと言われてな。」

「孫呉には鋭い人が多すぎて、なんだか怖いですね。」

「蓮華様などヤツに比べれば可愛いものだぞ。」

「そうですよねー。」

苦笑いを浮かべる2人を見て一刀も直ぐに勘づいた。

「雪蓮さんですね？」

「ああ。」

「雪蓮様ですよー」

「雪蓮は私達と本当に同じ人間なのかと思う時があるぞ。」

「本当に私達軍師が必要なのかと思ってしまいますよねー」

「後で怒られますよ？」

「どうせ今は街をフラついてるに決まっている。」

「そういえば、魏にもいますねー。雪蓮様以上の鋭さを持った方が。」

「…華琳ですね？」

「ああ、なんせ華琳は雪蓮が率いていた呉を負かしたんだからな。」

「そう考えると恐ろしい事ですね。」

「刎ねられますよー」

「でも今のヤツには3年前までにあった覇気が今はまるでないからな。出来ないだろうな。」

「あの…今の魏ってそんなに酷い状況なんですか?」

「魏というより、魏の将達に問題がありますねー」

「何せ、魏王があの状態ではな。」

一刀は2人の話を聞いて、自分でも気づかない内に俯いてしまっていた。

「顔をあげろ北郷。お前が戻った事できっと魏は変わるんだろう?」

「風ちゃんも最初に来た時は政務の話の時以外は部屋すら出てませんでしたからね。」

「え?風が?」

「一刀さんが帰ってきた数日の間に随分と変わりましたから。」

まだ見えない脅威と戦う為にも、少しでも役立つ為に一刀は決心した。

「変えてみせるよ。覇気の漂う魏に戻してみせる!!」

「大きく出たな北郷」

周瑜が言いながら、ニヤリと陸遜を見ていた。

「呉だって負けませんよ。」

陸遜も言いながら、周瑜に目線を送っていた。

「北郷、この後に予定は何かあるのか？」

唐突に周瑜が言った。一刀は少し驚いたが、別に何もないので…

「いえ、何もありませんよ。」

「だったら、昼から私の部屋に来てくれないか？」

「え…あ、わ，分かりました。」

「それじゃ昼からな。」

「一刀さん、またー」

2人の軍師は城壁から去って、一刀は1人城壁にいた。

「魏の皆…本当にごめん。必ず力になるから。」

時間は経って一刀は周瑜の部屋の入り口に立っていた。

「何だか緊張するな…」

コンコンコン

「入って良いぞ。」

聞こえてくる周瑜の声

「失礼します。」

周瑜の部屋は誰の部屋でも大した差はないだろうが、一刀は何か気品を感じた。机に座る周瑜と向き合うように一刀も椅子に腰を掛けた。

「では率直に聞こう。」

「…はい。」

一刀は何となく何を聞かれるか周瑜の顔を見て分かっていた。

「3年前の赤壁での事なのだが…どうして私達の策があんなにも簡単に魏に見破られた?」

「それは…」

一刀は悩んだ。本当の事を話すべきかどうなのか。そして決断した。

「俺が…俺が教えたからです!!」

一刀は周瑜を一直線な眼差しで見つめた。

「教えた?」

「はい。俺の…天の国にいる者は知る事が出来るのです。」

「つまり始めから、知っていたというのか？」

「そういうことになります。」

周瑜は一刀の発言に驚いたが、同時に脱帽していた。

「しかし、あれ程までに完璧に見破られるとはな。北郷が持ってる知識を完璧に使いこなし、それに対応出来る魏の者達…強いな魏は。」

「ありがとうございます。」

一刀は自分ではなく、魏の皆が認められてる事に心から嬉しさを感じていた。その後は此方の世界と天の世界での違いを幾つか聞かれた。恐らく、軍師としての知的欲求というやつだろう。その夜、一刀はとても良い気分で眠りについたのだった。

2人の軍師（冥琳・隠）（後書き）

とりあえず、雪蓮姉様は恐ろしいという事です，笑

テイイクの疑問と返事

「う…動かない。」

一刀は眠りから覚めて僅かに目を開けた時に窓から射し込む光に気付き身体を起こそうとしたが…動かない。

「って風ぅ！！」

またも、朝からテイイクが一刀に覆い被さっていた。

「おぉ、お兄さんおはようございます～」

「おはよう…じゃなくて、どうして風はここにいるのかな？」

「それは…なんとなくですよ～」

「なんとなくで朝から覆い被さらないで下さい。」

それに3年の間に成長したテイイクの身体が一刀に思い切り当たっていた。

「やっぱり、お兄さんは朝からとんでもない種馬さんみたいですね～」

テイイクは一刀のアレに気付いたらしい。

「ち，違う！！これは健康な男なら朝はこうなるの！！いいから、

早くよけてくれ。」

「まったく、お兄さんは朝からセッカチさんですね～」

覆い被さりながら、テイイクは何故か一刀の上着に手を掛けて脱がそうとし始めていた…その時！！ある声が響いた。

「風！！やめろ！！」

ビクッ

テイイクは突然の大きな声に身体が固まってしまった。声の主は一刀である。

「あ、いや…ごめん。」

一刀から降りてちょこんと座るテイイクは黙ってしまった。

「ふ，風、違うんだ。風が嫌いになったからとかじゃなくて…」

「だったら証明して下さい。お兄さん。」

一刀の言葉を遮るようにテイイクは言った。その言葉に行動で示すしかないと思い、座るテイイクの後ろから包み込むように抱きしめた。

「風、ごめんな。」

テイイクは一刀の言葉に静かにゆっくりと頷いた。

…

「で風さん、いつまでこうしていれば良いんでしょうか？」

どれぐらいの時間が経ったのだろうか。一刀はまだテイイクを抱きしめてる状態だった。テイイクが無言で一刀の腕を掴んでいたので離れられなくなっていた。そんな一刀の言葉も聞かずにテイイクは考えていた。さっきの一刀の声の意味を…

『お兄さんのあんな声…聞いたの始めてですね～。風が嫌いになった訳じゃないみたいでけど、ビックリしましたね～』

「風さん？」

「お兄さんは温かいですね～。大きな声にはビックリしましたが、この温かさは本気で風を包んでくれてるからだと信じてますよ。」

「風…」

一刀は更に優しく力強くテイイクを抱きしめた。

「そういえば、風はどうして朝から俺の所に？」

「そうでした～。秋蘭様から返事があったみたいですよ。」

「…え～！！」

テイイクの疑問と返事（後書き）

さて、いよいよ秋蘭からの返事がやって参りました。

そして一刀が何故に風にあんな事を言ったのか…実は今までの私の小説の中にヒントがあります。

では、次回も良かったら楽しみにして頂ければ幸いです。

一刀は今、玉座にいる。他には孫権・周瑜、そしてテイイクがいた。

「知っていると思うが、秋蘭から返事が来た。そこで、これからの北郷殿の動きについて話し合いたいと思う。」

孫権のこの言葉から話し合いが始まった。

「ではまず風、秋蘭との打ち合わせについて私達に話してくれるか？」

「はいはい～。秋蘭様とは5日後に魏と呉の国境にて会う予定になってます。秋蘭様は本当に信用の出来る兵を数名だけ引き連れてくる手筈になってますよ～」

「5日後か…冥琳、出発は明日で大丈夫か？」

「その前に北郷…お前、馬には乗れるのか？」

「な，なんとか。」

「お兄さん、確か前も華琳様に怒られてませんでしたっけ？」

「向こうの世界じゃ馬になんて、そうそう乗る機会がなくてね。」

「とにかく乗れるのなら、明日の出発で十分に間に合うでしょう。」

「ふむ、じゃあ呉からは北郷殿を国境までどのような軍で運ぶかだが…」

「蓮華様、やはり此方も重要な人物の護衛という雰囲気は出さないように少数精鋭が良いと思われます。」

「そうだな。民達に北郷殿…天の御遣いを見られては今回の作戦の意味はなしか。」

「冥琳、適任は誰だと思う？」

「やはり、思春・明命が適任だと思われます。」

バン！！

玉座の間に突如、扉の開く大きな音が響いた。

「それ、私が行きた～い♪」

そして、少し色黒な身体に桃色の綺麗な髪を靡かせながら、１人の女性が入ってきた。

「ね，姉様！！」

「雪蓮！！」

「やっほ～。面白い話が聞こえたから、乱入しちゃった♪ねぇ冥琳、行っても良いでしょ？」

「論外だ。」

「何よ～別に良いじゃない！！」

「姉様、前呉王という身分をお忘れにならないで下さい。」

「だから行くんじゃない♪」

「え？」

「呉は私からアナタに王は代わったわ。少しキツい言い方になるけど、その事に納得の出来ない民がいるのも事実。だから、呉の地は他の2国に比べて賊も多い。」

「で，ですが、何も姉様が行かなくても…」

「蓮華…別に呉王は確かに譲ったけれど、江東の小覇王まで譲った覚えはないわよ♪」

そんなやり取りの最中の一刀・テイイクは…

「お兄さん、口が開いてますよ～」

「あはは、雪蓮さんって本当に天真爛漫というか自由奔放というか圧倒されるよ。」

「確かに雪蓮様のような方は魏にはいないですからね～」

話は孫策達に戻り…

「姉様はダメと言っても、どうせ行かれるんですよね？」

「うん♪」

「雪蓮!!…絶対に死者を出すんじゃないぞ!!」

「死者!!」

一刀は黙ってるつもりだったが、周瑜の口から出た死者という単語に反応した。

「冥琳さん、死者ってどういう事なんですか?」

「あぁ、雪蓮は北郷を送った後に自分の妹の呉王に納得出来ない者達を軽く皆殺しにしてくる気らしい。」

「み,皆殺しって…ちょっと雪蓮さん!!」

「冥琳!!一刀がビックリしちゃってるじゃない!!」

「だが…違うのか?」

「…違わないけど♪」

「ちょっと、姉様!!」

「アハハ、冗談♪ただ…一刀を送る任をくれないと本当に皆殺しにしたりして♪」

「北郷殿・風、見苦しい姿を見せてすまない。北郷殿、付き添いは雪蓮姉様でも良いだろうか?」

「あ，はい！！前呉王が同行してくれるなんて心強過ぎますし。」

「一刀、よろしくね♪」

「北郷！！雪蓮が問題を起こした時は魏に着いてから、全て文章にして呉に送ってくれ。」

「冥琳の鬼ぃ～！！」

「あの、雪蓮様～」

「なに、風？」

「お兄さんに襲われたら、魏に報告をお願い出来ますか？」

「ち，ちょっと風！！」

「了解♪でも…私から襲った場合は報告しなくて良いのよね？」

孫策の満面の笑みでの爆弾発言に玉座は一瞬で凍りついた。テイイクも予想外の切り返しに動揺を隠せていなかった。

「ち，ちょっと冗談よ！！確かに真名を預けてるけど、深く知らない男に私が…」

孫策はチラっと一刀を見た。

「身体を預けるわけ…ないわよ。」

「ちょっと、姉様！！今の間はなんですか！！」

騒ぐ孫権
頭を抱える周瑜
ニヤニヤしてる孫策
未だに固まるテイイク
場の空気に流され、口が半開きの一刀

の会議により、明日の天の御遣い出発は一刀と孫策と最精鋭の騎兵達となった。

荒らぶる小覇王（後書き）

雪蓮姉様好きです！！
このやり取りが最高に好き。

でも好きだから、一刀の護衛に雪蓮を選んだわけじゃないですよ？

もちろん、訳アリです。

魏へ

今日は一刀が魏に出発の日。城門には一刀と孫策に他の将達も集まっていた。

「一刀、そろそろ行くわよ♪お別れは済んだかな？」

「雪蓮、少し待ってくれ。」

一刀は孫策から、さんはやめてと言われて呼び捨てで呼べるようになっていた。そして孫策を待たせながら、一刀は頭に人形を乗せた小さな軍師を探していた。

「いない。…風、来てくれてないのか？」

一刀は少し落ち込みながらも、直ぐに会えると信じて気持ちを高めた。

「じゃあ、出発ぅ♪」

孫策の元気な声と共に一刀と兵達が出発した。

少し時間を遡り魏では…

テイイクからの極秘の手紙を持った夏侯淵が曹操の部屋を訪れようとしていた。

魏へ（後書き）

さて、いよいよ一刀には魏に向かって頂きました。

無事に魏に着けるかは内緒ですが、魏に着いた時には魏の子達との良い再会が描ければと思っています。

次回からは風からの手紙が届いた魏の内部を少し書こうと思っています♪

何か悪い点があれば気軽に感想で頂けると更にやる気も出るので良かったら、感想下さいね。

返事は必ず致します＞ｍ（＿＿）ｍ＜

極秘の手紙

コンコンコン

「華琳様。」

曹操の耳にノックと一緒に1人の声が聞こえた。

「秋蘭？入りなさい。」

「失礼します。」

「何かあったの秋蘭？」

「先程、華琳様と私宛に呉にいる風から極秘の手紙が届きました。」

「風から極秘の？一体、何かしらね？アナタはもう目を通したのかしら？」

「いえ、先に華琳様にと思いまして読んでおりません。」

「そう。だったら、アナタも読みなさい。極秘なのだから、早急に見るべきだわ。」

「はい。」

曹操は夏侯淵から手紙を受け取り手紙に目線を移し、夏侯淵もその場で自分の手紙を読み始めた。

極秘の手紙（後書き）

短い文章で申し訳ありません。

でも、駄文を書くぐらいならと思い短く致しました。

まぁ、「全部駄文だろ！！」と言われればそれまでなんですけどね，

笑

次は華琳と秋蘭の手紙の中身だけで更新が終わると思います。

風の手紙（華琳へ（前書き）

まずは、華琳様宛の手紙を内容を書かせて頂きました。

一応ですが、『』は心の中の言葉です。

風の手紙（華琳へ

華琳様、お久しぶりです。

呉に派遣されているテイイクでございます。

急な手紙を申し訳ありません。

きっと今は秋蘭様と華琳様のお部屋で一緒に見られてると思います。

『流石ね、風♪』

では本題に入らせていただきます。

今の魏に…華琳様に…そして私達将に…必要な者が先日、帰って参りました。

『必要な…者？』

恐らく既に華琳様の予想されてる彼で合ってると思います。

『風…冗談…よね？』

曹操の目が途端に熱くなっていた。

詳しくは分からないのですが、何故か彼は呉に舞い降りてしまいました。

華琳様ならそれがどういう事かよく分かりますよね？

『あのバカ…帰ってきた早々にやってくれたわね。』

なので、此方からは勝手に秋蘭様を選ばせて頂きました。

『なるほどね♪私と秋蘭以外は全員騙すのね。ただ、気付く子もいるでしょうね。』

詳しい事は秋蘭様の手紙に書きましたので、お聞き下さい。

…

…ここから風の独り言を書き記させて頂きます。

華琳様には申し訳ありませんが、1番にお兄さんに抱きつかせて頂きました。報告しましたから、お仕置きはなしにしてくれると嬉しいです。

『さて、どうしようかしらね♪』

それでお兄さんに抱きついて思ったのですが、私達同様にお兄さんも少し成長してるのですが…少し…痩せた気が致します。

『そう、痩せたのね。』

あと1度、お兄さんに思い切り怒鳴られてしまいました。

『あの一刀が…風を怒鳴ったですって！！』

風にはちょっと理由が分かりませんでしたが、お兄さん…何やら怪しい所が幾つかあります。もしかしたら何かを隠してるのかもしれません。

華琳様、お兄さんを宜しくお願いします。

曹操は手紙を読み終えて、目を瞑りながら天井を見上げた。

覇王としての曹操と1人の女の子しての曹操が心に渦巻く中…曹操は目を開けた。

風の手紙（華琳へ（後書き）

地の文も混ざり、見辛い文章になってしまい申し訳ありません。

次は秋蘭宛の手紙です。

風の手紙（秋蘭へ

秋蘭様、お久しぶりです。

呉に派遣されてるテイイクでございます。

急な手紙を申し訳ありません。

率直に申し上げます。

お兄さんが、帰ってきました。

『な，なん…だと！！』

夏侯淵は信じられず、もう1度同じ文を見た。

『北郷が…帰ってきた。』

夏侯淵は近くに曹操がいるのも忘れて既に涙を手紙に溢していた。

流石の秋蘭様も涙を流されたれたんじゃないですか？

『風…鋭すぎるぞ。』

涙を流しながらも、夏侯淵は続きを読み始めた。

それでお兄さんを呉との国境まで少数精鋭で迎えに行って貰いたいのです。

『呉の？少数精鋭？別に構わないが、何で私なのだ？』

恐らく秋蘭様には幾つか疑問が浮かんでると思いますが、華琳様に聞いて貰えれば全て解決すると思います。

『風…本当に性格が悪くなったな。確かに風の言う通りなのだが…』

確認出来ましたら、直ぐに呉へと返事の手紙を出して下さい。

夏侯淵は手紙を読み終えると、其処には目を輝かせる覇王がいた。

風の手紙（秋蘭へ（後書き）

とりあえず…風の口調を手紙では表せないので、文章で特徴を表してみました。

どうでしたかね？

短い文での更新が続きましたが、次からは少し長くなると思います…多分，笑

見えない涙（前書き）

どうやら、私の友達もこの小説を読み始めたみたいで更に気合いを入れて書いております。

知り合いが読んでると分かると、何だか緊張しますね，笑

さて頑張ります→→

見えない涙

手紙を読み終えた曹操・夏侯淵

「秋蘭…目が赤いわよ。」

「…華琳様もですが？」

曹操・夏侯淵はお互いに顔を見合い微笑を交わしていた。

「どうやら北郷が帰ってきたようですね。華琳様。」

「ふふ♪今更、何しに来たのかしらね？」

曹操は強気な笑みを浮かべていたが…

「華琳様…目から…」

「今だけは、見えない事にして頂戴。」

「…かしこまりました。」

夏侯淵は曹操らしいと思いながら、曹操が話すのを静かに待った。

「ふぅ～。」

「華琳様？」

「さて、風の手紙の通りに私達は動くわ！！」

「そういえば華琳様に幾つか質問があるのですが…」

「良いでしょう。」

曹操は夏侯淵の質問にスラスラと答えた。一刀が呉にいる意味・どうして夏侯淵なのか。

「なるほど。そういう意味があったのですね。つまり北郷は魏に再び舞い降りた事にするんですね？」

「そうよ。しかし、あの子…この私を試したわね。」

「風がですか？」

「えぇ。だってこの手紙…肝心な所は、私なら分かると思うと書いてるのよ。」

「私の方は、全て華琳様に聞くよう書かれておりました。」

「…あの子…帰ってきたら、お仕置きね。」

夏侯淵は久しぶりに見た。曹操のこんな笑顔を…そして感じた。北郷の帰りを最も喜んでいるのは曹操に違いないと。

「じゃあ、秋蘭には呉との国境の警備という事で向かって貰うわね。」

「はっ！！」

「一刀は秋蘭の警備中に魏領で拾った事にしましょう。」

「北郷が引き渡されたら、兵に市民の格好をさせて天の御遣いが帰ってきた事を広めれば良いですか？」

「それで良いわ。では、直ぐに動きなさい。」

「御意。」

夏侯淵が返事の後に直ぐ曹操の部屋を後にした。

「一刀が…帰ってきた。一刀が…」

曹操は改めて口に出した。

『3年前にアナタが消えてからの私は…只の腑抜けだわ。何がアナタが帰りたくないような国にするよ！！何が物語の主人公になるよ！！』

「笑っちゃうわよね、一刀。きっと雪蓮達からも今の私は駄目とか聞かされたかしらね。でも…アナタの存在が私の中で大きくなりすぎていたのよ。」

曹操は俯きながら立っていた。

「居なくなって改めて気づくなんてね。」

そう言って曹操も自室を後にした。

見えない涙（後書き）

いよいよ、魏も一刀の帰還に向けて動き始めます。

次回は魏の子達を登場させていく予定です。

変わった者達（春蘭・季衣

曹操と夏侯淵が部屋で手紙を読んでいる時、１人の女性が今日も自室で天井を見ながら想っていた。彼女の名前は夏侯惇、真名は春蘭

「一刀…貴様、いつまで待たせる気なんだ？華琳様を…秋蘭を…そして…」

夏侯惇は一刀が消えてからは、いつもこの調子である。もちろん鍛練や新兵の調練等は武官として真面目に行っているのだが、それ以外では自室にいる事が多くなっていた。

「もう何日だ？…あの日、宴の最中に急に私達魏の将は集められ、華琳様のあの悲しい顔を見てから…」

あの日を夏侯惇は忘れた事がない。妹の夏侯淵が必死に涙を堪え、あのジュンイクでさえ涙を溢していた。他の将達も泣き叫ぶ者、認めぬ者、黙る者等、皆が見たことない顔をしていた。そして、そんな将達を見つめる曹操の悲しい顔を見て夏侯惇の眼からも自身の気づかぬうちに涙が流れていた。

「あの日から…皆、おかしくなってしまったんだぞ。私も…」

コンコンコン

突如、夏侯惇の部屋がノックされた。

「春蘭様ぁ！！いますかぁ～！！」

部屋の外から聞こえたのは許緒、真名は季衣の元気な声だった。

「もうそんな時間か？」

許緒はいつもお腹が空くと夏侯惇を呼びに来ては一緒に街に出掛けていた。多分、夏侯惇を心配しての事だろう。勿論、夏侯惇も気づいてるが何も言わない。

「春蘭様ぁ。今日は何か食べたい物ありませんか？」

「私は何でも良いぞ。」

2人は外に出てきた。

「分かりました。じゃあ、あそこの屋台で良いですか？」

許緒が屋台を指差した。

「いやっ、昼間から屋台は…」

「春蘭様ぁ、何でも良いっていったじゃないですかぁー」

「あぁ、すまんすまん。でも屋台以外にしてくれないか？」

「はーい！じゃあ、今日は天気も良いので肉まんを食べ歩くというのどうですか？」

「肉まん…」

「春蘭様？」

「う，うむ、分かった。肉まんにしよう。」

「じゃあ今から買って来るので、待ってて下さいね！！」

許緒は肉まんの店主目掛けて、凄い早さで駆けていった。

「肉まん…か。」

夏侯惇は肉まんは別に嫌いじゃないのだが、嫌だった。理由は…

「春蘭様！！買ってきましたよ♪」

「早いな季衣。…それで足りるのか？」

許緒は肉まんを7つ買ってきた。3個を夏侯惇に、4個を自分で食べる為に。

「全然、足りますよ。今日は調練も軽めでしたし。」

許緒が肉まん4個というのは、魏に住む者なら吃驚する程少ない事が分かる。

「そ，そうか」

許緒もまた3年前から、食べる量が減っていた。前迄なら店に入れば採譜の端からは端までと平気に注文するようなだった彼女だったのに。

「美味しいですね♪春蘭様。」

「あぁ。」

春蘭は空に向かって大きく心で大声を出した。

『一刀!!早く帰って来い!!』

変わった者達（春蘭・季衣（後書き）

時間が経ったという事で春蘭を少し大人っぽくしてみましたが…伝わってると良いですが…

季衣が肉まん４個は本当にあり得ないですよね。
一刀が帰った時には…たくさん食べて貰う予定ですよ♪

変わらない？者達（桂花・霞（前書き）

更新が少し遅くなってしまいました。

さて、とうとう２０１１／８／８，現在で恋姫で私が１番好きな桂花たんの登場です♪

あ～お持ち帰りしたい，笑

変わらない？者達（桂花・霞

同じ頃、彼が消えた場所…今は魏の者以外が立ち入り禁止の場所に1人の将が来ていた。派手と言えない猫耳頭巾を被り、手には大きな本を抱えながら…彼女の名前はジュンイク、真名は桂花。ジュンイクはその場所にある大きな石に腰掛けた。

『全く!!どうしてこんな遠くて、しかも森で消えてるのよ!!来るのが面倒じゃない!!』

思いながらも、魏の中でこの場所に1番訪れているのは彼女かもしれない。

「消えてからも私に迷惑を掛けるなんて、何様なのよ。これだから、男は嫌いなのよね!!」

ジュンイクは言った。…絶対に無い筈の返事を待ってるかのように。

「ちょっと聞いてるの？この全身精液男!!アンタのせいで華琳様も全然元気ないじゃない!!アンタが消えてから何か分からないけど、華琳様のお仕置きもないし、つまらないのよ!!」

ジュンイクは熱くなり始めて、一刀への罵倒が止まらない。

「何か言い返してみなさいよ!!この動く性器!!万年発情期男!!北郷一刀!!」

「もう、その辺で許してやりぃ～なぁ。」

ジュンイクが罵倒に集中してる最中、茂みから声と同時に1人の女性が歩み出てきた。彼女の名前は張遼、真名は霞。

「霞！！」

「驚かせて悪かったなぁ。いやぁ～魏の性悪軍師様の涙が見れると思いきや…相変わらずやな桂花」

「フン！！私があんなやつの為に泣くわけがないじゃない。」

「ホンマきついなぁ～」

「霞は何しに来たのよ？もう時間？」

「ウチは帰る前に一刀を肴にコレや。」

言いながら、ジュンイクに見せるように張遼は盃を掲げた。

「本当に呆れるほど好きね。身体壊すんじゃないわよ。」

ジュンイクは立ち上がり、立ち去ろうと歩き始めた。

「酒がないと…ウチ…ダメになってしまうねん。」

「何か言った？」

「い，いや、きぃーつけてな。」

「聞こえてるのよ…霞」

変わらない？者達（桂花・霞（後書き）

ジュンイクのイクの漢字が出なくて作者大ショック←←

あと小文字の「あいうえお」や「ー，～，！，？，♪」は今更ですが、キャラの雰囲気を出す為に使っています。

気に食わない！！という方は気軽に感想に。多い場合は訂正も考えます。

氣（凪・真桜・沙和

また同時刻、城の庭では鍛練？と呼んで良いのか分からない鍛練が行われていた。

「はぁぁあぁぁ！！」
「どおりゃあぁぁ！！」
「たぁぁあぁぁ！！」

この声の主達は…

楽進、真名は凪
李典、真名は真桜
于禁、真名は沙和

の3人である。そして、この3人の相手は蜀から魏に派遣されている呂布だった。呂布、真名は恋。しかし、これは鍛練と呼べるのだろうか？楽進・李典・于禁の3人は自分の武器を使用し、呂布は素手であった。しかし、実力は誰の目から見ても明らかである。呂布は舞うように3人の攻撃を避けては全て直前で拳を止めていた。一方の3人は全力で呂布と対峙している為に息も切れ始めていた。

「恋様、流石ですね。」
「凄すぎるやろ。」
「怪物…なの。」

そんな3人の声を聞いた呂布は静かに答えた。

「…やめる。」

「え?」

「はい?」

「なんでなの?」

「これ以上は…無駄」

この呂布の言葉に激怒したのは楽進だった。

「恋様!!無駄とはどういう意味です?まだ始まって間もない筈ですが…」

「怪我…するだけ。」

「私達がですか?」

コクッ

「それは恋さまに比べれば、私達は大した事はないのかもしれませんが…」

楽進は言葉を止めた。いや…止めざる得なかった。呂布が恐ろしい殺気を放ったからである。瞬間、楽進は後ろに大きく飛んで呂布との距離を取った。李典・于禁はその場で殺気に当てられ動けずにいた。

「恋様、何をなさる気ですか!!」

「思い出した?昔?」

呂布が話した時には既に殺気は消えていた。

「昔？なんの話なの？」

「…戦ってた…時」

「三国で戦ってた頃の事かいな？」

コクッ

「みんな…氣…出してた。負けない…勝つって。」

「そうですが。」

「でも今の3人…何も感じない。恋…戦えない。3年前あった…」

呂布はそう言うと、スタスタと何処かに歩いて行ってしまった。そして3人だけが残った。最初に発言したのは于禁だった。

「もう！！恋様、殺気出すし怖かったの～」

「ホンマ、足が動かんかったわ。しっかし、恋さまの感覚は恐ろしいなぁ。」

「全くだ。私達が本当に本気を出せても傷1つ負わせられるのかどうか…」

「前ならあった氣、無くなった原因言うたら1つしかないやん。」

「隊長…」

楽進が俯きながら、口から溢した。

「凪ちゃん!!ダメなの!!」

「凪ぃ、しっかりしいや!!」

「あぁ、すまない。もう隊長の事は言わない約束だったな。」

3人は決めていた。隊長…一刀が消えてから3人は泣き叫び、最初は消えた事を認められなかった。そして決めた。一刀の話題は話さないようにする事を…自分達の中だけの想い出にする事を…

「恋様には一瞬でバレちゃったの。」

「あの人はしゃ〜ないわ。」

楽進はそんな2人のやり取りを聞きながら、願っていた。消えた日から毎日のように一刀の笑顔が見れる日を。

氣（凪・真桜・沙和（後書き）

やっぱり、凪に一刀を忘れるのは絶対に無理ですよね。

恋の強さは当然、三国？1です♪

血の出る世界

此処は呉の荒野。一刀・孫策の2騎を先頭に騎兵達は軽い土煙を上げながら、魏との国境に向けて駆けていた。

「かずと～」

「どうしたの雪蓮？」

「このまま行くと賊と鉢合わせしちゃう気がするんだけど～どうする？」

「え？賊？」

「多分…ね♪」

一刀は考えた。本心は勿論、戦いたくない。邪魔になるだけだし、万が一にも死ぬかもしれない。でも此処は呉の領、そして隣にいるのは江東の小覇王、魏の覇王曹操だって自分の領に賊が出たらと…

「雪蓮！！」

「ん？」

「このままで良いよ。」

「了解♪」

「只、俺は見ての通り全然戦えないから情けないけど戦闘はお願いね。」

「勿論♪華琳の持ち物に怪我なんてさせたら…魏にも呉にもいられなくなりそうだし。」

それから少し時間が経って、森に入ると森の奥から賊の笑い声が聞こえてきた。

「本当に賊だ。」

「ね♪」

一刀達は茂みに潜んで遠くに見える賊達を眺めながら、兵の報告を待っていた。

「前にこっちの世界にいた頃を思い出すよ。」

「どうして？」

「だって向こうの世界には賊…違う族ならいるんだけど、剣なんか普通に持ってるやつなんていないから。」

「天は平和なのね♪」

そんな雑談を話していると兵士から報告があった。賊の数は８０人弱で、只のゴロツキの集団らしい。

「俺達より多いな。」

「そうみたいね♪」

一刀達は一刀と孫策を抜いて兵は５０人である。勿論、その５０人は軍の中でも精鋭中の精鋭であった。

「雪蓮、どうするんだ？まずは話し合いか？とりあえず近くに援軍を？」

「一刀は此処にいて。一刀には兵士を5人つけるから♪」

「分かった。」

一刀が答えると孫策は後ろに下がり、少しすると護衛の兵が一刀の近くにやってきた。

「よろしくお願いします。」

一刀は頭を下げて、また賊達に目線を送りながら護衛の1人に話し掛けた。

「あの…」

「どうしました？」

「しぇ…孫策さんは賊達をどうするつもりなんですか？」

「恐らく孫策様は…見てれば分かりますよ。」

護衛は少し困ったような顔をしながら、賊を見てるよう一刀に促し

た。次の瞬間!!一刀は目を疑った。なんと堂々と孫策が1人で賊達の前に現れていた。

「はぁ～い♪こんにちは。私は孫策伯符、今の呉王の孫権仲謀のお姉ちゃんで～す♪」

「なんだ、この女は?馬鹿か?」

「それにしてもお頭、凄い上玉ですぜ。」

一刀からは孫策が何をやってるか分からないが、右手を上げているのが見えたので話し合いを要求しているのだと思っていた…が、しかし!!

「アナタがお頭なのね♪」

「あぁ?だからどうし…」

「雪蓮!!」

一刀が叫んだ時には遅かった。孫策の恐ろしく早い踏み込みと同時に賊のお頭の首が刎ねられた。

「はぁ～い♪オシマイ♪」

その孫策の言葉と同時に孫策の後ろの林から兵達が現れ賊は沈静化された。賊の中に抵抗する者はいなかった。何故なら、孫策の無邪気なまでの笑顔と恐ろしい覇気に当てられていた。一刀は遠くからこの光景を見ていて改めてこの世界に再び来た事を感じた。

血の出る世界（後書き）

さて、雪蓮姉様には早くも刎ねて頂きました♪

この話の狙いは一刀が前に舞い降りた時は戦いの多い時であり、当たり前に血を流す者がいた事を思い出して貰う為に書かせて頂きました。

「まずいな…」

突如、周瑜が言った。

「冥琳様、どうしましたかー？」

此処は城の庭…雑談をしているのは周瑜・陸遜である。

「雪蓮の事だ。」

「雪蓮様がどうかしたんですか？」

「雪蓮は確か北郷を送った帰りに軽く皆殺しにしてくると言っていたよな？」

「…まずいですねー」

「気づいたか？隠。」

「雪蓮様のアレですね。」

「万が一にも北郷を届ける前に賊にでも遭遇してみろ…北郷の身体が危ない。」

「確かに最近の雪蓮様は全く外にも出てませんでしたから、賊に会っただけでアレが出ちゃうかもしれませんね。」

「とりあえず北郷を送り届ける迄には間に合わないが、今から兵を送って帰りは真っ直ぐ帰るように言うしかあるまい。」

「一刀さんがいる間は何事もないと良いですけど…」

そんな呉の軍師2人の心配を他所に、既に賊に出会った一刀・孫策は…

「あの～兵士さん？」

一刀が周りにいる兵士の1人に声を掛けていた。

「孫策さんは何で1番後ろに移動したんでしょうか？」

賊に会ってからの一刀達の移動の編成は大きく変わっていた。呉を出た時には、一刀・孫策の2人の騎馬を先頭に後ろに兵達の騎馬を引き連れる感じだったのだが…何故か、賊に会ってからの移動は一刀の騎馬を中心に周りに兵達が包むように変えられ、孫策は1番後ろに配置されていた。

「あ、いや少し事情がありまして…」

どうも兵達の歯切れが悪い。一刀もその事に気づいていたが、時折に後ろを振り向くと見える孫策の姿は変わらないように見えたので大人しくする事にした。そして時間が経ってあっという間に夜になり天幕が張られ、今日の移動も終わりを告げた。その夜に一刀は横になりながら、孫策の事を考えていた。

「賊と会ってから、1度も雪蓮と話してないな。兵の人達もなんだか俺を雪蓮に会わせないようにしてるみたいだし。」

一刀は考えても仕方ないと思い、寝床からコッソリ抜け出して孫策がいるであろう場所を目指した。

「多分、あそこかな?」

孫策の眠る場所は少し綺麗な装飾がされたテントのような場所で一刀も直ぐに分かった。

「雪蓮。起きてるかな?賊に会った後に何かあったのかい?」

一刀は外から声を掛けてみた。

「か,一刀!!来ちゃダメ!!」

すると中からは孫策の吃驚して慌てるような声が返ってきた。

「雪蓮?一体どうしたんだ?俺の事が嫌いになったのか?」

「ち,違う!!只、今は一刀の顔を見たら私…駄目」

一刀は孫策に自分の事を嫌いじゃないと言われても会いたくないと思われてるんだと思い、開き直り笑顔で答えた。

「雪蓮。ごめんね。もう、行くよ。明日も宜しくお願いします。」

一刀は踵を返して歩いて行こうとした時だった…

「待って!!一刀!!」

孫策の言葉には覇気にも似た何かが纏っていた。

「雪蓮?」

「一刀…お願い…信じて。」

一刀は孫策の言葉を聞いて駆け出していた。中から聞こえた小さく悲しい声に…孫策に嫌われてるのかと少しでも思った自分にイラっとしながらも。

「雪蓮!!」

一刀は気づけば孫策の目の前まで来てしまっていた。そして固まった。

「か，かずと!!」

「雪蓮!!これはどういう事?」

一刀が固まるのも無理はない。孫策は罪人が巻かれるような太い縄で椅子に縛られていたのだから…

「い，今から直ぐに外すよ!!」

「一刀!!ダメ!!」

「え?」

「…自分でやったの。」

孫策は俯いていた。

「ど，どうして!!こんな!!」

「実は私って昔から大きな戦いの後とか血を見ると、身体が熱くなっちゃってね。」

「熱く?」

「今日の昼間は只の賊だったんだけど、血を見たのが久しぶりで…」

「そ，それで?」

「3年前迄はその…こんな会話も出来ないぐらい酷い状態で、冥琳か隠・祭を構わず襲っちゃってたんだけど♪」

「お，襲うって戦うの?」

「…閨でよ♪」

一刀も何となく勘づいてきた。

「その…女性同士で?」

「もちろん♪でも…今は、私の周りに誰もいないし…襲うなら…その…一刀しかいなくて。」

「な，なんだって!!」

一刀はどうすれば良いのか分からず、痒くない頭を掻いていた。

「もう…ダメ…みたい。」

「え?…ん!!」

一刀が口を開こうとした時には、孫策の唇が一刀の唇に押し付けられいた。

「かず…んむ…んちゅ…んっ…んぐっ」

一刀の意志も無視して、一刀の口内には孫策の舌が進攻してきた。

「しぇ…れ…んむっ…ずちゅっ」

孫策は一刀の頭の後ろに手を回し引き寄せ更に激しく責め立てた。

どれぐらい続いただろうか。2人とも鼻で必死で息をしながら孫策がようやく唇を放した。

「ぷはぁはぁ。」

「かずと…ごめんね。」

「し，雪蓮、少し落ち着いた?」

「え?」

孫策は一刀の予想外の言葉に目を丸くした。

「その…だって雪蓮があんな縄で巻かれてる状態は見たくなかったし、俺しかいなかったなら…その…仕方ないさ。」

少し照れたように一刀は答えた。

「か，かずとお願い…続き…して。」

「雪蓮…」

一刀は理性と戦っていた。でも男なら当たり前だろう。綺麗な身体に整った顔立ち。青色の澄んだ目に大きめな胸桃色の髪に纏う妖艶な雰囲気。そんな女性に上目遣いで頼まれては…

「な，何言ってるんだよ雪蓮。さっきよりも落ち着いたみたいだし、俺はもう行くよ。」

一刀は足早に出ていった。

「かずと…ふふ♪ありがとうね。」

一刀は自分の寝床に戻りながら、あまり寝れずに朝を迎えた。

小覇王のアレ（雪蓮（後書き）

初めて少し桃色なシーンを書いてみました。

そのシーンが読者様の頭に浮かんでくれると幸いです。

初めての桃色シーンでしたので気軽に感想を頂けると助かります。

その感想次第で、これからの内容の書き方も多少変わると思いますので…

孫策のこの性癖は原作をやった方達は分かると思います。

あ～雪蓮姉様の全てが羨ましい，笑

敵は身内？

一刀・孫策の間で桃色な出来事があった次の日

「おはよう、一刀♪」

「お，おはよう雪蓮」

孫策はいつも通りだった。一刀はあんな事があったせいで、殆んど眠れずの朝を迎えていた。今日の行軍は一刀・孫策の騎馬を先頭にしている編成に戻っていた。

「一刀♪いよいよ明日には魏に着くわよ。嬉しいでしょ？」

「そりゃ、嬉しいけど…」

「あ、一刀♪もしかして、私に惚れちゃったんでしょ～？」

「ちょ！！雪蓮、からかわないでよ。」

「私は結構、本気だったのになぁ～」

「何？」

「何でもな～い♪それで、どうして一刀君は元気がないのかな～？」

「…どんな顔して魏の皆に会ったら良いのか分からなくてね。少し、怖いんだ。」

「かずと…」

孫策・一刀の間には少しの沈黙が訪れた。

「一刀」

「ん？」

「一刀の最高の笑顔を見せてあげれば良いのよ。」

「笑顔？」

「そうよ♪帰ってきたんだぞ！！此処にいるんだぞ！！って。」

「そんなんで許してくれるのかな…」

「そりゃ、きっと怒る子もいるわよ。」

「雪蓮～！！」

「アハハ♪でも、そんなの当然じゃない。男なんだから受け入れてあげなきゃ…昨日の私の時みたいに♪それに、魏の子達が好きなんでしょ？」

「うわぁ！！雪蓮、声が大きいよ。」

「華琳に言っちゃおうかなぁ♪」

「孫策様、それだけは許して下さい…でも、吹っ切れたよ。ありが

とう、雪蓮」

「…かずと、優しすぎぃ！！私も好きになっちゃうじゃない。」

「ちょっと雪蓮！！近づき過ぎ！！馬がぶつかっちゃうよ。」

「ブーブー！！」

そんな雑談をしながらの行軍だったが、順調な早さで魏の国境近くまで来ていた。そして夜、一刀は今日も寝床で眠れない時間を過ごしていた。

「明日は、いよいよ魏に…この日を何度夢見ただろう。」

一刀の目には涙が溢れていた。

「向こうじゃ…誰も信じてくれなかったもんな…」

一刀は自分の両腕を服の上から擦りながら涙を流していた。嬉し涙と悲し涙の混ざった涙を…

「か～ずと。」

急に外から孫策の声が聞こえてきた。

「雪蓮？どうしたの？」

「入っても良い？」

一刀は涙を拭い目を擦って涙の形跡を隠した。

「良いよ。」

「お邪魔しま～す♪」

相変わらず入って来た孫策は綺麗だった。月明かりに照らされた孫策はとても魅力的な女性に一刀は見えた。

「暗かったから、もう寝ちゃったかな～と思ったじゃない。」

「明日の事を考えててね。」

「また、暗くなってたんじゃないでしょうねぇ？」

「いや。誰かに刎ねられたりしないかな～って。」

「アハハ。それだけの余裕があるなら、もう大丈夫ね♪持ってきたの、２人で呑みましょ♪」

孫策が持ってきたのは酒である。

「一体、どこから？」

「秘密♪…一刀、何してるの？」

「そうか。乾杯の習慣がないのか。」

「カンパイ？」

「俺の世界では乾杯という習慣があってね。例えば…1日の仕事に

お疲れ様とか、明日また頑張ろうとか意味を込めてね。別に何でも良いんだよ。」

「へぇ～。で、一刀は何に乾杯するの？」

「俺は…前呉王の孫策伯符様と2人だけでお酒が呑める事に。」

「アハハ♪じゃあ、私は…孫呉の中で一刀と1番最初に口づけ出来た事に。」

「雪蓮～！！」

「乾杯♪」

こうして、一刀・孫策は朝方近くまで呑んでいた。気付けば先に眠ったのは…孫策であった。

「雪蓮？」

「すぅ～すぅ。」

「このまま寝かせてあげたいけど、朝になって兵の方達に見られるのも…嫌だしな。運んであげるか。」

一刀がゆっくりと孫策をお姫様抱っこのように抱えた。

『雪蓮、軽い！！それに柔らかくて良い匂いが…こんな綺麗な女性があの孫策伯符なんてな。華琳といい、この世界は…』

そんな事を一刀は心の中で思いながら、孫策の寝床であろう場所ま

でやってきた。

「雪蓮、着いたよ…い！！」

一刀は寝床に着いて、孫策をゆっくり下ろしたのだが…孫策が一刀の首に腕を巻きつけてきて離れられなくなっていた。

「し，しぇれんさ～ん。着きましたよ～」

「ん～ん。」

「可愛い…じゃなくて雪蓮、離してくれ。ここは雪蓮の天幕だよ。」

「可愛かった？」

「あぁ。って雪蓮！！起きてたのか？」

お姫様抱っこされる孫策を見れば、笑顔で一刀を見ていた。

「あれぐらいで私が酔うわけないじゃない♪」

「どうして寝たふりなんかするんだよ。」

「一刀…鈍いのね。」

「ん？」

「…一刀が眠った私に変な事しないかな～って♪」

「するかー！！」

「私を運んでくれて嬉しかったよ一刀、ありがとう。」

「あ…あぁ。」

横になりながら一刀に話かける孫策には、また別の魅力が漂っていた。

「じゃあ、寝るね。おやすみぃ♪」

「…おやすみ。」

『雪蓮…』

一刀も自分の寝床に戻り、色々と戦いながら眠りについた。

「ダ～」

「ん？」

「ダ～リン！！」

「うわっ！！久しぶりだな。」

ここは一刀の意識の中である。

「ダ～リン！！何、雪蓮ちゃんとイチャイチャしてるのよん！！」

「い，イチャイチャなんて…それで何しに来たんだよ？」

「ダ～リン、忘れてないわよね？」

「勿論だ。それで、敵の見当はついたのか？」

「ダ～リンよく聞いてねん。もしかしたら…まだ、もしかしたらだけど、敵は身内かもしれないわん。」

「身内？どういう意味だ…オイ！！」

一刀の呼び掛けへの返事は来ず、朝を迎えたのだった。

敵は身内？（後書き）

さて次回からは、とうとう一刀が魏に行く予定です♪

色々な再会を描けたらなと思います。

みんな時間が経って、更に変わったに違いありませんね。

御遣いの帰還

太陽が空高く昇る頃…魏・呉の国境が一刀・孫策達に見えてきた。

「こんなとこまで来たのは、本当に久しぶりだわ。」

「あそこに秋蘭が…」

「一刀。準備は良い？」

一刀は目を閉じて大きく深呼吸した。

「…よし！！行こう。」

一方、既に国境では…

「夏侯淵様、前方に少数ですが呉の軍を確認致しました。恐らく…」

「ふむ。下がって良いぞ。」

『北郷…本当に久しぶりだな。さて、北郷の護衛は将だとは思うが一体誰なのだろうな。』

夏侯淵が前に見える軍を眺めながら考えていた。

「到着ぅ♪」

孫策の元気な声が辺りに響いた。

「一刀。少し秋蘭と話してくるから待っててね♪」

「あぁ、準備しとくよ。」

少しの時間が経ち…今、2人の将が顔を会わせていた。

「まさか、江東の小覇王が一緒だったとはな。」

「秋蘭、すっごい久しぶりね♪」

「私は去年、呉に1年いたのだが…」

「…そうだっけ?」

「雪蓮は相変わらずのようだな。それで、北郷を連れてきてくれたんだろ?」

「えぇ♪」

「連れてきてくれるか?」

「…イヤだと言ったら♪」

孫策の発言で夏侯淵から殺気らしからぬものが出ていた。

「あら秋蘭、怒っちゃった?」

「どうも、冗談には聞こえなくてな。」

「でも本当に御遣いの事が好きなのね。美味しいもんね、かず…！！」

キィン！！

孫策の発言の最中、夏侯淵の忍ばせていた小刀が孫策の首筋に突き付けられようとした…が孫策も小刀で寸前で回避していた。

「秋蘭、こっわ～い♪本当に冥琳の言った通り、天の御遣いがいると分かるだけで違うのね。」

「冥琳…雪蓮、謀ったな。」

周瑜の真名に夏侯淵は謀られた事に気がついた。

「でも、これ程とはね♪今年の天下一品武道会は本当の曹魏が見れそうね。」

「ふっ…約束しよう。」

夏侯淵は微笑を溢しながら、小刀を引いた。

「じゃあ、一刀を連れてくるわね♪私はそのまま帰るわ。」

「せ，世話を掛けたな。」

夏侯淵は驚いていた。孫策が何気なく言った『一刀』という言葉に…

「か～ずと♪」

一刀が外で魏に移動する準備を終えて待っていると聞こえてきた。

「雪蓮。」

「手筈は覚えているわよね？」

「俺は魏に降り立った事、つまり呉の皆に会うのは次が初めましてって事だよね？」

「そう。いきなり私の真名を呼んだら刎ねちゃうからね♪」

「…雪蓮、全然冗談に聞こえないよ。」

「アハハ、私は行くわ。一刀、元気でね♪」

「改めて孫策様、本当にお世話になりました。呉の皆様にも宜しくお伝え願います。」

「待たね♪一刀…そのうち奪いに行くかもだけれど…」

「え？」

一刀には確かに聞こえた。孫策が最後に何て言ったかを…

『奪うって…まさかな。雪蓮が言うと冗談か本気なのか分からないよ。』

そんな事を考えながら、一刀は夏侯淵の待つ場所へと歩みを進めた。

「この向こうに秋蘭が…」

一刀の目の前には1枚の扉

「行くか！！」

ゆっくりと扉に手を掛け、一刀は開けたのだった。その刹那！！シュ！！っという音と同時にズドッという鈍い音が響いた。見れば、一刀は扉に磔にされるように弓矢が刺さっていた。

「や，やぁ、秋蘭」

一刀はそんな状態になりながらも、苦笑いで言った。眼前には教科書のような素晴らしい姿勢で愛弓の餓狼爪を構える夏侯淵が立っていた。

「北郷、久しぶりだな。」

一刀はその姿・声を聞くと目頭が急に熱くなり、磔の状態になっているというのに涙を浮かべていた。

「ほ，北郷！！当ててないハズだが！！」

夏侯淵は一刀の涙に驚き、餓狼爪を置いて駆け寄ってきた。本当は長い間、自分を・姉の夏侯惇を・曹操を・魏の皆を悲しませたことを反省してもらおうと本気で脅かすつもりだった。しかし、一刀の

涙を見てそんなことは忘れてしまっていた。

「大丈夫か北郷？まさか泣かすつもりはなかったんだ。」

夏侯淵は扉に刺さった弓を抜きながら一刀に話し掛ける。

「いや、違うんだ。俺が秋蘭を見たら勝手に涙がね。」

「…北郷」

夏侯淵はゆっくりと一刀を自分の胸元に引き寄せた。

「おかえり、一刀」

「ただいま、秋蘭」

夏侯淵の目にもうっすらと光ものが見えた。…暫くの静寂が続いた。

「北郷…」

「どうしたの？」

「その…私がお前を抱き寄せた事は姉者と華琳様には内緒にしてくれ。」

「あぁ。」

「すまない。」

再会を終えた2人は直ぐに洛陽に戻る準備をした。夏侯淵は御遣い

が舞い降りた事を広める為に兵達に指示を出し、曹操への手紙を書いた。結果、一刀は魏に再び舞い降りた事になり夏侯淵がそれを偶然拾った事が一気に魏に広まった。

御遣いの帰還（後書き）

さて、いよいよ一刀と秋蘭には再会して貰いました。

一刀と秋蘭の会話は次回の更新での予定ですが…秋蘭の雰囲気を出せてるか少し不安です←←

しかし、雪蓮姉様は最後まで怖すぎる，笑

天の御遣い北郷一刀。彼は今、曹操のいる洛陽まで後1日で着くだろうという場所まで来ていた。夏侯淵も一緒なのだが再会した日から忙しく、一刀とは全く会えずにいた。

「秋蘭…忙しそうだな。」

一刀は今日も1人だった。夏侯淵から洛陽に着くまでは外には出ないでくれと言われていた。もう魏では天の御遣いが再び来た事が広まっていて、混乱を避ける為にもという事であろう。

「明日はとうとう華琳に…。5年か…」

そう言うと一刀は自分の手に何かが落ちたのを感じた。

「な，何を泣いてるんだ俺は。風の時も秋蘭の時も泣いてばかりじゃないか！！」

そんな事を呟く一刀の死角の壁に夏侯淵が背を預け立っていた。

「天の世界では5年もの日が…」

夏侯淵は一刀を行軍の小休止の間に訪れようとしたら、声が聞こえたて今の状態である。

「しっかりしろ、北郷一刀！！俺は今、間違いなく此処にいる。もうあっちの世界にはいないんだから…」

『北郷…向こうの世界で何があったと言うのだ…』

夏侯淵は一刀の呟きに心で問いかけていた。

次の日の朝

「北郷、いるか？」

「秋蘭かな？どうしたの？」

「良かったら、一緒に散歩にでも行かないか？」

「散歩？仕事は大丈夫なの？」

「ようやく落ち着いてな。」

「行く行く。ちょっと待っててくれ。」

こうして2人は外に出てきた。

「なんだか初めてかもね。」

「何がだ？」

「だって前に俺が居たときだって2人でゆっくり歩いた事なんて殆んど無かっただろ？しかも秋蘭から誘ってくれるなんて。」

「そういえば、いつも姉者や華琳様がいたからな。」

「春蘭にはいつも振り回されてたし。」

「ふふふ、そうだったな。だがそれが姉者の…」

「春蘭の良い所なんだろ?」

「その通りだ北郷」

2人は本当に他愛のない話をしていた。

一刀も何も語らず聞かず、夏侯淵も同様だった。そんな散歩で時間も経ち、行軍の時間となった。

他愛のない散歩（秋蘭（後書き）

ここまで読んでくれてる皆様、ありがとうございます。

段々と話が複雑になってきましたかね？

暑さに負けず更新頑張ります。

…読んでくれた友達に雪蓮姉様に力入れすぎと怒られてしまいました，笑

戻った者達

時間は少し遡り、此処は魏の玉座の間である。そして突如、大声が響き渡った。

「華琳様ぁ～！！」

声の主はジュンイクであった。彼女は物凄い剣幕で玉座の間に入ってきた。

「あら桂花、どうしたのかしら？可愛い顔が台無しよ♪」

勿論、この声に反応したのは余裕を見せる曹操である。

「華琳…様？」

ジュンイクは驚いた。この威圧的な雰囲気、そして全てを知るような笑み。一体、こんな曹操をいつぶりに見ただろうか。そして悟った。

「華琳様、知ってましたね？」

ジュンイクの言葉と同時に城全体が揺れるような咆哮が玉座の間で再び鳴った。

「かかか，華琳様ー！！」

夏侯惇が猪突猛進の勢いで入ってきた。

「ちょっと、腑抜け猪武者!!私の耳がおかしくなったらどうするのよ!!」

「そ，それどころではないのだ桂花…お，落ち着いて…」

「アンタが落ち着きなさいよ!!」

その最中…

「「華琳様!!」」

「華琳!!」

「華琳様!!」

「大将!!」

「大変なのぉ～!!」

連なるように、許緒・典韋・張遼・楽進・李典・于禁も玉座に押し掛けてきた。この様子を見た曹操は微笑をしながら、同時に嫉妬もしていた。

「それで皆、慌てて一体どうしたのかしら?」

全員がこの曹操の一言で完全に気づいた。

曹操に昔の覇気が戻っている事を…そして…本当に彼が帰ってきたという事を。

「華琳様、このジュンイクが皆を代表して言わせて頂きます。」

「何かしら?」

「どうやら、天の御遣いが再び魏に舞い降りたようです。」

「それで?」

「御遣いは偶然に!!秋蘭が最初に偶然に発見し、報告によると前にいた御遣いと同一人物のようです。」

ジュンイクの抵抗だろうか。彼女は故意で『偶然に!!』という単語を強調した。

「ふふふ、他には?」

「既に秋蘭と一緒に此方に向かってるとの事です。」

「分かりました。」

曹操とジュンイクのやり取りを聞きながら、喜びにガッツポーズする者やハイタッチをする者・涙を流す者をなだめる者と将達が様々な表現を見せていた。

「皆、聞け!!」

曹操の言葉に綺麗に整列する将達

「皆が察する通り、御遣いは再び舞い降りたわ。」

曹操は目を静かに閉じて…数秒後にゆっくりと目を開けた。

「まずは、一刀を思い切り歓迎してやりなさい！！」

「「はい！！」」

久しぶりに魏の将達がまとまった瞬間であった。そして将達は玉座を後にした。玉座を後にする将達の顔は明らかに変わっていた。…そう…まるで彼がいた頃のように…

「本当に帰ってきたのね…一刀」

曹操だけが玉座に残っていた。

「風からの手紙で本当にアナタが再びこの世界にいると分かっただけで、こんなにも変わるなんてね。それに、私以外にもあんなに愛されて…この…幸せ者。」

曹操は自分の胸に手を当てて彼を想っていた。

「一刀…」

戻った者達（後書き）

さぁ、いよいよ魏の子達にも一刀が帰ってきた事がバレましたね。

それにしても、1番好きなジュンイクちゃんの漢字が出ないのが書いてて辛いです←←笑

再会は感動よりも、その子らしい再会が出来ればと思います。

勿論、感動の再会にする子もいますけど…果たして一瞬でも読者様の涙を誘えるか…

私？

私は号泣ですけど、何か？笑

2人の成長（季衣・流琉

「北郷、見えるか？」

「あぁ、懐かしいよ。」

一刀達の行軍が終わりを告げた。眼前には曹操の治める街が見えていた。

「秋蘭、みんな俺が帰ってる事は知ってるんだよね？」

「華琳様をはじめ、皆知っている筈だぞ。」

「春蘭が斬りかかって来たら、お願いね秋蘭。」

「斬りかかる程の元気が戻ってれば良いがな…」

そんな雑談をしながら街に入れば…

「御遣い様、おかえりなさい！！」

「北郷様お久しぶりです。」

多くの民達から、歓迎を受ける羽目になった。

「向こうの世界とは…まるで違うな。」

夏侯淵は曹操に報告があるという事で先に城に向かった。一刀も街では落ち着ける状況ではなかったので城に向かうことにした。…す

ると早くも城門には2人の将の姿が一刀に見えた。

「あ!!兄ちゃんだ!!お〜い。」

「兄様!!おかえりなさい。」

先に許緒が凄い速さで一刀に飛びついてきた。

「ただいま、季衣。元気にしていたかい?」

「当然だよ。兄ちゃん!!僕は元気だけが取り柄だし。」

「そういう事は言わないの。」

そう言いながら、一刀は許緒の頭を撫でてあげた。

「あの…兄様。」

「あ〜兄ちゃん、流琉を泣かしたなぁ!!」

「何もしてな…いわけがないよな。流琉、本当にごめんな。ただいま。」

典韋はゆっくりと近づいてきて、何も言わずに身体を一刀に預けた。

騒ぐ許緒と静かな典韋を抱きしめながら一刀は思った。

「2人とも大きくなったね。」

「でしょ〜。胸だって成長したんだから♪」

「ちょっと季衣!!兄様はそんな意味で言ったん…違いますよね兄様?」

「も，勿論だよ!!確かに身体の成長もあるけど、雰囲気って言うのかな?」

「兄ちゃん。僕、大人になれたかな?」

「あぁ!!」

同時に許緒の頭を再び撫でる一刀

「あの…兄様…」

モジモジしながら、典韋が一刀に問いかける。

「流琉もだよ。」

「ありがとうございます。」

典韋の頭も撫でてあげた。こんなやり取りの後に許緒が街に何か食べに行こうと言うが、一刀が行くと落ち着いて食べれない事になるので典韋の提案から城の厨房に向かった。その移動中、許緒は何故か凄く喜んでいた…

2人の成長（季衣・流琉（後書き）

取り敢えず、成長した2人をウチに欲しいです，笑

手料理（流琉

一刀・許緒・典韋の3人は城の厨房のある場所に来ていた。一刀・許緒は椅子に座り、典韋は厨房へと向かって行った。

「季衣、ここに来る時から随分とご機嫌だね。でも、流琉の料理は本当に美味しいもんな。気持ちは分かるぞ。」

「兄ちゃん、流琉は…3年振りに料理を作ってくれるんだよ。」

「え？」

「流琉でしょ♪最初に厨房に行こうって言ったの。」

「そういえば…」

一刀は許緒の言葉に落ち着いていられなかった。

「季衣ごめん！！ちょっと、流琉の手伝いしてくる。待っててくれ。」

「はーい！！」

一刀は直ぐに厨房に向かった。すると、典韋の独り言が一刀の耳に聞こえてきた。

「大丈夫。兄様がいるんだもん。私…作るよ。」

典韋は包丁を握りしめながら、自分に訴えていた。

「流琉！」

「え？に，兄様！！どうしたんですか？」

「手伝いに来たよ。」

一刀は何にも触れずに答えた。

「い，いいですよ。作るのは私の専門ですから♪」

「3年…振りなんだろ。」

「え…どうして。」

「季衣が…」

「季ー衣ー！！」

「流琉！落ち着いて。包丁は駄目だよ。それに季衣を責めないでくれ。責めるなら俺だろ？」

「兄様を責めるなんて…それに料理をしなくなったのは私が…私の心が弱いだけです。」

典韋は今にも泣き出してしまいそうだった。そして、一刀から目線を外した。

「兄様は…男性ですし料理も余りやらないのかもしれないですけど、

作る方としては『美味しい』のたった一言がどれだけ嬉しいか分かりますか？」

典韋はふと一刀に訪ねた。

「え？…それは自分がやった事を他人に認められるなら嬉しいよね。」

「それが…その…好きな人に言われると更に嬉しいですよね？」

「そりゃ、勿論そうだよ。」

一刀は典韋の言ってる意味には気付かずに、受け答えしていた。

「じ…じゃあ、その好きな人に食べて貰えなくなった時の気持ちが兄様に分かりますか？」

一刀は黙ってしまった。それは全て一刀の事なのだから…典韋は一刀に背を向けていたので顔は見えないが、誰が見ても泣いてるのが分かった。

「ぐすっ…うぅ。」

「流琉…」

一刀は典韋の背中を見ながら、３年前に消えた事を本当に後悔していた。

「流琉…本当にごめんな。」

「あ，謝らないで下さい。今は兄様は此処にいるんですから」

典韋は振り返り少し目を赤くしながら、一刀に微笑みかけた。

「兄様が帰ってきた。いま私の前にいる。それだけで私は…作れます！！ただ少し手が震えて…」

「流琉、季衣には手伝うとか言っちゃったんだけど…その…流琉が作る所をここで見てていいかな？」

「…はい♪構いませんよ。」

典韋の目の涙は既に消えていた。

「ふぅ、兄様…美味しく出来なかったら…」

「絶対に大丈夫だよ！！流琉の作る料理は美味しいに決まってるんだから。」

「もう、兄様ったら。」

「楽しみにしてるよ。」

一刀は満面の笑顔で答えた。典韋もまた一刀の言葉と同時に手際の良さを発揮していた。本当にこれが3年振りに包丁を握る者なのだろうかと驚きながらも典韋を笑顔で眺める一刀だった。そして心で呟いていた。

『もし俺がまた消えたら…流琉は…』

手料理（流琉（後書き）

さて、今回は流琉の拠点フェイズっぽく仕上げてみました。

男性の読者様にはツマラナイ内容になってしまったかもしれないですね←←

でも、好きな人に手料理を食べて貰うのって良いもんですよ♪

それも…まぁ、一刀には犯罪臭を感じますが肌を重ねた相手ですしね。

私ですか？

味は聞かないで下さい，笑

次は季衣かな♪

「お待たせ、季衣。」

一刀・典韋が抱えきれない程の麻婆豆腐・麻婆茄子を持ってきて机に並べた。

「遅いよ～。今日は何だかすっごいお腹空いてるから、早く食べようよぉ～！！」

「季衣…それって…」

典韋は許緒の発言に驚いていた。

『季衣も私と同じで、兄様が帰ってきたから…』

典韋は自分も気づかないうちに涙を流していた。

「あー！！流琉ぅ、どうしたの？兄ちゃん！！厨房で流琉の邪魔ばっかりしたんでしょ！！」

「し，してないぞ。流琉、どうしたんだい？」

「あ，いえ、ごめんなさい。本当に何でもないんです。」

典韋は涙を拭って笑顔で2人に言った。

「じゃあ、食べようか。」

一刀は典韋の笑顔を見て、これ以上の何も聞く必要は無いと感じて話を戻した。

「うん！！」
「はい！！」

「「いただきま～す！！」」

…本当に数分だっただろうか。

「ちょっと、季衣！！」

「季衣…相変わらず、メチャクチャだな。」

2人がこんな発言をするのも無理はない。確かに典韋は許緒の食欲が一刀の帰還で治ったかもと思い、3人では作り過ぎぐらいの量を作ったのだが…

『いただきます。』の後に最初に3人が自分の分をよそってからというもの…その後は一刀・流流は1度もよそっていない。一刀は許緒の恐ろしい食欲に呆気にとられていた。典韋も許緒の戻りすぎた食欲に苦笑いを隠せずにいた。

「季衣…やっぱり身体も成長したから、凄いな。」

「そうかなぁ？」

「ちょっと、季衣！！」

典韋が一刀に聞こえないように、小声で許緒に話し掛ける。

「最近は少しでお腹一杯になるんじゃなかったの？」

「分からないけど、流流の料理と兄ちゃん・流琉の笑顔見てたら何かすっごいお腹すいちゃって。」

「はぁ～。こんな事なら、もう少し多く作れば良かった。」

「流琉！！また作ってくれるの？」

「季衣には暫く作ってあげないんだから！！」

「え～」

一刀はそんな2人の光景を笑顔で眺めていた。

「兄ちゃん。」

「兄様。」

「2人ともどうしたの？」

「あ，あの…私の麻婆、どうでしたか？」

「とっても美味しかったよ、流流。また作ってくれな♪」

一刀の右手が優しく典韋の頭を撫でた。

「良かったね。流琉。」

「…うん。」

こうして穏やかな昼食時間は幕を閉じた。

…食事を終えた3人は城の庭を歩いていた。

「流琉、他の皆も此処にいるのかい？」

「稟さん・風さん以外は、桂花さん・霞さんも帰って来てるので多分、いると思いますよ。」

「桂花・霞は何処かに行っていたのかい？」

「成都だよ。兄ちゃん。」

「…そっか。」

成都…曹操が最終決戦をした場所である。そして、一刀の消えた場所も…そんな事を思い出してる一刀を他所に2人が…

「ごめん！！兄ちゃん、ちょっと流流と用事があったんだ。」

「兄様、本当にすいません。」

急に2人が足早に一刀の元を去ってしまった。

「えっ！！あ…あいつら。」

一刀が足早に逃げようとする2人に話し掛けようとした時には、既に姿が見えなくなっていたと同時に懐かしい顔ぶれが前方に見えていた。

食欲覚醒（季衣（後書き）

さて、季衣には大量に食べていただきました。

私の描く季衣は少し天然混じりですね。

次はあの三羽烏が出てきますよ♪

戻った氣（凪・真桜・于禁

「凪ちゃん、大丈夫なの？」

「…」

「目ぇ開けたまま気絶しとるで！！」

コツン

「あぁ、すまん。…うっ。」

今、中庭には楽進・李典・于禁の３人が歩いていた。彼女達も一刀を城門で迎えたかったのだが、許緒・典韋に先を越されて中庭をブラついていた。結果、楽進はこの状態である。

「今頃、街で３人で美味しいもん食べてるんやろか？」

「季衣ちゃんに流流ちゃん、良いなぁ～なの。」

「凪。急に止まってどないしたんねん？」

「どうしたの、凪ちゃん？」

楽進は急に止まって、静かに前を指差した。李典・于禁も楽進の指差す方を見た。

「凪ちゃん・真桜ちゃん…アレって…」

「あの雰囲気、間違いあらへんがな。あれは、た…」

「隊長!!」

離れているが、間違いなく3人の前には一刀の姿が見えた。楽進は1人、先に駆け出した…のだが…

「ちょ!!凪、抜け駆けは許さんで!!」

「ふ，2人とも待ってなの!!」

李典・于禁も楽進の直ぐ後を追い掛けていた。

一方、一刀は…

「あの3人が見えたから、季衣・流流…気を遣ってくれたんだな。さて、俺も気を引き締めなきゃな。」

そんな事を思っている一刀の前には既に…

「隊長…本当に。」

一刀・3人はもう互いに顔がハッキリ見える距離に来ていた。

「凪、隊長はやめてくれよ。今は凪が隊長なんだろ?」

一刀がこの世界に前にいた時は警備隊の隊長だったが、いない間に楽進が引き継いでいた。

「私達の隊長は隊長だけです!!」

「凪の言う通りや。」

「凪・真桜…」

一刀は歯をくいしばり、必死で涙が溢れないよう耐えていた。

「私も忘れないで欲しいの。」

不意に飛びついて来た、于禁と…

チュ

「えっ？」

一刀の頬には湿った感触が…

「「沙ぁー和ぁー！！」」

一刀の周りをキャッキャッと逃げる于禁と本気で追い掛ける楽進・李典そんな3人を見ながら一刀は静かに言った。

「ただいま、凪・真桜・沙和」

「おかえりなさいです。」

「おかえりやで隊長。」

「おかえりなのー。」

一刀は驚きながらも、もう一度笑顔で答えた。

「ただいま。」

そして今、一刀の右には楽進・左には李典がくっついていた。

「どっちか交代してなのぉ!!」

2人から抜け駆けして一刀の頬に口づけをした結果である。4人は涼しい風を受けながら、庭を歩いていた。すると、向こうから犬を抱えた女の子が歩いてきた。

「あれは…呂布…さん?」

「なぁ、凪」
「あぁ、私も思ってた所だ。」
「賛成なの♪」

3人は一刀の疑問も聞かずに何やらかたまって話しを始めていた。

「隊長。」

「どうしたの凪?」

「私達の調練を見ていって貰えますか?」

「もしかして…呂布さんと?」

コクッ

一刀は他の2人にも目をやると2人ともやる気に満ち溢れた顔をし

ていた。

「怪我だけには十分に気をつけるんだぞ。」

一刀が言うと楽進は呂布に向かって歩いて行き、どうやら調練の相手をして貰える事になったようだ。

そして時間が経ち…いよいよ調練が始まった。と言っても殆んど仕合である。

一刀は離れた木陰に座って、呂布に無言で頼まれた犬のセキトと静かに見ていることになった。心配そうに見れば、楽進・李典・于禁の3人は一刀もよく知る本気の武器である。呂布が持っているのは普通の槍のようだ。

そして直ぐに1人の声が響いた。

「最初は私からいくのぉー♪」

「え？1人ずつ戦うの？」

「隊長は黙って見ていて下さい。」

一刀は楽進に凄まれ、口を出さずに見守る事にした。

「沙和…前と同じなら…直ぐにやめる。」

「前と同じじゃないから大丈夫…なの！！」

于禁は言葉と同時に呂布に突っ込んでいた。

「沙和、凄いな。」

一刀は思わず声に出していた。

時間は少し経ち状況は呂布が于禁の二刀流を受け流しながら時折、槍の柄で于禁を突いてるのだが一刀の目には十分に成長しているのが分かった。

それから少し経って…

「もう…駄目なの。」

于禁は言葉と同時に力が抜けたようにその場に倒れ込んだ。同時に呂布が于禁に近付いて手をさしのばしていた。

「沙和…恋…楽しかった。また…やる。」

「恋様、またよろしくなの♪」

一刀もそんな2人に笑顔で拍手して見せた。そして、次は…

『真桜か。頑張れ!!』

一刀も心で応援していた。

「ほな、いかせてもらうで!!」

李典の言葉と同時に仕合は始まった。相変わらず、呂布の強さは天下一である。于禁との仕合の後など全く感じさせない動きを見せていた。それに、于禁との戦いに比べると明らかに2人の動きが早い。

「真桜もやるじゃないか。」

一刀はそんな2人を必死で目で追っていた。そして、時間が経つにつれて李典の動きは目に見えて遅くなっていた。そして…

「かぁー!!1回ぐらいは当てたかったわぁ。」

「真桜ちゃん、次は頑張ろうね。」

李典も途中で体力が切れて于禁に肩を借りて退場した。

最後は楽進。楽進は3人の中でも間違いなく武が長けているだろう。見守る李典・于禁、そして一刀までが2人の仕合に本気で見入ろうとしていが…

「恋様。」

急に仕合の前に楽進が呂布に話かけていた。

「…ん?」

「ご存知の通り、私は体術が主体ですので互いに素手で戦いませんか?」

「…分かった。」

「凪…本気やな。」
「凪ちゃん、超真面なの。」

「これは本当に凄い戦いになりそうだな。」

そして一刀も見守る中、仕合は始まった。

…

「どうなってんねん。」
「2人ともメチャクチャなの。」

「おいおい、何も見えないぞ。」

庭には砂ぼこりが舞っていた。一刀の素人目には2人の間で何が起こってるか全く理解出来なかったが、服を見れば互いに所々破けていた。

「恋…楽しい。…いく!!」

「え?…な!!」

呂布が少し何かを呟いた瞬間とほぼ同時だろうか、一瞬で呂布が楽進の背後から首元に手刀を突きつけていた。

「恋様…ありがとうございました。」

楽進は苦笑いをしながらも、両手をあげて降参した。仕合が終わって4人が一刀の方に歩いてきた。

「みんな本当にお疲れ様。驚いたよ。そして、呂布さん初めまして。北郷一刀と言います。」

「知ってる。…戦いのとき…見た。呂布…真名…恋」

「真名を…良いのかい？」

「セキト吠えない…良い人…だから教える。」

「セキト？」

「その犬の名前ですよ、隊長。」

「そうなんだ。じゃあ…俺は北郷か一刀で…」

「ご主人…様…良い？」

「へっ？」
「なっ！！」
「いっ！！」
「えっ！！」

呂布の予想外の言葉に一刀・楽進・李典・于禁は面食らってしまった。

「あ，あの、なんでご主人様って？」

「…なんとなく。それにご主人様…良い匂い…する。」

「ご主人様かぁ～。」

一刀はついついニヤついていまっていた。こんな美少女から呼ばれたことに…すると一閃！！

「「「隊長！！」」」

この後、3人から必死に逃げた一刀は何とか逃げ切る事に成功した。

戻った氣（凪・真桜・于禁（後書き）

今回の話は如何でしたでしょうか？

再会が続くために、話が進まなくて申し訳ありません。

さて次は…

「はぁ、はぁ。」

息を切らして、壁にもたれ掛かっているのは一刀一刀は三羽烏から何とか逃げ切れ？此処にいる。

「しっかし、凪は怖かったな。此処にいれば風も手が出る性格になるのがよく分かったよ。…そういえば、この通路って…」

一刀は気がついた。必死で逃げていて今まで気づかなかったが、此処は玉座の間に繋がる通路であった。

「この先に華琳が…」

一刀の頭は既に曹操で埋め尽くされ、足が勝手に動いていた。

『華琳…』

何度も心で言う曹操の真名。そして一刀は躊躇いもせずに、玉座の間へと飛び込んだ。

「華琳！！」

一刀の声が玉座の間に響いたのだが…反応が返って来ない。玉座を見れば、そこに曹操の姿は無かった。

「華琳！！いないのか！！」

反応のない事に一刀は肩を落として振り返り、玉座の間の扉に手を掛けた時…

「華琳様なら成都よ、馬鹿。」

「！！」

不意に玉座から声が聞こえたが、誰もいない。でも一刀には誰か分かっていた。

「桂花？いるのか？」

「ちょっと！！いきなり私の大切な真名を呼ばないでよ！！穢れるじゃない。」

柱の影からヒョコっと猫耳頭巾のジュンイクが現れた。

「穢れるって…相変わらず桂花はキツイなぁ。」

「当たり前じゃない！！男から真名を呼ばれるだけで鳥肌よ！！」

「…と，とりあえず、ただいま桂花」

「死んだんじゃなかったのね？」

「け，桂花さん、もう少し優しく…それに死んだんじゃなくて…」

「生憎、男には優しい感情なんて持ち合わせてないわよ。大体、今更何を戻ってきてるのよ！！遅すぎるのよ！！…あ！！」

ジュンイクが一刀の言葉を遮り言った。

「桂花、もう1回今の言葉言ってくれないか？」

ジュンイクの洩らした言葉に一刀はニヤりと微笑みかける。

「ふ，フン！！忘れたわ。」

桂花は少し顔を赤くして一刀に背を向けていた。そんなジュンイクに一刀は…

「えっ？」

「ごめんな桂花。」

「ちょっと、何を抱きついてるのよ！！3年振りに帰ってきてイキナリ私を孕ます気なのね！！離せ！！」

ジュンイクは一刀から後ろから抱きしめられながら、激しく抵抗する。そんなジュンイクに一刀は耳元で囁いた。

「その…さっきの…本当に嬉しかったよ。俺を待っててくれたんだね。」

玉座の間に少しの静寂が訪れた…が。

「し，知らないわよ！！それより早く離しなさいよ！！」

「あぁ。それで桂花、華琳はどうして成都に…」

一刀はジュンイクから離れて話を戻した。

「アンタ…本当に華琳様が成都に行った意味が分からないの？」

「…桂花のその言葉でよく分かったよ。」

「後、華琳様から伝言よ。」

「伝言？」

「私と春蘭以外の将全員に必ず会ってから成都に来ること。じゃないと刎ねるわよ？だそうよ。」

「ははは、華琳らしいな。春蘭は華琳と？」

「えぇ。」

「…分かった。後会ってないのは霞・稟だな。」

「稟は…」

「知ってるよ。蜀に行ってるんだろ？」

「何も知らないじゃない。明日には多分、帰って来るわよ。呉に行ってる風も。」

「えっ！！」

「華琳様がわざわざ！！アンタの為に！！稟・風が帰れるように手

配したのよ。」

「そう…だったのか…」

「ちょ！！ちょっと！！何をしんみりしてるのよ！目が腐るから、私の前で泣くんじゃないわよ！！」

「そんな事を言われれば、涙も出る事を拒むわ！！」

「泣きたいなら落とし穴で泣かせてやるわ。」

「何か言ったか？…聞こえてるぞ。」

「アンタも今、何か言った？」

「言ったよ。…綺麗になったね桂花って。」

「ば，馬鹿じゃないの！！そんな目で私を見てたのね。もう、早く行きなさいよ！！」

「胸は相変わらずみたいだけど…」

「アンタも相変わらず全身性器みたいね。」

2人はそんなヤリトリを笑顔で交わしながら、一刀が先に出て行った。

「なによ馬鹿。私だって少しは成長したんだから…」

服の上から自分の胸を覗きこむ軍師が此処にいた。

成長した胸（桂花（後書き）

少し更新が滞ってしまい申し訳ありません。

土日は基本的に遊び人になってるので更新が…笑

しかし、桂花は本当に可愛い過ぎますよね。

一刀め…抱きつきやがって，笑

では、続き頑張ります♪

あ…感想じゃなくても、意見でも良かったら気軽にお願い致します。

私のやる気も更に出ますし。

これからも見てくれてる読者の皆様、よろしくお願いします。

相棒との再会

「もう薄暗くなって来たな。」

ジュンイクとの再会を果たした一刀は街に向かう為に庭を歩いていた。

「しかし、相変わらず霞は酒場か。本当に好きだな。」

一刀はジュンイクに教えられ、張遼なら多分酒場にいるという事で向かう最中だった。しかし、庭で1人の武将に見つかってしまった。

「隊長!!」

「へっ?…凪!!」

振り返れば、凄い早さで駆けてくる楽進が見えた。いくら城内の構図に詳しい一刀も見晴らしの良い庭では逃げる事を諦めた。

「本当にごめん。凪。」

「もう、いいですよ。それより…あの…」

どうも楽進の様子がおかしい。薄暗くなって定かではないが、一刀には顔が赤い気がしていた。

「凪、その怒ってないならどうして俺を?」

「実は隊長にどうしてもお渡ししたいモノがありまして。」

「俺に？」

「はい。その…今から私の部屋に来て下さらないでしょうか？」

「今から？」

一刀は考えた。今は張遼に会いに行く最中だった。しかし、明日には郭嘉と一応既に会っているテイイクが帰ってくるし…それに夏候淵にも再度会っといた方が良いと考え張遼には明日でもという結論に達した。何より、楽進の渡してくれるモノが気になっていた。

「ど，どうぞ」

楽進の緊張した顔に招かれて、一刀は楽進の部屋に入った。

「す，直ぐに持ってきますので、お待ちください。」

「分かったよ。」

すると楽進は部屋の奥に消えていった。

「懐かしい部屋だな。確か此処で凪と…ダメだダメだ何を考えてるんだ俺は。」

一刀が1人ブツブツと言いながら待っていると楽進が戻ってきた。

「お待たせしました…隊長、どうかしましたか？」

「あ、いや何でもないよ。それでソレが？」

「？…あっ、はい。開けてみてください。」

楽進に抱えられていたモノは風呂敷に包まれていた。それに一刀は手を伸ばしゆっくり広げていった。

「えぇ！！コレって！！もしかして！！」

なんとその風呂敷の中から出てきたものは…真っ白な制服だった。

「俺の制服が何でこんな所に！！」

その制服は一刀が前にこの世界に来た時から着ていて、いつも身に着けていた相棒のようなものだった。

「隊長！！どうしたんですか！！」

楽進は驚いていた。なんと一刀は、その制服を優しく撫でるように触れながら大量の涙を溢していた。

「うっ…うぅ。凪、ごめん。」

口に手を当てながら、天井を見上げ涙を流す一刀。楽進はそんな見た事のない光景に只、立ちつくすしかなかった。一刀は制服を見て思い出していた。前にこの世界にいた事、帰った後の世界での事を…

「隊長！！本当に申し訳ありません。」

そこに大きめの楽進の声が一刀の頭に入ってきた。一刀が目を向ければ、楽進は精一杯に頭を下げていた。

「隊長の気持ちも知らずに私は勝手に…本当に申し訳ありません。」

「何を謝ってるんだ凪。俺が勝手に泣いて驚かせちゃったね。」

一刀は目を赤くしながらも笑顔で答える。楽進には、その笑顔は辛かった…

「でも、どうして俺の制服が此処に?」

「その…私が、つ，作ってみました。」

「な，凪が!!凄いよ凪。見た目が全く同じじゃないか!!」

「い，いえ。あの…成都での宴の後に渡すつもりだったのですが…」

楽進は言いながら俯いていた。

「…俺のせいだね。」

「いえ、良いんです!!今、隊長は私の前にいるんですから!!でも隊長の身体がそれほど変わってなくて良かったです。」

「そうだね。でも前に来た時は高2だったから、もうそんなに変わらないよ。」

「コウ二?」

「あっちの世界での位みたいなものかな。」

「変わった名の位ですね。それでその…着て頂きたいのですが…」

「今かい？」

一刀は少し躊躇っていた。本音を言えば、着替えは嫌だった。

「あの…嫌ですか？」

一刀は自分の言葉に落ち込み気味になってしまった楽進の頭にそっと手を置いて…

「凪、今から着替えるから絶対に見ちゃダメだよ。ドアの外の警備、お願いね。」

「はい！！」

楽進は自分の頭に置かれた一刀の手に照れながらも笑顔で答え、部屋を出た。

「それにしても、まさかこの世界でこの制服を見るとはな。」

一刀は凪の作ってくれた制服を手に持ち決して笑顔とはいえない表情で着替えていた。

「終わったよ。」

一刀の言葉を聞いて、楽進が部屋に入ってきた。

「た，隊長。」

「ど，どうかな凪？実は俺も凄い久しぶりに着たんだ。」

少し照れた一刀がそこにいた。

「とてもお似合いです。隊長。苦しくないですか？」

「裾も襟も違和感無いよ。凪、本当に凄いじゃないか。」

「ありがとうございます。隊長。」

こうして再び一刀はこの相棒に身を包むことになったのだった。

相棒との再会（後書き）

先ずは、今回の内容は完全オリジナルではありませんが書かせて頂きました。

さて今回の話の中で過去について触れたので、そろそろ一刀の過去話…5年間について更新していこうかなと考えています。

ちょっと暗い話になってしまうかもです…

一刀の5年間　1

頭の中で誰かに呼ばれる声が聞こえていた。それは懐かしい声。

「ずと…一刀!!」

「ん…」

その声に反応し、ゆっくり目を開ける一刀。

「か，母さん?」

目を覚ましてみれば、心配そうな顔を浮かべた母親に肩を揺すられていた。

「起きてこないから心配したじゃない。一体、高2にもなってどんな夢を見ていたの?」

「え?」

「涙まで流して。」

一刀は母親の言葉で目の下を触ってみれば、確かに湿った感触が残っていた。

「早く下りてらっしゃい。遅刻するわよ。」

「あ，あぁ。」

ここは一刀の生まれた世界。一刀が恋姫の世界から消えた後の話である。

「帰って…きたんだな。」

意外に落ち着いていた一刀は自分の手を開いたり閉じたりしていた。向こうの世界での記憶は残っていた。女性の曹操に拾われて供に覇道を歩み、女性の劉備・孫策達と戦い、魏の皆と泣き・笑い・愛し合った日々を…

「本当に胡蝶の夢に…なっちゃったんだな…うっうぅ。華琳…」

一刀は思い切り泣いた。曹操と別れたあの日、必死で歯を食いしばり涙に耐えた分も…別に帰りたくないわけではなかった。こっちの世界には家族がいる。友達だって。只、向こうの世界で一刀が経験した事が大き過ぎた。

帰ってきた一刀は平凡な学生生活を送っていた。そんなある日の事である…今日は授業の中で偶然にも三国志に触れる機会があった。一刀もまた、懐かしき日々を思い出していた。そして、その日の放課後に事件は起きた。

「しっかし、今日の授業もくだらなかったな一刀」

「なんかあったっけ?」

一刀は友達と放課後にいつものように喋っていた。

「アレだよ。三国志って言ったっけ？」

「え？」

「そんな中国の昔の奴の事なんて、俺らにはどうでもよくね？」

友人の発言に困惑していた。一刀は向こうの世界での経験で三国志に強い思い入れがあった。

「そ，そうかな？俺は結構好きだけどな。」

「本当かよ？三国志なんて本当の話かも分からないし、何が赤壁の戦いだよ。くだらねぇー。」

一刀は必死に気持ちを抑えていた。もちろん、友人の知る三国志の世界と一刀の経験した三国志の世界は違うものである。一刀の経験した世界は有名な武将たちは全て女性であり、孫策も死んでなければ、魏が赤壁に勝利している等の別物である。一刀がここで怒ってしまえば、それは只の自己満足であり三国志好きの頭のおかしい奴だと思われてしまうだろう。一刀もそんなことは理解していた。

「大体、あいつら昔の奴らなのに調子乗り過ぎじゃね？映画になったり、ゲームになったりどうせ中国の土地を争って適当に戦ってただけじゃん。どいつもこいつも大袈裟な名前して…」

ドン！！

「イタッ！！」

声のした方を見れば机に座っていた友人が強い力に押され、机から

転げ落ちていた。

「なっ，何すんだ一刀!!」

机から落ちた理由は一刀が友人の身体を強く押したからであった。

「訂正しろ!!」

一刀の眼は既に血走っていた。

「な，何がだよ?」

「三国志に出てた人達は決して適当に戦ってたわけじゃない!!華琳だって…いや華琳だけじゃなく、雪蓮や劉備さんだって民たちの事を考えて…」

既に頭に血が上ってしまった一刀は友人には分かるはずもない真名まで口にしていた。

「カリン?シェレン?俺はそんなやつら知らないけど一刀、三国志マニアだったのか?あんなオッサン達の何が良いんだよ?」

友人も一刀に押され頭に血が上っていた。

「いいから訂正しろ!!」

「一刀、何をあんな奴らになに熱くなって…」

「俺の言ってることが聞こえなかったか?」

一刀は友人が話してる中、友人の胸ぐらに掴み掛かった。

ドカッ

胸ぐらを掴まれた事で友人もキレた。今度は友人の拳が顔面に当たり、一刀が軽くよろめいていた。

「頭おかしいんじゃねーのか！！」

友人の怒声が校内に響いたが…一刀はそれに怯む事無く掴み掛かっていった。

2人の大声により教室には先生が駆け付けた。そして、先生は光景を見て驚いた。

勉強の成績はイマイチだが体育だけは出来る少し身体の大きな元気な子が、成績も平常点も普通で顔は…少し良いかもしれない一刀に殴られて倒れていた。一刀は只そこに立ちつくしていた。

一刀の5年間　1（後書き）

さて、一刀の過去について書き始めさせて頂きました。

いくら只の夢だと割り切っていたとしても、最愛の人達をバカにされれば怒るのは無理ないですね。

私でも怒るだろうな…

まぁ、一刀の経験は羨ま…じゃなくて尋常じゃないですけどね，笑

一刀の5年間　2

その日の夜。一刀は自分のベッドにいた。話は学校で改めてという事で明日になっていた。

「何をやってんだ俺は…」

一刀は天井に向かって呟いていた。

『アイツの知る三国志と俺の経験した三国志…違うモノって分かってたんだけどな。ただ華琳達だって、三国志に出てきた英雄には違いないんだ。みんな民を思って必死に戦って…はぁ…そういえば、俺…よく怪我しなかったな。普通なら俺がボコボコなハズなのに、向こうの世界での鍛練の記憶のお陰…かな。』

確かに一刀は向こうの世界から帰ってきた時の肉体的な変化は何も見られなかった。というより、記憶以外は行く前と何も変わらない状態であった。

「それにしても、退学とかじゃないと良いけど…」

次の日の放課後。教室には一刀・一刀の母親・友達・友達の母親・先生が集まっていた。

「集まって頂いたのは、当然に昨日の一刀君の暴行について…」

先生が話してる最中に直ぐに一刀が訂正した。

「先生！！昨日のは暴行じゃなくて、喧嘩だったんです！！」

「私も一刀から喧嘩と聞いていたのですけど…」

一刀の母親も繋げるように言った。

「奥さん、２人の顔を見て本当に喧嘩だったと思いますか？」

友達の母親が一刀の母親に問い掛けた。その発言は当然の物言いである。顔には見るに痛そうな包帯を巻いた一刀の友達と喧嘩の後を全く感じさせない綺麗な顔をした一刀

「それは…」

一刀の母親もその事には入室した時から気付いていたが、喧嘩をしたと言った一刀を信じていた。

「おい！！何か言えよ！！」

一刀は黙り込む友達に強い口調で問い掛ける。

「先生。僕は昨日、一刀君にいきなり一方的に殴られて殺されるかと思いました。」

ガタッ

友達の発言と同時に一刀は掴み掛かろうと席を立った。

「お前、何言ってんだよ！！確かに俺から手を出したかもしれない

けど、アレは喧嘩だっただろ!!」

「一刀!!やめなさい!!」

「北郷、落ち着け!!」

席を立ち友達に詰め寄るろうとする一刀を母親と先生が必死に抑えていた。

結局、一刀だけが1週間の自宅謹慎処分を受ける事になった。家に戻ってから…

「母さん!!本当に喧嘩だったんだ。俺は嘘なんて付いていない!!」

「母さんは一刀を信じてるわよ。ただ…どうしてあの子はあんなに怪我をしてるのに一刀は怪我をしてないの?」

当然の疑問である。一刀は昔から習い事などは特にせず、剣道の心得が多少ある程度しかないのは親が一番知っていた。

「一刀には悪い言い方になるけど…友達の方が強そうよね。それに友達と喧嘩して片方が殆ど無傷って一刀はおかしく思わない?一刀、そんなに喧嘩が強かったの?」

「…」

一刀は何も言い返せなかった。信じられてないというショックよりも、母親の言ってる事は正論過ぎた。

その夜、一刀は部屋から父親・母親のいるリビングに降りてきた。
一刀は覚悟を決めていた。信じてもらうには…分かってもらうには
…自分が三国志の世界に行っていた事を話すしかないと。

一刀の5年間　2（後書き）

暗い…ですよね？

読者様方の反応が凄く心配な作者でございます。

一刀は全く強くなってないと言えば嘘になりますが、同級生同士なら少しという程度です。

別に筋力もｕｐしてるわけでもなく、本当に記憶の経験だけですよ。

次回は更に暗く…

一刀の5年間　3

此処は一刀の家のリビング。今、リビングには一刀・両親がいた。

「父さん・母さん、本当にごめんなさい。」

「「…」」

両親は一刀の言葉に只、黙って一刀を見ていた。

「俺、今から多分…信じてもらう方が難しいかもしれないけど、とんでもない事を話すから聞いてて欲しいんだ。」

一刀は話した。自分が三国志の世界に行った事…そして、曹操と供に長い月日を過ごし有名な赤壁に戦いに勝利した事を。今は理解だけをしてもらう為に曹操達との月日の中で鍛錬も何度もさせられた事で友達との喧嘩にほぼ無傷で勝ってしまった事を話し、意識もせずに曹操達が女性だった事や愛し合った事など関係無い事を割愛した。

一刀が話を終えて、父親は無言で自分の書斎に戻っていった。母親は…

「それで三国志の事で喧嘩に?」

「あれは俺がいけなかったんだ。ただ…三国志の人達はみんな民たちの事を本当に思ってて…」

「そう…。一刀、今日はもう寝なさい。」

一刀の言葉を遮るように母親も寝室へと入っていった。

次の日の朝、一刀は目的地も告げられず母親と出掛けていた。

「母さん、こんな朝から何処に行くの？」

「…」

そういえば、今日は父親も朝から何だか様子がおかしかった事を一刀は思い出していた。

「着いたわよ。」

そんな事を思い出してると不意に母親から到着の言葉を掛けられた。

そして…一刀は愕然とした。

「母さん…此処って…病院？」

『ついて来て。』とでも言ってるような足取りの母親が無言で一刀の前を歩いていた。

「か，母さん！！俺は別にドコも悪くなんか！！」

一刀は急過ぎる出来事に頭が回っていなかった。只…病院の看板の文字だけは良く見えていた。

『精神科』

「母さん！！」

何も言わずに病院に入ろうとする母親に一刀は大きな声を出した。
それはもう、今できる精一杯の声だっただろう。母親も思わず足を止めた。

「母さん。俺は別に頭なんて…それに信じてもらえなくてもいい。
でも俺が三国志の世界に行った事は本当なんだ！！そこで鍛錬をしたから無傷で友達に…」

一刀は三国志の世界に行った事だけは否定する事が出来なかった。
それを否定すれば、女性の曹操達に会った事…皆を否定する事に繋がると思っていたから…でも、一刀はそれ以上何も言えなかった。
病院の入り口の前で振り返った一刀の母親は…泣いていた。一刀はきっと…この時の母親の泣き顔を忘れることは永遠にないだろう。

病院に入れば、直ぐに個室に呼ばれた一刀は父親の知り合いの紹介だという精神科医のSと顔を合わせる事になった。

「こんにちは、一刀君。」

「…」

椅子に座り正面にはSが座っていたが、一刀の眼にはSなど映っていなかった。

一刀の5年間　3（後書き）

暗い…本当に暗くて申し訳ありません。

書いてる作者も気分が，笑

友達にも暗いぞ～！！って言われてしまいました。

それにしても、精神科に子供を連れてく親の気持ちって…想像しただけで自分も涙が…

一刀は三国志の事は親に話さない方が…良かったのに。

でも真恋の魏√を恐らく…２０回以上やってる私の頭の中の一刀なら、こんな風になると思い書かせて頂きました。

精神科医のＳというのは只、Ｓと勝手にしただけで意味はありません。

小説なので名前を入れた方が良いんですかね？

おかしいと思われる方は悪い点に書いて頂き、どう直したら良いか指摘して下さると幸いです。

次回は更に…暗く…

一刀の5年間　4

一刀は考えていた。

『どうしてこんな事に？親に三国志の話をしたから？アイツと喧嘩して殆ど無傷だったから？…俺が三国志の世界に…行ったから？』

一刀は最近の出来事を思い返していた。

『でも三国志の世界に行かなかったら俺は華琳に…魏のみんなに…』

「一刀君？大丈夫かい？」

Sが自分の声に反応をしなかった為に、一刀の腕にそっと触れてきた。

「あ、すいません。」

「それで一刀君は三国志の世界に行ったんだって？」

「はい。」

一刀は思っていた。どうせ信じられてなんていない。頭のおかしい奴とでも思われてるのかなと。

「本当に良い夢だったんだね。」

「…夢なんかじゃないですよ！！本当に行ったんです。」

「…そう。」

一刀はSの反応を見ながら間違いなく信じてくれてない事を悟った。
というより信じる気なんて毛頭ないという事を…

「あの…帰りたいんですけど…」

「一刀君、君は今日から1ヶ月ここで過ごす事になってるんだ。」

「え?」

それは一刀には理解できなかった。

「じ,冗談ですよね?それに俺は学生ですよ?学校だってあるんですから。」

「ご両親からは何も?」

「…はい。」

「フランチェスカ学園に君が行く事は…もう…」

「はは…ははは。デタラメ言わないで下さいよ。」

一刀は笑い声を出しながら、その場で携帯を出して母親に電話を掛けた。

プルルルル…プルルルル…『お掛けになった電話番号は現在使われておりません。』

ガチャン！！

刹那、一刀の携帯が床に叩きつけられた。

「どいて下さい！！俺は家に帰ります！！」

「一刀君、落ち着いて！！」

一刀は部屋から出ようと必死に抵抗した。

「離せ！！俺は家に帰る！！別にドコもおかしくなんかない！！離せ！！」

だが応援を呼ばれて大人に囲まれては、逃げる事など出来なかった。そして捕まりながらも抵抗を止めなかった一刀は鎮静剤の注射を腕に受けた。

注射を受けて眠ってから何時間が経ったのだろうか…

一刀は身体を起こして直ぐに腕に軽い違和感を感じた。長袖をめくり上げてその場所を見ればガーゼが施されていた。一刀は只、その場所を見つめた。

『俺…何やってんだよ。俺はべつにドコもおかしくなんか…』

一刀の眼からは既に大量の涙が流れていた。

その日から一刀は壊れた機械のようだった。

担当であるSの質問には適当な返事でいつも上の空、病院の食事にも一切手をつけることはなかった。また、明らかな睡眠不足に陥っていたが一刀は眠らなかった。

その為に栄養の為の点滴、眠気を増幅するための注射が毎日のように行われていた。お陰で両腕は見るに堪えない色になっていた。

気付けば、そんな生活を繰り返し予定の1ヶ月を大幅に通り過ぎ1年が経とうとしていた。

「一刀君、聞いているかな?」

今日も一刀はいつもと同じ上の空だった。

「君が此処に来てもう1年が経とうとしてるんだが…君のご両親がね。これを…」

Sは一刀に茶色い封筒を握りしめさせた。

「これの意味が、今の君に分かるかな?」

茶色い封筒の中にはびっしりと1万円札が見える。

「君は今日から此処を出て、1人で頑張らなくちゃいけないんだぞ。」

「…今まで、お世話になりました。」

本当にSと話すであろう最後の日に、一刀はSに頭を下げた。

「一刀君、君はやっぱり…」

そして、一刀は病院を出た。

一刀は何事にも無気力のような状態になってからでも、Sの質問で必ず『はい。』と答えている質問があった。

三国志の世界に行ったんだね?

「はい。」

一刀の5年間　4（後書き）

暗い…そして、痛いですね。

一刀の親を最低な親にしてしまったかもしれませんね。

さて、一刀の過去も次回でラスト予定です。

作者も何だか一刀の過去でテンションが下がってきたので、早く楽しい話が書きたいです，笑

一刀の5年間　5

「もう…5年…ぐらいかな。」

部屋のソファに横になりながら呟いてる男がいた。名前は北郷一刀。彼のこの5年間は同い年の人達とは全く違う5年間だっただろう。三国志の世界に飛ばされ…帰ってきたと思ったら、親に病院に連れて行かれ…

学校を退学になり、点滴や注射ばかりの病院で1年を過ごし…親からの最後のお小遣いで本当に孤独な生活を経験している。

一刀は病院を出てから、家に帰る事など少しも考えていなかった。それはきっと、親からの最後の小遣いが大きく起因しているのだろう。病院を出てから直ぐに部屋を借りて、フリーターになっていた。

ただ…ソファで横になれる程の一刀になれるまでどれだけの苦労をしたのだろうか?想像するのは容易ではない。

「魏から帰って5年…華琳が…皆がいるんだから、凄い国になってるんだろうな。みんな元気かな?」

今日も一刀は魏のみんなの事を想っていた。最初は彼女達を思い出しては涙を浮かべていたが、今では笑顔で思い出せるようになっていた。それでも一刀には5年の間、女性関係は全くなかった。フリーターの身である為に下は女子高生から上も高齢の方まで色々な方たちとアルバイトを通して接することはあった…が、どんな女性にも『好意』という感情は沸いた事が無かった。大きくは彼女達との

出会いにあるのは事実なのだが、自分の過去に嫌悪感を抱いているのもあった。

良く見ると、ソファの後ろに積まれているのは長袖ばかりだった。
全ては、腕の痕を隠すために…

「さて、明日も早めに起きないとな。」

一刀はアルバイトに備えて今日も眠りについた。

一刀の5年間　5（後書き）

平日よりも休日の方が忙しいＯＬです。

いや、昨日は「恋姫好きな私」・「東方好きな友達」・「ボカロ好きな友達」の３人でカラオケ行って…喉が，笑

さて暗い一刀の過去も終わりです♪

いよいよ戻りますよ→→

今からたくさんのメッセージに返信していきますね♪

戻った理由

「…ん。」

「ん?」

眠っている一刀の頭の中で何かが聞こえた。

「…りん。」

「だ，誰だ?」

「どぅあ~りん♪」

「誰なんだ?」

「ようやく、私の声が聞こえたようねぇん♪」

「一体、なんなんだ。これは…夢…か?」

「此処は、ご主人様の無意識の世界よん。」

「無意識の…それで…アナタは一体?」

「アナタなんて!!ヒドイわん!!私はあなたの子猫ちゃんよ。」

「…」

一刀は戸惑っていた。

「あ，あまり時間もないから率直に話すわ。ご主人様、５年前に三国志の世界に行ったわよねん？」

「え！！」

一刀は驚いてた。自分が三国志の世界に行った事を知る人は少ない。それに、両親にもそうだったが一刀から三国志の世界に行ったと言う事があっても言われたのは初めてであった。

「ど，どうして、それを？」

「分かりやすく言うなら…私のせいでご主人様は三国志の世界に行ったのよん♪」

「アナタの？」

「そうなのん。」

「１つ聞きたいんだけど…俺は選ばれて三国志の世界に？」

「それは違うわね。もしそうだったら、ご主人様が歴史を変えようとした時に頭痛が起きたり、歴史を変えた結果で身体が消えちゃったりしたと思う？」

「そう…だよな。」

「で～も、ご主人様が生まれた世界の三国志とは違う三国志の歴史にした事によって新しい三国志が生まれたのも事実よん。」

「つまり、俺が行った三国志の世界も本当はこの世界の三国志のように…」

「流石、私のご主人様ね♪でも、それに逆らったご主人様は消えてしまったというわけなのよん。」

「よく…分かったよ。でも5年経った今、何の用なんだ?」

「それは…ご主人様が…ご主人様と覇道を進んだ魏の子達が危ないのよん。」

「危ない?華琳達が?」

「間違いないわん。私にも何が起こるかは分からない。で~も、間違いなく何かが起こるのよ♪」

「アナタの力でどうにか出来ないのか?」

一刀は声を荒げた。

「あ~ん。怒らないでダーリン♪方法はあるのよん。」

「方法?」

「私は確かに何も出来ない。でも、ご主人様のアナタなら再び三国志の世界に送る事は出来るわ♪」

「また…行けるのか?」

「でも、問題もあるわ。」

「問題？」

「まず、前のご主人様のいた時から何日のまたは何年の月日の世界に行く事になるか分からないのん。」

「え！！つまり俺の知るみんながお婆ちゃんになってる事も？」

「確率はゼロじゃな～いわよん。」

「そんな…」

「それに、次はコッチの世界も時間が進むの。前回は私のせいという事で時間の経ってない世界に戻してあげられたけど、今回は…それに帰れるかも分からないのよん。」

「そう…か」

一刀は冷静に耳を傾けていた。

「そして、これは絶対よん！！」

「絶対？」

「それは…ご主人様がどうして再び三国志の世界に来たかを絶対に誰にも教えてはいけない。つ・ま・り！！魏の子達には危機が迫ってると言う事を誰にも話しては駄目なのよ～」

「もし…話したら？」

「身の破滅ねぃ、三国志の世界にもいられなくなるし、生まれた世界にも絶対に帰れなくなっちゃうわん。」

「こ，怖い事をサラっと言うな。」

「もう時間も無いのよん。返事を聞かせて、どぅあ～りん♪」

一刀は走馬灯のように三国志の世界から帰ってきてからの5年間を思い出していた。そして…

「行くよ!!俺は華琳達に…みんなに会いたいし、助けたい!!」

「本当に良いのねん?」

「あぁ。」

「あ～ん。素敵よご主人様。食べちゃいたいわ。」

「あの…俺はどうすれば?」

「起きれば分かるわん。私のご主人様…」

戻った理由（後書き）

さてと、次回から完全に話は恋姫の世界に戻りますよ♪

そういえば、メッセージを沢山下さる読者の皆様方…感想の方にコメント書いて下さると嬉しいかもです（＊＾―＾＊）

感想は皆様も見られますから、私がどんな女かも分かりますしね♪

一刀の身体（稟・風

一刀が凪の制服を受け取った次の日の深夜…まだ眠っている一刀が寝台にいた。そして同じ部屋の中に2人の動く影があった。

「風、やはりこういう事は…」

「稟ちゃん、静かにして下さ～い。お兄さんが起きてしまいます。」

部屋の中で動く2人の正体は郭嘉・テイイクだった。

「本当に一刀殿が…まったく、アナタという方は…」

3年振りの対面となった郭嘉は眠っている一刀の頭を優しく撫でていた。

「って風！！アナタは何をやってるんですか？」

郭嘉がテイイクを見れば、寝台に立って今にも一刀に覆い被さろうとしていた。

「見てわかりませんか～」

「一刀殿に覆い被さろうとしてますよね？」

「そうですよ～」

「起きてしまわれますよ。」

「それが、お兄さんは中々眠りが深いのか起きた事がないんですよね～」

「前科があるのですね。」

そんなやり取りを郭嘉・テイイクが寝台でしていると…

『さて…どうしたものかな。』

一刀が目を覚ましていた。

『声から察するに稟・風だな。2人とも夜のうちに帰ってきたんだな。しかし、稟の手かな?とっても気持ちいいな。頭を撫でられるなんて…いつ以来だろう。』

「風、そろそろ戻りますよ。」

「風ちゃんはお兄さんが起きるまで上で寝る事にします。」

そういうとテイイクは仰向けに狸寝入りしている一刀の上に横になった。

『風め、いつもこんな思い切り寝てたんだな。眠りが深過ぎるぞ、北郷一刀!!』

「まったく、私は部屋に戻りますからね。」

郭嘉はそう言うと一刀の頭から手を離し、寝台を離れようとした時だった。

ガシッ

「な！！」

郭嘉の手が一刀の手に掴まれていた。

「一刀…殿？」

「おかえり、稟・風」

「お，起きてらしたんですか？」

「本当に少し前にね。」

「お兄さん、狸寝入りとは感心しませんね～」

「夜中に人に覆い被さるのは良いのかな？」

「一刀殿の方が正論ですよ風。それにしても一刀殿、背が少し伸びたというか痩せましたか？」

「あぁ、背が伸びた分だけね。稟もスタイルが3年の間に更に良くなったんじゃないか？」

「すたいる？」

「あぁ、なんていうか身体が綺麗というか容姿が良くなったんじゃないか？」

「そ，そうですかね。別に自覚はありませんが。」

「そういえば、稟ちゃんは胸も成長したんですよね。それで、お兄さんは風には何も言ってくれないんですね～」

「いや、風は会った時に…」

「そういえば、一刀殿には改めて言わなければなりませんね。ただいまです一刀殿。そして…本当におかえりなさいです一刀殿。」

「ただいま、稟…そして、おかえり。」

郭嘉はテイイクの時とは違い、決して抱きついてきたりはしてこなかったが頭を上げた時の郭嘉の眼には一刀の部屋に差し込む月明かりで涙が綺麗に輝いていた。そしてそれは一刀も同様だった。

「あの～。風ちゃんがいる事を2人とも忘れてませんかね～。」

「ご，ごめん風。只、稟に会うのは今が初めてだったからね。」

「一刀殿、それにしても風が眠りは深いと言ってたのですが何故にこのような時間に？」

「たまたまだよ。もしかしたら、2人とどうしても話をしたかったから起きたのかも。」

一刀は本当の事は言わなかった。恐らく一刀の眠りは前に、この世界にいた時とは比較にならない程に浅くなっただろう。勿論それは、病院と長いフリーター生活によるものである。

「お兄さんが起きてしまっては面白くないので風は部屋に戻ります～」

「私も失礼させて頂きますね。一刀殿、夜分に失礼しました。」

「そっか。こんな時間だしね。2人ともおやすみ。」

2人が部屋を出て行くと一刀は再び寝台に横になった。

「眠りの深さか…気をつけないとな。でも、稟に会えて良かった。後は…霞と…秋蘭にも、もう一回会った方が良いよな。」

そう呟きながら再び一刀は眼を閉じた。

「どう思いました、稟ちゃん」

「確かに風の言うとおり、痩せ過ぎかもしれないわね。」

一刀の部屋を出た2人は一刀の身体について…疑問を持ち始めていた。

一刀の身体（稟・風（後書き）

必死で誤字脱字をＰＣで１話から修正しておりました。

結構、出来たかな？

内容は当然に何も変わってませんよ♪

というか１話から修正してたら、自分の小説にハマってました，笑

仕合う2人

「さて、何処にいるかな？」

一刀は凪から貰った制服を身に纏い部屋を出た。今日は一刀には3つの目的がある。張遼に会う事。夏候淵に会う事。成都に行く事を全員に伝える事。とりあえず、皆がよくいる庭に向かっていると向こうから本を大量に抱えた猫耳が見えた。どうやらジュンイクからは一刀の姿が見えてないようである。

「お、桂花か、丁度良いな。」

一刀は2人の居場所を聞こうとジュンイクを訪ねた。

「桂花。」

「げ！！急いでるの、何か用？」

「げ！！ってなんだよ。それに止まってくれないんだな。」

「急いでると言ってるのが聞こえないの？馬鹿なの？死ぬの？」

「あ～はいはい。それで霞・秋蘭って今日は何処にいるとか知らないかな？」

「霞？アンタ、昨日会わなかったの？」

「いや、ちょっと別の用が…」

「まさかもう誰かと寝たのね…そして次は華琳様がいない間に私を。寄るな!!ド変態!!」

「ち，違うっつうの!!」

「あ。」

一刀は言葉と同時に本気で言ってる事を見せるために、抱えていた本を何冊か取りあげた。

「め，眼が腐りそうだわ。それに孕んじゃう～!!」

「腐らないし、孕みません!!それで知ってるのか？知らないのか？」

「秋蘭は今日は私と玉座で一緒よ。華琳様がいないし、何処かの全身精液男のせいで忙しいのよね。」

「も，申し訳ない。じゃあ、秋蘭は霞に会った後に会いに行くよ。」

「霞は知らないわ。何処かでアンタを待ってるんじゃないの？…じゃあね。」

「え？」

気付けば、一刀とジュンイクは玉座の間の前まで来ていた。

「助かったよ桂花。後でな。」

「フンッ！！」

ジュンイクが開けた扉の隙間からは夏侯淵・郭嘉・テイイクの姿が見えた。

『忙しそうだな。それにしても、俺を待ってる…か…霞め。直ぐに見つけてやる。』

完全にジュンイクの言葉を信じ切っている一刀は考えながら城を徘徊してると突然、後ろから声を掛けられた。

「隊長！！」

「おっ凪じゃないか、どうしたんだい？」

「庭に用がありまして。」

「庭に？」

「一緒に行かれますか？きっと凄いですよ。」

「凄い？」

一刀は訳が分からなかったが、興味があったので楽進についていった。

「なるほどね。」

一刀は庭に広がる光景を見て全て理解した。庭には2人の将と周り

には少しだけ人だかりができていた。

『霞…変わらないな。それにしても桂花の奴、知ってたな。』

庭にいたのは一刀の探していた神速の張遼と飛将軍の呂布がいた。
2とも少し服が汚れているのでどうやら何度か剣を交えたようだ。

「呂布ちん、次で最後にしよか～」

「分かった。」

「霞様・恋様、頑張って下さい！！」

楽進が2人に聞こえるように言うと2人が此方に気付いたようだ。

「凪ぃ、見に来て…かずとぉ！！」

「霞ぁ！！怪我するなよぉ！！」

一刀も最高の笑顔で張遼に手を振っていた。

「こりぁ～恥ずかしいとこは見せられへんな。恋、本気でいかせてもらうで！！」

「恋も、ご主人様に…良いトコ…見せる。」

「ご主人様？一刀の事かいな？」

…コクッ

「上等やないか!!この後、どっちが一刀といれるか勝負や!!」

「…なぁ、凪」

「は，はい。」

「俺のせいじゃ…ないよな。」

「お，恐らくは…」

一刀・楽進はそんな張遼・呂布を苦笑いで見つめていた。そして仕合は始まった。

キン!ガキン!

隣に楽進がいるのに悪いが一刀は2人の戦いに呆気にとられていた。それほどまでに2人の戦いは凄い。自分の得物である飛龍偃月刀と方天画戟を己の身体の一部のように操り、眼にも止まらぬ攻撃が繰り出されていた。

「これ…大丈夫なのか?」

「霞様も恋様も仕合という事は分かっているでしょうから…」

「恋!!本気でこないと怪我するでぇ!!」

「本気…いく。」

「た，多分、大丈夫でしょう。」

『凪…多分なんだね。』

一刀は冷や汗を感じながら、思っていた…

仕合う2人（後書き）

霞お姉様には久しぶりの登場で戦って頂きました。

関西弁は…多分、大丈夫…なはず，笑

一刀とサラシ（霞

「本当に凄かったよ霞。」

「そんな面と向かって言われるとウチ、照れるわぁ。」

張遼・呂布は仕合を終えて今は一刀・張遼の2人だけが庭に残っていた。

一刀と一緒に仕合を見ていた楽進は仕合が終わると仕事があると戻り、呂布はセキトと何処かに消えてしまった。もしかしたら、2人とも一刀・張遼に気を遣ったのかもしれない。

「そや！！おかえり、か～ずと♪」

「霞はお疲れ様。」

「そこは、ただいまやろ一刀。」

2人は庭にある芝生に座っていた。あの時のように…

「一刀、覚えとる？一刀？」

「…」

「どうしたんや、一刀？」

「いや、その…サラシが…」

張遼の姿を見れば、いつも胸に巻いているサラシが呂布との仕合のせいか今にも緩んで落ちそうになっていた。

「一刀、ウチの胸で欲情したん？」

「い，良いから早く締め直して。」

一刀は張遼に背中を向けた。

「相変わらず可愛いなぁ一刀。…ちっと待っとってな。」

ガサガサ

『霞…は，早くしてくれ、俺も男なんだから』

思っていると一刀は背中に不意に重みを感じた。そして張遼の声もともに…

「一刀、何勝手に消えとんねん！！ウチが…ウチがどれだけ心配したと思っとんねん！！」

張遼は芝生に座る一刀を後ろから強く抱きしめていた。

「ご，ごめんな霞。本当に…」

一刀は張遼の先程までの態度からは予想出来なかった出来事に戸惑ったが、ゆっくりと張遼の腕に手を添えた。

「約束…覚えとる？」

「勿論だよ。」

「言うてみて。」

「旅…だろ?」

「ホンマにウチなんかとの約束を…」

「霞?」

「一刀、ごめんな。ウチは最低やわ。」

「どうして?」

張遼の声が震えていた。

「一刀なんて、どうせウチとの約束なんか忘れて…」

「忘れるわけないだろ!!」

一刀が張遼の腕を解き、その場に背を向けて立ち上がった。

「一刀…」

「霞…俺が本当に約束を忘れる男だと思ったの?」

「…嘘や、一刀は約束を守ってくれる男やもんな。ウチが只、一刀が消えたゆう事を認めたくなかっただけなんや。」

一刀は最初から分かっていた。消えなければ、張遼を悲しませずに済んだ事に…

「もーしまいや！！」

「霞？」

「今は目の前に一刀がいるっちゅうのに情けへん。ウチらしくないわ！！」

「あはは、霞らしいよ。」

お互いに向かい合ってはいないが、相手が笑顔になってる事が分かっただろう。

「霞。」

「うん？」

「その…そっちを見たいんだけどサラシは大丈夫？」

「にゃははははっ！せやなぁ～。どうやろ？」

「霞～！！」

2人の声が、庭に響き渡った。

一刀とサラシ（霞（後書き）

少し更新が遅くなりました。

貴重な土日が仕事で…

泣きたい。笑

いつまで…

張遼との再会を果たした後の一刀は自室に戻ってきていた。

『さてと、霞に会う事も出来たし後は秋蘭だな。それと皆に、成都に行く事を言わないといけないよな。玉座には秋蘭の他にも桂花に稟・テイイクがいる筈だから、そこで言えば言いか…』

一刀はこれからの事を考えていた。

『それにしても…いつまで隠し通せるんだ?この痣…それに魏の皆に迫る危険って?夢の人も全然出てこないし…』

一刀は痣の部分を軽く摩る。

『とりあえず、痣だけは絶対に見つかるわけには…いかないよな。ふぅ。さてと、桂花が一緒だと休憩もないだろうし飲み物でも差し入れてやるか。』

こうして、一刀は夏侯淵達のいる玉座の間へと向かった。

いつまで…（後書き）

お久しぶりです。

いやぁ、昨日の深夜に「さっさと更新しろコラ!!沈めるぞ!!」とメールが来た時にはビックリしました。

あ…リアル友達ですよ，笑

ちょっと仕事が忙しいんです!!

あ～携帯を恋姫の着せ替えにしようか考え中。

→え?笑

おかえりの言葉

「やけに静かだな？」

玉座の間の扉の前で思わず一刀は溢した。確かに、静かだった。扉の隙間から光が射し込んでいるのは見えたが、本当に４人もいるのかと思わせるぐらいに…

コンコンコン

「俺だ。一刀だ。」

「…」

返事が無かったので、一刀は扉に手を掛けて静かに開けた。

ギィ

「え！！」

一刀は驚いた。扉を開ければ、玉座の間には誰一人いなかった。

「誰もいないじゃないか！！でも…」

一刀は直ぐに気づいた。

「凄い良い匂いがするよ、流琉。」

「流琉、兄ちゃんにバレてるよ。」

「ちょ，ちょっと季衣!!」

「なんだ、季衣もいたのか。」

奥の柱の陰から許緒・典韋が姿を現した。

「兄様、お腹空いてるんですか?」

「流琉の料理は良い匂いがするから、直ぐに分かったよ。」

「良かったね、流琉。」

「もう!!ココは見つからない方が良かったのよ、季衣。」

バン

典韋が話終えると同時に、一刀の入ってきた扉が勢いよく開けられ一人の女性が入ってきた。

「一刀!!美味しい酒持ってきたで~!!みんなで呑も…」

玉座の間に勢いよく入ってきた女性は張遼だった。そして張遼は言いながら固まった。

「霞、みんなでって?」

「「あ…」」

許緒・典韋が同時に洩らした。

…

玉座の間で固まる張遼
そんな張遼を見て首を傾げる一刀
その2人を見ながら更に固まる許緒・典韋

一瞬の静けさが漂ったのだが、しかし!!1人の女性によって静けさは破壊された。

「ちょっと!!もうバレバレじゃない!!だいたいアンタは何で気づいてるのよ!!死になさいよ!!」

「桂花、いたのか…という事は皆いるのか?」

違う柱の陰からジュンイクが怒りながら出てきた。

「もう出て良いですかね~」

「風もいたんだね。」

「稟も…」

「一刀殿、アナタという人は…」

「なんや、もう出てって良いんか?」
「隊長、流石です。」
「隊長は腹ペコさんなの。」

「凪に真桜・沙和まで…でも一体どうして？」

「北郷、皆がお前の為に集まってくれたんだぞ。」

「秋蘭。俺の為に？」

許緒・典韋から始まり、今は魏にいない曹操と夏侯惇以外の全ての魏の将が柱の陰から一刀を囲むように現れた。

そして…

「北郷、おかえり」
「兄ちゃん、おかえり」
「兄様、おかえりなさい」
「…おかえ…フンッ！！」
「隊長、おかえりなさいませ」
「隊長、おかえりや」
「隊長、おかえりなの」
「一刀、おかえり～」
「一刀殿、おかえりなさい」
「お兄さん、おかえりですよ～」

一刀は魏の皆から1人ずつ言葉を掛けられた。

「みんな…」

一刀は必死に耐えていた。眼に溢れる何かを…そして、最高の笑顔と同時に何かを流しながら答えた。

「みんな、ただいま。」

おかえりの言葉（後書き）

一刀…羨ましいぞ！！

あんな可愛い子達から「おかえり」言ってもらえるなんて，笑

でも、一刀の涙を流しながらの笑顔も…カッコイイんだろうなぁ♪

女の子達の雰囲気が出てなかったら、本当に申し訳ありません。

立食パーティー

今、玉座の間では立食パーティーが行われていた。

「これって…」

一刀は目の前で始まった立食パーティーに驚いていた。

「私達は2度目だぞ。お前が帰った後に一度な…」

夏侯淵が一刀の隣に静かに立っていた。

「華琳…覚えてたんだな。」

「華琳様はあまり乗る気じゃなかったがな。」

「華琳らしいよ。食べるなら食べる。話すなら話せ…とでも思ってるんだろうな。」

「違いないだろう。」

「でも、驚いたよ。立食パーティーにもだけど、皆が此処にいるなんて。」

「北郷、絶対に言うなよ。」

「何？」

「桂花のやつがな、北郷が最後に私に会いに来るから改めて全員で迎えてやろうと言いだしてな。」

「え…もう一度言ってくれないか？」

「北郷…気持ちは分かるぞ。私達も驚いたからな。それで、お前が霞に会ってる間に色々と準備をな…」

「ありがとう。秋蘭。」

「…私だけじゃなく、皆に言ってあげてくれ。」

「あぁ。ちょっと言ってくるよ。」

一刀は夏侯淵から離れると玉座の階段の全員が見渡せる場所に立った。

「皆、聞いてくれ！！」

一刀の声に気付き、全員が一刀を見ていた。

「その…本当にありがとう。俺なんかの為に、その…」

「別にアンタの為なんかじゃないわよ！！」

ジュンイクが声を出した。

「そやで。ウチらがこうしたいからしただけや。」

張遼もジュンイクにの直ぐ後に乗ってきた。

「桂花・霞…お，俺は帰ってこれて、此処に今居られて本当に嬉しいよ。」

一刀は言いながら思っていた。自分の過去の話をしようかどうしようか…流れで打ち明けた方が楽になれると…

「それで、いきなりなんだけど…明日…その…成都に行って良い？」

でも一刀は過去の話をするのは止めて、単刀直入に切り出した。話して自分が楽になっても大切な人達が傷つくのなら話さない方が良いと。そして…

「行ってらっしゃいなの、隊長。」

「沙和？」

一刀はポカンとしていた。

「もう手続きは済ませてますよ～」

「風？手続きってもしかして…」

「兄様。みんな分かってますよ。」

「流流…そうみたいだね。」

一刀は苦笑いしながら、その状況に勘付いた。

「あはは。そっか…じゃあ、俺…天の御遣い北郷一刀は成都に向か

います。」

「隊長、私が護衛をさせていただきます。」

一刀の宣言の後に楽進が直ぐに反応し答えた。

「凪が？…」

一刀は周りから漂う不吉な気配に勘付きながらも…

「良いの…かな？」

楽進以外の将達を見まわした。すると…

「「良いの！！」」

という目線に串刺しにされたのだった。

その後は直ぐに一刀の立っていた位置に張遼が立ち、立食パーティーは本格的に始まりを告げた。

皆が食べ、呑み、笑い…その日は終わりを迎えた。

立食パーティー（後書き）

さて、一刀君には成都に向かって頂きますよ。

真剣に気合い入れて書くぞぉ！！

それぞれの不安

一刀と楽進が成都に向けて出発した頃、成都では…

『今日には向こうを…出たかしらね？』

1人の少女が借りている部屋の中で寂しげな顔を浮かべていた。

『どんな顔をして会えばいいのよ…。勿論、一刀が帰ってきて嬉しいわよ。けど、一刀は帰って来て今の魏を見てどう思ったかしら…何が素晴らしい国にする！！よね？笑っちゃうわ。』

彼女の名前は曹操。一刀が帰って来てから、彼女はいつも考えていた。

コンコンコン

曹操が部屋で俯いてるとノックの音が聞こえた。

「華琳様、春蘭です。起きておられますか？」

ドアをノックしているのは曹操と成都を訪れている夏侯惇であった。

彼女の声は決して曹操を起こそうというものでもなく返事が無ければ静かに立ち去ろうという雰囲気であった。

「起きてるわ。入りなさい。」

「失礼いたします。」

夏侯惇が部屋に入ると曹操は部屋の真ん中にある椅子に腰かけていた。

「春蘭、早いじゃない。どうしたの？」

「凪と北郷が、魏を今日にも出るようです。」

「そう…」

「華琳様…」

「どうかした春蘭？」

「い，いえ…私は愛紗と鍛練の予定がありますので失礼します。」

「…分かりました。」

夏侯惇は部屋を出てから借りている自室に向かいながら考えていた。

『華琳様の様子がおかしい。一刀が帰ってきた事を教えてくれた時の華琳様は、確かに昔の華琳様だったのに…華琳様は北郷が帰ってきた事が嬉しくないのか？べ，別に私だって嬉しくは…その…だー！！北郷！！お前が何とかしてくれ！！』

時間は少し遡り、此処は一刀の部屋

「本当に、本当に楽しかったな。」

魏の将達との立食パーティを終えた一刀が寝台に寝ころびながら呟いていた。

「こんなに思い切り笑ったの…いつ振りかな？」

一刀の眼には薄らと光るモノがあった。でも当然なのかもしれない。向こうの世界の5年間では充実していたのは本当に最初の数カ月で、後は病院とアルバイトの日々だったのだから…

「戻れて本当に…良かった。」

一刀は自分の眼を片手で覆いながら溢れているモノに気がついた。

『一刀!!しっかりしろ!!もう数時間後には凪と成都に出発だぞ…春蘭、そして…華琳。早く会いたい…でも何て声を掛けたら良いんだろう…あんなに泣かせちゃったもんな。』

それぞれの不安（後書き）

気分一新、丁寧に書いてみましたがどうですかね？

あ…私とお喋りしたい方は気軽にメール下さいね♪

恋姫とアニメの話なら…

とりあえず、出雲ちゃん可愛い（≧ω≦）b

→ごめんなさい。笑

成都の門

「思い出すよ。あの時を…」

「隊長？」

今、一刀と楽進達の前には成都の都が広がっていた。

「この場所で蜀と呉の同盟軍と戦った事を、そして…」

「もう3年も経ちますよ。」

「3年…か」

空を見上げれば夕焼けを通り越し、既に薄暗くなり始めていた。

「隊長。感傷に浸るのも良いですが、急ぎましょう。」

「あぁ。」

成都の城の門では思わぬ再会が待っていた。

「お兄ちゃ～ん！！」

ボスッ

「隊長！！」

楽進も戸惑うような恐ろしい速さで開門と同時に1人の少女が一刀に飛びかかっていた。

「イタタタ…え…り，張飛…さん!!」

突然の衝撃にグラついた一刀に抱きついてきたのは蜀の顔の1人でもあり、一刀とは既に呉で会っていた張飛であった。そして一刀は状況に戸惑いながらも呉での約束を思い出していた。

「張飛…さん?お兄ちゃん!!鈴々はり…んぐっ!!」

一刀は必死で張飛の口を押さえていた。

『間違いない。鈴々…絶対に忘れてる。』

一刀と張飛の間には約束があった。それは…2人が次に会う時が本当の初対面になると言う事を…

「隊長、これは一体…お兄ちゃんというのは…」

楽進が冷めた気を纏いながら、冷めた目で一刀を見ていた。

「ち，張飛さんは誰かと多分、間違えてるんだよ。あはははは…」

『マズイ。明らかに凪の眼が…それに鈴々の抵抗が。このままじゃ約束が…』

一刀が必死に張飛の口に手を当てながら悩んでいると…

「鈴々ちゃぁ〜ん。待って下さいよぉ〜。」

向こうからはトテトテと帽子を押さえながら走ってくる少女が見えた…

「朱里様、お久しぶりです。」

「あ、凪さん。こんばんは。その…様は止めてほしいんですけど…」

『彼女は確か…』

楽進と少女が挨拶をしてるさまを一刀は張飛を抑えながら見ていた。
すると少女が一刀の方に歩いてきた。

「こ，こんばんはでしゅ。あ…」

『か，可愛い。』

一刀は思った。

「隊長。」

「い！！凪！！」

楽進が冷めた目をしながら拳をあげていた。

「氣弾が必要でしょうか？」

「い，いえ、結構です。あ…こんばんは。」

「あの…天の御遣い様ですよね？」

「御遣いだなんて、名前は北郷一刀って言うんだ。好きに呼んでくれて良いからね。」

「わ，分かりました。私は…」

「諸葛亮ちゃんだよね？」

彼女の名前は諸葛亮孔明、真名は朱里

「へ！！どうして…」

「君は有名だし、戦いの時にもね。」

「そ，そうですか…あ、真名は朱里って言います。」

「真名を良いのかい？」

「桃香様の意思ですし、私は構いません。それに…」

「それに？」

「あ、いえ！！」

「？…そうそう。」

一刀は不意に諸葛亮の耳元に顔を寄せた。

「は，はわわっ！！」

「隊長！！」

「ひぃ！！」

諸葛亮は慌て、楽進は氣弾を放ち、一刀はギリギリで避けた。

「な，凪！！何をするんだ！！」

「そ，それは、此方のセリフです。」

「ご主人様、大胆でしゅ。」

「へ？ご主人様？」

「朱里様、それはどういう…」

一刀は思い出していた。今、魏に1人だけ一刀の事をご主人様と呼ぶ子の事を…

「そういえば、恋も俺をご主人様って…とにかく今は、ちょっと朱里…さんと話があるから凪は張飛さんを見ててくれるか？」

「え…はい。」

楽進は少し困惑しながらも、一刀の表情に承諾した。その後、一刀・諸葛亮は少しその場を離れた。

「それで、私に何か？」

「あの…朱里は俺が何処に舞い降りたかを…」

「呉ですよね？」

「やっぱり知ってたんだね。」

「冥琳さんから書簡が来ましたので、万が一にも備えてという事で…」

「良かった。それで見ての通り、鈴々がすっかり忘れてるみたいなんだ。」

「も，申し訳ありません。」

「あ，謝らないで。でも、凪は何も知らないから宜しくね。」

「はい。」

成都の門（後書き）

さて今回の話で朱里を初登場で「はわわ」して頂きました。笑

一刀の移動中の描写は書きませんでした。

さって久しぶりにＰＣの真恋をやり始めた作者です，笑

予想通り

成都の城門での入り口での諸葛亮の機転の利いた口により、無事に入城できた一刀と楽進達はそのまま曹操達のいる部屋まで案内された。

「此処が元完璧超人の部屋なのだ。」

「完璧超人って…間違っちゃいないけど。でも…元？」

一刀は連れて来てくれた張飛を見ながら苦笑いを浮かべていた。楽進は諸葛亮と着いた報告があるとの事で途中で別れたていた。

「鈴々、ありがとう。もう良いよ。」

「やっと鈴々って呼んでくれたのだ。」

「呉で言われた事を忘れちゃだめだぞ。」

「ごめんなのだ。」

全く反省の見えない張飛の頭を撫でてやると…

「気持ちいのだ。じゃあ、お兄ちゃん明日遊ぼうね。」

「あぁ。」

小走りで一刀の前から消えていった。そして、一刀は今…曹操のい

るだろう部屋の前に立っていた。様々な事を思い出しながら…でも、一刀は何故か顔をニヤつかせていた。

コンコンコン

「か，華琳。俺だ。一刀だ。」

…

一刀が中にいるだろう曹操に呼びかけた。しかし、返事はなかった。

「もう…いるんだな。」

一刀はそう呟くと、その場所から離れた。

予想通り（後書き）

さて、分かる人なら一刀が何処に行ったか分かりますよね？
それで今更の質問なのですが…1つ1つの部の文章が短いでしょうか？

今回のように短いのは故意的にですが…普通に書いてるのも短いですかね？

実は携帯を変えたので…多分、携帯でも長文を書けるようになったので…

…前の携帯でも書けたかもしれない事は置いといて，笑

文章が長く書くとそれだけ内容も細かくなりますが、それが読者様に良い事なのかどうか…

感想やメールで多くの意見を下さると助かります。

まさかの失神

「綺麗で大きな月だな…まるで、あの時みたいじゃないか。」

一刀は城を出て驚いていた。空を見上げれば、大きな月が外を照らしていた。

『確か向こうだな。』

一刀はそう思いながら、城の横にある林の中へと入ろうとしていた。すると…

「北郷!!」

一刀の後ろから懐かしくキレのある声が聞こえた。

「春…蘭?」

振り向いた一刀は硬直していた。そこに立っていたの月明かりに輝く黒髪を靡かせた夏侯惇であった。

「本当に…北郷なのか?」

「何だよ。あんな大きな声で呼んどいて。適当に呼んだのか?」

「て，適当な訳がないだろう!!その林に入れるのは華琳様を含めた魏の将と貴様だけなのだぞ!!」

「…1つ聞いて良いか？」

「なんだ？」

「もし俺じゃなかったらどうしたんだ？」

「刎ねる。」

『…春蘭…何も変わってないんだな。』

一刀は笑みを溢していた。

「お前なぁ、魏の将が蜀で人を殺したりしたら…」

「別に問題はない！！この林に部外者の者が入ったら、刎ねても良い事になっているからな。」

『…おいおい。華琳のやつ、やり過ぎたろ。というか劉備さん達もよく許したな。』

一刀は頭の中でそんな事を考えてると急に強い力で身体を持ちあげられた。

「春蘭！！何をするんだ！！く，首が絞ま…」

見れば夏侯惇が一刀の襟元を両手で鷲掴みにし持ち上げていた。

「春蘭。勝手に帰った事なら謝るよ。だ，だから下ろしてくれ。」

一刀の顔はみるみる青くなっていた。春蘭は顔を俯かせていて一刀

から見えない。

「貴様は…」

「え?」

夏候惇は一刀と眼を合わせずに話し始めた。

「貴様は秋蘭が泣いた所を見た事があるか!!」

「い…いや。」

一刀は首を絞められながらも夏候惇の真剣な言葉に正直に答えた。

「私は!!生まれた時から…華琳様と出会う前から一緒だが、秋蘭が涙を流すとこなど見た事が無かった…見たくなかったのだぞ!!」

ギリギリ

夏候惇の両手には更に激しく力が入っていた。

一刀は首を絞められながらも必死で夏候惇の言葉を聞いていた。

「なのに貴様は…貴様は秋蘭を!!それに…それに…」

一刀は消えゆく意識の中で俯く夏候惇の顔から表情は見えないが、涙が流れてるのが見えた。

「し,しゅん…」

「私はしゅんではない!!春蘭だ!!」

「…」

「北郷?」

「…」

夏候惇は一刀の返事がない事に気付き、顔を上げた。すると…一刀が完全に失神していた。

「北郷!!おい北郷!!かずとー!!」

春蘭は直ぐに一刀を寝かせた。

「これから貴様には華琳様に会って貰わなければ困るというのに。」

夏候惇は焦っていた。予定ではこの後に林の中のあの場所に一刀には行って貰う予定だった。

「北郷!!起きろ!!気合いで起きろ!!何を寝ている!!」

その場に眠っている一刀は夏候惇の大きな声にも反応を示さない。

『ど，どうすれば…一刀を担いで華琳様に…とりあえず私だけ華琳様に報告に…華琳様に此方に来て頂くか…秋蘭…私はどうすれば…』

夏候惇は軽いパニックに陥ってると…

「春蘭!!これはどういうことなの!!」

「か，華琳様！！これは…その…」

何と林の中から曹操が姿を現した。

『べ，別に一刀に早く会いたくて来たんじゃないけど…』

「春蘭。説明してくれるかしら？どうして一刀はアナタの膝の上で眠っているのかしら。」

「あ…これは、その…」

「春蘭！！」

「はい。北郷に抱きつこうと思いましたら、恥ずかしくなり掴んで吊るしたところ失神してしまいました。」

「あ，アナタという人は。」

曹操は包み隠さず話す夏候惇に大きなため息を溢した。

「申し訳ありません。」

「起こってしまっては仕方ないわ。あ…」

「華琳様？」

「春蘭、お願いしていいかしら？」

「はぁ、なんでしょう？」

まさかの失神（後書き）

お久しぶりです。

仕事が忙しく更新が遅くなりました←←

いよいよ我らが華琳様と一刀の再会ですよ→→

今日の夜は女子会です♪

一刀の嘘

「此処は…」

一刀は失神から目覚めて必死に状況を思い出していた。

『確か俺は…自分が消えた場所に向かおうとして…そうだ!!春蘭のヤツに!!相変わらずなのは嬉しかったけど、絞め落とすのはやめてくれよな。それにしても…生温かい。これはもしかして…膝枕？』

直ぐに自分の頭を置いている場所への膨らみと温かみ。そして横になっている体勢から一刀は思った。

『もしかして春蘭のやつずっと俺の事を…』

一刀は嬉しかった。あの夏候惇が膝枕をしてくれてる事に…

「あの…春蘭？」

「…」

「春蘭？」

「私の膝枕の上で別の子の名前を言うなんて随分と無粋ね。」

「え…え!!」

「私の名前を忘れたのかしら？」

「…忘れるわけがないさ。」

一刀は膝枕をしてくれているあの子の顔を見る為に顔を見上げた。

「綺麗だよ。華琳。」

「…バカ。…おかえりなさい。一刀。」

一刀は『ただいま』と言うつもりだったが、曹操を見上げた時…自然に出たのはこの言葉だった。それは、曹操の背後に映った大きな月・その月明かりに輝く金色の髪・青色の眼光に起因するだろう。

「ただいま。華琳。…どうしたんだ華琳！！」

一刀は驚いた。曹操の眼を見れば、大量の涙が溢れていたのだから…

「かずと…本当にごめんね。」

曹操の涙が一刀の頬にも落ちた。

「華琳、どうしたっていうんだ？別に俺は謝れる事なんて…」

一刀は直ぐに身体を起こし、座る曹操と向き合うように座った。

「だ，だって私…あなたと過ごしたこの国を…うぅ。」

曹操の涙は止まらない。むしろ更に量を増していた。

「い，良いんだよ。これから凄い国にしていけば…」

「でも、アナタと約束…したのに。」

一刀も戸惑っていた。あのプライドの高かった曹操が本当に只の少女のように自分の前で大粒の涙を溢している事に…そして感じていた。曹操もまた一刀とは状況は全く違うが、自分が帰った事でどれほどの衝撃を与えたかを…それを考えると一刀も胸が締め付けられていた。

「華琳」

一刀は座る曹操を抱きしめた。

「華琳、俺はね。正直に言えば魏が衰退してる事を聞いた時は驚いたよ。…でも、そんな事よりも俺のいなかった3年の間に魏の皆が誰1人欠ける事無く元気…にはしてなかったかもだけど、皆が此処に…そしてまた会えた事が本当に嬉しかったんだ。魏の中で初めて会った風の時なんてさ、涙が勝手に出てたよ。国は大丈夫さ。華琳に他の魏の皆がやる気を出せば直ぐに立て直せるさ。俺もさ…大した役には立てないけど、協力するし…」

一刀は嘘をついた。魏の皆が元気かどうかは知らないが、危機が迫っている事は分かっていた。つまり、皆がとりあえず暮らしている世界だと言う事は知っていた。それでも一刀は曹操の涙をこれ以上見ている事が出来ずに嘘をついた。

「一刀…ありがとう。でも…」

「ん？」

「アナタまた言葉が上手くなったわね。」

「華琳…それは…」

「今回は追及しないであげましょう。」

「ありがとうございます。」

「一刀…」

「どうした？」

「あと少しだけ…このままでいさせて…」

「あぁ」

2人の頭上には大きな月が輝いていた。

一刀の嘘（後書き）

久しぶりになってしまい申し訳ありません。

仕事・女子会・アニメ・漫画・恋姫と色々と忙しくて↑オイ！！笑

あ…ハンネを「もやし」から「もやち」に変更しました。

…うん、私のあだ名です，笑

改めて、ここまで私の小説を読んでくれてる皆様。

宜しくお願い致します。

見られた？

「華琳様！！北郷！！」

一刀・曹操が再会を果たした後に、林から出ると夏候惇が駆け寄ってきた。

「あら春蘭、まだ起きていたの？」

「華琳様をこんな時間に林に1人だけにするわけにいきません。それに此処は蜀ですから…」

「偉いじゃないか春蘭。」

「き，貴様の為ではない！！華琳様の為だぞ！！」

「ふふふ♪春蘭・一刀、行くわよ。」

「はっ！！」

「あぁ。」

こうして今日は終わりを告げた。

次の日の朝…一刀の部屋には1人の来客が訪れていた。

「北郷！！起きろ！！」

「な，なんだ!!」

一刀の部屋の外から聞こえた咆哮のような声に一刀は寝台から飛び起きた。

ドンドンドン!!

「貴様、いつまで寝ている。魏に帰るぞ!!」

「し，春蘭か?帰る…あ」

一刀は寝起きで頭がまるで回っていなかったが、徐々に回転を始めていた。

「もう帰るのか。今、着替えるから少し待っててくれ!!」

「おいていくぞ!!えーい!!こんなドア!!」

バキバキ…ドン!!

一刀の部屋のドアが不用意な力によってこじ開けられた。

「え…」

一刀はドアとそこに立つ夏候惇を見て硬直していた。夏候惇も部屋の中で着替えている一刀を見て同じく硬直していた。

しかし、直ぐに一刀は意識を取り戻し制服を纏った。一刀は焦った。もしかしたら、夏候惇に腕の痣を見られたんじゃないかと…

「し，春蘭。ドアを壊すなよ。着替えてるって言ったろ。」

「…あ，あぁ。すまない。貴様が早く出てこないからだぞ。」

夏候惇は一刀の身体に驚いていた。

『北郷、貴様の身体は一体どうしたんだ?…なんだあの痩せ細った身体は…それに腕のあれは一体…』

「春蘭?」

棒立ちの夏候惇の前で一刀が問いかける。

「か，華琳様がお待ちだ。行くぞ。」

『もしかしたら…見られちゃったかもしれないな。』

そう思いながら一刀は夏候惇の後ろをついていった。

「お待たせしました。華琳様。馬鹿を連れてまいりました。」

「おい、春蘭。」

「なんだ?」

「いや…いいや。」

一刀はどうせ夏候惇には通じないと思い、話を止めた。

「一刀、分かってきたみたいね。」

曹操が一刀を見て呟いた。

「分かったというより…思い出した感じかな。」

「刎ねられないように気をつけるのね。」

曹操が馬の上から一刀を見下ろし微笑を溢した。

見られた？（後書き）

余り細かく書かずに淡々と進めてます♪

さて、いよいよ一刀くんの身体・痣が見られてしまいました。

どうなるかは楽しみにして頂ければ…

それぞれの思惑

「華琳…もう一刀に会ったかしらね♪」

「どうだろうな。でも、そろそろ会ったんじゃないか。」

此処は呉にあるとある一室…ある2人が話していた。

「冥琳、魏は戻ると思う？」

「うむ。確かに北郷一刀はそれなりの人物だと思うが、私にはそれ程とは…」

「あら…呉最高の軍師様も大したことないわね。」

「ならお前はどう思ってるんだ？」

「恐らく…前以上の魏になるわよ。」

「そんなになのか？」

「私も骨抜きにされちゃったし♪」

「惚れたのか？」

「冥琳、嫉妬してくれてるの？私に？」

「どうだろうな？」

「ちょっと～私が嫉妬しちゃうじゃない！！」

「ふふふ。それで…本気なのか？」

「私は小覇王で終わるつもりはないわよ。」

「本気…なんだな。」

「最初はね。魏には負けちゃったけど母様の呉は守れたし、この平和な毎日に満足してたわ。」

「だったら…」

「でもね。やっぱり、呉が1番って事を証明したくなったのかもしれないわね。この3年間で衰退していく魏を見て私がこんな国に負けたのが許せなくなっちゃった♪」

「でも、それは北郷が魏に戻る事で戻るんだろ？」

「その戻った魏を…」

「倒したくなったんだな。」

「ご明察♪」

「だが…国と国が戦えば、民達が犠牲になるぞ。」

「だからチャンスをあげるの♪」

「チャンス？」

「もう少ししたらアレがあるじゃない♪」

「アレ？…天下一品武道会か？」

「まずはそこで魏の強さを確かめるの♪」

「しかし、北郷が戻ったからと言って…」

「弱い魏のままなら、魏を即刻滅ぼすまでだわ。」

「はぁ、だったら私は北郷に賭けるしかないわけだな。」

「え～私に連いて来てくれるんでしょ？」

「…」

「結局、冥琳は連いて来てくれるって知ってるも～ん♪」

「言ってなさい。」

「は～い♪」

孫策・周瑜、２人の思惑が動き始めていた。

一方、曹操・夏候惇・楽進・一刀と騎兵達は魏へと向かっていた。

「一刀、相変わらず情けないわね。」

「し，仕方ないだろ。」

編成上、真ん中の辺りに曹操と一刀はいた。因みに夏侯惇は前方・楽進は後方に配置されていた。今は一刀の馬の扱いに曹操が呆れていた。

「そういえばもうすぐ…」

「どうかしたのか華琳？」

「天下一品武道会があるわよ。」

「天下一品武道会？」

「簡単に言うなら三国の武官の強さを競う大会よ。」

「へぇ～そんな大会があるんだな。」

「今年で3回目よ。三国を統一してから、毎年開かれているわ。」

「それは楽しみだな。」

「…そうね。今年は本当に楽しみだわ。」

曹操が遠くを見ながら馬上で不敵な笑みを浮かべていた。

それぞれの思惑（後書き）

さて、どうでしたかね？

まさかの…という印象を与えられれば作者としては満足です。

雪蓮お姉様と冥琳お姉様の会話に上手く特徴が表せてると良いのですが…

一応、何度も2人の会話をＰＣゲームで見返したので大丈夫なハズ，笑

身体の謎

『もうそろそろ、お着きになられるだろうか。華琳様…北郷…』

此処は魏の城の一室、夏侯淵の部屋である。彼女は机に座り事務仕事を片づけながら考えていた。

『華琳様…お戻りになられただろうか。姉者は…心配あるまい。そして…北郷…お前は華琳様に言ったのか?自分は5年振りに私達に会った事を…そして向こうの世界で何かがあった事を…』

夏侯淵はその事を曹操が知らない場合、どうしようかと考えていた。一刀の部屋での呟きを聞いてしまい、一刀には良くない事があったに違いない事は確信していた。それを曹操に言うべきなのか。一刀に過去の話を伺うべきなのか。

『北郷…お前に何があったと言うんだ?少し痩せたのも関係しているのか?』

夏侯淵は椅子に体重を預け天井を見上げた。

「あの変態!!華琳様に帰ってきて早々、手を出してないでしょうね!!」

場所は変わり、同時刻に曹操不在の玉座の間ではジュンイクがブツブツ言いながら政務をこなしていた。

「あ～華琳様の身体が心配だわ。」

「そんな事を言いながら、政務捌きは前と比べられないぐらい順調に見えますが～」

「あ，当たり前じゃない。元気になった華琳様に私がだらしない所を見せれる訳ないじゃない！！それに華琳様がいない今、私達軍師がしっかりしないでどうするのよ。」

「一刀殿の力は恐ろしいですね。」

「な，何でアイツの名前が出てくるのよ！！」

ジュンイクの他にも此処には郭嘉・テイイクの軍師2人も政務をこなしている。

「華琳様を元気にしたのは誰なんでしょうね～」

「ぐっ。」

テイイクの発言にジュンイクは黙ってしまった。

「それにしても、一刀殿は本当に華琳様を…」

「お兄さんなら問題ないでしょう。それよりも帰ってくる華琳様に情けない仕事をしてる所を見られたら、お仕置きされちゃうかもしれないので稟ちゃんも手を動かして下さいね～」

「お，お仕置き…」

「お仕置き…」

テイイクの口から出た『お仕置き』という単語に2人が激しく動揺していた。

「ま，また…あのお仕置きを…うっ！！」

「稟ちゃん、此処で鼻血は止めて下さいね～書類が真っ赤っかで閨でのお仕置きが確定しちゃいますから。」

「閨！！」

郭嘉には『閨』という言葉しか聞こえず、頭の中では…

「ちょっと、風！！馬鹿を言ってないで、アンタも手を動かしなさいよ。」

「お仕置きと風が言った時に、一瞬だけ手が止まったのは誰でしたかね～」

「し，知らないわよ！！」

プイっとテイイクから顔を背けたジュンイクは思い出していた。

『お仕置き…か。ふふふ♪』

「そういえば…稟・風。」

「どうしましたか？」

「はい～？」

ジュンイクは急に何かを思い出したように2人に問い掛けた。

「あの…その…どうしてアイツってあんなに痩せたか聞いてない？」

「え…」

「…」

ジュンイクの発言に2人は激しく平静を装いながらも驚いていた。だが、ジュンイクも軍師である。2人が平静を装っている事は容易に察した。

「2人も知らないのね。」

「桂花ちゃん、いつから？」

「いつから？そんなのアイツが帰って来てから初めて会った時に決まってるじゃない。」

「桂花アナタ…一刀殿をそこまで」

「な，何を勘違いしてるのよ！！アイツとは付き合いが長いだけよ！！それに…私よりも付き合いの長い華琳様・春…秋蘭も気付いてるでしょう。」

「やはり一刀殿は痩せて…」

「お兄さんは、自分が背が伸びたからとか言ってはぐらかすばかりなんですよね～」

「背が伸びて身体がどうしてあそこまで痩せるのよ。どうせ向こう

の世界でも女ばっかり追いかけて…それはないわね。」

玉座の間では書類の音だけが響いていた。

『私はどうすれば…』

此処にも悩める将がいた。魏武の大剣の夏候惇である。彼女は何度もあの光景を思い出していた。

『アイツのあの身体は…一体。夢だったと思いたいが…むしろ明確に思い出してしまう。浮き出てるかのような背骨に華奢な身体・そして腕のドス黒い痣…アレは一体…もしかしてアイツは…病気なのか？』

バッ！！

夏候惇は馬上から後ろに曹操といる一刀に眼を向けた。

『私が心配してやってるというのに華琳様と楽しそうにしよって。…帰ったら秋蘭に相談してみよう。』

「夏候惇様。」

夏候惇が考え込んでいる最中、１人の兵に話し掛けられた。

「どうした？」

「もう魏領ですし、洛陽も鼻の先ですので曹操様と御遣い様の場所まで下がって下さって大丈夫ですよ。楽進様にもお伝えしましたし。

」

「そうか…頼む。」

「はっ！！」

『華琳様は北郷の身体の事、ご存知なのだろうか…』

『アナタは変わらないわね。』

曹操が一刀と馬上で他愛のない話をしながら思っていた。

『変わったのは身体だけなのかしら？でも…』

彼女は思い出していた。テイイクの手紙で一刀が怒鳴ったという事を…

『向こうで何かあったのかしら…それにどうしてアナタはまたこの世界に…』

身体の謎（後書き）

せっかくの3連休が仕事ばかりの作者です←←

でも…アニメはバッチリ見てます♪笑

「うさドロ」「ロウきゅー」の最終回は中々良かったですよね（＊^―^＊）

見てた読者様とかいないのかな？

戻った者の帰還

「「おかえりなさい。華琳様。」」

まだ太陽の昇り切っていない洛陽の城門に元気な声が響いた。声の主は…許緒・典韋

「早くからすまないわね。ただいま。」

2人は曹操から何か懐かしいもの感じた。

「それで、今日はみんな揃ってるかしら…秋蘭。」

夏候淵が少し遅れて姿を現した。

「遅れてしまい申し訳ありません。予定通り、張三姉妹以外は全員洛陽におります。」

「そう、予定どおりね。それと…後で風に私の部屋に来るように伝えてもらえるかしら?」

「分かりました。それと華琳様…」

「春蘭ね。もう大丈夫みたいよ。ほら…」

曹操・夏候淵・許緒・典韋が後ろを振り向けば…

「貴様！！朝、私の着替えを見ただろう！！」

「だから、見てないって言ってるだろ！！」

「じゃあ、許してやるから刎ねさせろ！！」

「いやそれ…許してないだろ。」

「お前は大人しくハイと言えばいいんだ！！」

「し，春蘭様、落ち着いて下さい。」

後ろからはギャーギャーと騒ぐ2人の声と必死で間に入る1人の声が聞こえていた。

「あ…姉者。」

夏候淵は久しぶりに見た懐かしい夏候惇に呆れながらも眼は潤んでいた。

「ふふふ、可愛いでしょ？」

「はい。」

曹操・夏候淵が話す中で、許緒・典韋も何やら話していた。

「流流見てよ！！春蘭様が帰ってきたよ！！」

「そんなの見たら分かるよ。」

「違うよ！！春蘭様のあの顔だよ。」

「顔？」

「兄ちゃんと話してる春蘭様の怒ってる顔…ボクが見たのは3年振りだもん♪」

「…全部、兄様のお陰だね♪」

「うん！！」

『季衣のそんな楽しそうな笑顔を見たのも3年振りよ。』

「流流、僕達も行こう。」

「うん。」

一刀達が帰ってきた事は直ぐに洛陽全体に響き渡った。

戻った者の帰還（後書き）

今回は繋ぎ文章です。

とりあえず、魏に帰って来た事にしたかったので書かせて頂きました。

覇王の決断

コンコンコン

先刻、一刀達が成都から帰ってきてそんなに経たない時間に曹操の部屋のドアが何者かにノックされた。

「華琳様。風でございます。」

「入りなさい。」

夏候淵に言われたテイイクが曹操を訪ねていたのである。

「失礼します～」

テイイクはドアを開けて部屋に一歩踏み込んだだけで曹操の雰囲気が変わった…というより、戻った事を何となく感じた。

「急に呼んですまなかったわね。」

「いえ～呼ばれる気は致しましたから。」

「そう。じゃあ、何を聞かれるかも分かってるわよね？」

「お兄さんの事ですか～？」

「鋭いわね。」

曹操はテイイクが自分の軍師で頼もしいと思いながらも、脱帽混じりの笑みを溢していた。

「じゃあ、率直に聞くわ。一刀が呉に現れてからの詳しい詳細を聞かせてくれるかしら?」

「そうですね～」

テイイクは少し考えてから曹操にも分かりやすいように、自分の知ってる限りの事を全て話した。

…

「そう…アナタにも詳しい事は何一つ分からないのね。」

「申し訳ありません。只、間違いなくお兄さんは目的があって此方に来ている事しか…」

「目的…か。さて…どうしようかしらね。」

「…怖いんですか?」

「…怖い?私が?」

曹操はテイイクを威嚇するような表情を表した。

「もし色々聞いて、お兄さんの身体に異変が起こったら…」

「…アナタも気付いていたのね。」

2人の頭の中は不安でいっぱいだった。もし一刀に色々聞いて、また消えるような事があれば…

「華琳様。」

「何かしら?」

「もし、お兄さんに色々と聞くんでしたら、魏の将である私達も絶対に同席させて下さい。お願いします。」

テイイクはその場に立ち、深々と曹操に頭を下げた。もう二度と前のようになりたくないからだろう。

「…分かりました。約束しましょう。」

曹操もテイイクの頼みが何を言いたいかは良く分かった。前は一刀が消える時に立ち会えた唯一の1人として…

テイイクが曹操の部屋を訪れている頃

「姉者…すっかり戻ったようだな。」

「戻った?どういう意味だ?」

「ふふふ。何でもないぞ。」

此処は夏候惇・夏候淵の部屋である。

「何を笑っているんだ?」

「姉者には関係ない事だ。」

「おかしな秋蘭だな…そういえば。」

「うん？どうした姉者？」

「秋蘭は北郷の身体を見たか？」

「北郷の…身体？」

夏候淵は姉の急な変化に気付いた。

「実は私達が、成都からの帰りの行軍の途中にアイツの身体を見たんだが…」

「どうかしたのか？」

「背骨がぐわぁーってだな。」

夏候惇が何やら不気味な振り付けとともに訴えていた。

「…」

「秋蘭？」

『姉者…相変わらず可愛いなぁ。』

「おい、秋蘭！！」

「あぁ、北郷が痩せていたのか？」

「そう！！それだ！！まるでアレは老人の背中のようだったぞ！！」

「そうか…」

『北郷…お前は一体…というか姉者、北郷が痩せた事なら直ぐに私も気付いたし、華琳様や他の者達も数名は…』

「それにな、秋蘭。」

「他にも何か見たのか姉者？見過ぎではないのか？」

夏候淵は次は姉が何を言ってくれるか少し楽しみにしていた。

「み，見えたんだから仕方あるまい！！それでだな…」

「うむ。」

「北郷のヤツめ、恥ずかしかったのか直ぐに隠したんだがな。」

「うむ。」

「腕にな。」

「腕に？」

夏候惇は自分の腕を掲げて夏候淵に見せていた。

「何やらこの辺りに黒い痣のようなものが見えたんだ。」

「…痣？」

「一瞬だったが、絶対にそうだぞ！！しかも両腕だぞ！！あれは私の新兵訓練の兵共の身体にあるものに近いモノだった。」

『新兵って姉者…それは姉者が作ったんだぞ。しかし、北郷の痣とは一体…』

「秋蘭！！」

「あぁ。すまん。それで姉者…それは華琳様には報告したのか？」

「いや…まだ言ってはいないんだ。」

「そうか…」

『これは私が言った方が良いだろう。しかし、華琳様に言うべきか。それとも北郷に直接…しかし、万が一にも北郷に異変が起きれば…』

「秋蘭？さっきから変だぞ。」

「華琳様への報告は私がしよう。姉者はその事は心の中だけで留めてくれるか？」

「？…秋蘭が言うならそうすることするぞ。」

「ありがとう姉者。」

「秋蘭、さっきから何か変だぞ？」

「私は大丈夫だ。私は…な。」

場所は戻り、此処は曹操の部屋。一刀のへの対処を考えていた。

「何が良いですかね～」

「1つだけあるわ。」

「何でしょうか？」

「何もしないのよ。」

「…そういう事ですか～」

「そう。こちらから一刀については何も聞かないの。」

「でも華琳様はそれで良いんですか？」

「また消えられるよりマシよ。」

「でもですよ。」

「風、分かってるわ。」

一刀には何も聞かない事。これはとても不安な事である。一刀がどうして再び来れたのかも，何をしに来たのかも，そして、いつ帰る事になるのかも，一刀の身体が痩せている理由も，一刀が向こうの世界での事も，何もかも全ての疑問が鵜呑みになる事になる。

「全ては、お兄さんから話してくれる事を待つという事ですね。」

「そうよ。」

「とても厄介な事になりそうですね～」

「心配はないわ。皆、一刀が消える事になるかもしれないと思えば…きっと誰も…」

曹操の表情はとても寂しげだった。そして、テイイクは1番辛いのは曹操に違いないと感じていた。

「華琳様…」

「今から魏の将達全員に招集を掛けます。風も手伝ってくれるかしら？もちろん、一刀は呼ばないわよ。」

「分かりました。では早速、行って参ります。」

「嫌な役を…すまないわね。」

「いえいえですよ～」

テイイクは曹操に軽く一礼を済ませると部屋を出て行った。

「一刀…」

部屋に1人になった曹操は俯いていた。

『もう…絶対に失いたくない。その為には…これが…これが最善の策なのよ。』

覇王の決断（後書き）

少し長めで複雑な内容で申し訳ないです。

さって一刀の身体についてどうなっていくの…

少しでも楽しみにして下されば幸いです。

議題1　天下一品武道会

「一体、なにするんやろうな？」

「また隊長に関係することだと思うのなの。」

「真桜・沙和、静かにしろ。華琳様が来られるぞ。」

ここは魏の玉座の間。三羽烏に限らず、全員の将達が集められていた。

「秋蘭、これは何の集まりなのだ？」

「私も詳しくは知らないんだ。只、姉者達が成都に行ってる間に華琳様から手紙が届いて魏の将達は全員洛陽に集まっておくように書かれていてな。」

「そうなのか。」

将達の疑問が飛び合う中に今回の主催者である曹操が姿を現し、席に着いた。

「皆、集まってるかしら。桂花？」

「はい。既に集まっております。」

「そう。じゃあ、始めましょう。まずは…皆、それぞれの仕事があると思うのに急な招集をすまないわね。感謝するわ。」

曹操が全員を見渡すように話した。

「それじゃ、桂花。お願いするわ。」

「はい。この度、集まってもらったのは…天下一品武道会についてよ。」

「もうそんな時期か!!」

「姉者、落ち着け。」

「うむ。すまない。」

「ゴホンッ!!それで、今回の天下一品武道会はもう分かってると思うけど開催国は呉よ。」

一刀が帰ってから始まった天下一品武道会。1年目は魏，2年目は蜀で行われた。

「来年はまたウチらかいな。」

「霞様。またって毎年違う三国で違う国で行ってるから来年は4年目ですよ。」

「なんか、あっという間やなと思ってな。」

「話しても良いかしら?」

イチイチ話を始める将達にジュンイクの鋭い目線が突き刺さる。

「申し訳ありません。」

張遼は悪びれもなく笑い、楽進が頭を下げていた。

「それにしても…この天下一品武道会の成績は何なの?私達は蜀・呉を倒して三国同盟を成したと言うのに武将たちは寝ているの?華琳様の前で何て無様な…」

「桂花、落ち着きなさい。」

「あ…申し訳ありません。」

「とりあえず稟、過去の戦績を発表してくれるかしら?」

「はい。第一回天下一品武道会、優勝は呂布で2位は関羽3，4，5位は孫策，趙雲，張飛です。第二回は優勝が孫策で2位は黄蓋3，4，5位は呂布，関羽，甘寧という事になっております。」

バン!!

ジュンイクが机を叩いた。

「これは一体どういうことなの?死ぬの?アンタ達の名前がドコにもないじゃない!!」

「申し訳ない。」

「え…」

謝罪の言葉が一番最初に出たのは予想外の人物からだった。

「あ，姉者…」

「確かに桂花の言う通りだ。魏武の大剣が聞いて呆れる。…しかし！！今年は違う！！」

言い放った夏候惇からは何やら氣のようなモノが漏れているのが、ここにいた全員分かっただろう。

「奇遇やな惇ちゃん。今回はウチも何だか負ける気はせぇへんな。」

夏候惇に続き、張遼までがやる気満々という感じだ。

「と，とりあえず絶対に今年は誰でも良いから5位以内には入りなさいよね！！」

「承知した。」

「まかしとき！！」

「僕だって頑張るんだから！！」

「頑張ります。」

ジュンイクのキツイ激励により武将たちが各々に声を上げた。しかし、将の中に誰1人として『今回の魏には一刀がいる。』という事を口には出さなかった。

「…今回は私も出ます。」

将達がガヤガヤと騒ぎ始める中、彼女のたった一言で場は凍りついた。なんと参加を表明したのは魏王である曹操であった。

「華琳様!!それは危険過ぎます。」

「そうですよ。怪我でもされたら…」

夏候惇が直ぐに止めに入り、ジュンイクも言葉を繋げた。

「別に誰が出ても良いのではなかったのかしら?」

「しかし、華琳様…」

夏候淵も曹操の参加には賛成出来ない雰囲気である。

「雪蓮だって出てるじゃない。」

「しかし、ヤツは現呉王ではないですし…」

「ないですし…何なのかしら?春蘭…私が劣ってると言いたいのかしら?」

急に場は気まずい方向へと流れ始める。

「華琳様、万が一に怪我でもされたら?」

「桂花くどいわよ!!アナタ、私を馬鹿にしているの?」

「ひっ!!す,すいません。」

曹操から出る覇気は文官のジュンイクには凄まじいものであった。
そして、久しぶりに見せた曹操の覇気に武官達までもが圧倒されていた。

「死ぬ事はないんだし大丈夫よ。それともアナタ達、仲間の真桜を信じてないの？」

「へっ。」

曹操の覇気で硬直している李典は、曹操の口から自分の名前が出た事に驚いた。

「どうして真桜なのですか？」

全く夏候惇は気付いていない。

「分かりました。真桜を信じます。只、絶対に無理はしないで下さい。」

意味に気付いたジュンイクや他の将達は納得したようだ。しかし…

「秋蘭、どういうことなのだ？」

「流琉、どういうこと？」

分からない将も何名かいたようだ。理由は簡単である。天下一品武道会で使われる武器は全て李典の作製したもで形状は本人の物と何も変わらない。例えば、曹操の愛用の武器である『絶』もまったく同じ…言わばレプリカのような物が用意されている。よって死ぬと

言う事は、絶対ではないがないだろう。

「理解できなかった者は分かる者に聞きなさい。とにかく私も今回は出ます。私が出るからには魏の将が5位圏外何ていう事は許されないわよ。…皆に5位以内を魏で独占する事を命じます。」

「「はいっ！！」」

魏の武官達の声が玉座の間に大きく響いた。

議題1　天下一品武道会（後書き）

さて、今回の話…気づいた方ならアレって思う場所があると思います。

勿論、ワザとですよ♪

議題2　戻った意味

「皆、静かにしてくれるかしら？」

曹操の洩らした一言により天下一品武道会の事で盛り上がっていた者達は何事もなかったかのように静まり返った。これは戦乱の時から変わらない曹操への絶対の忠誠心からだろう。

「天下一品武道会については今話した通りよ。少し月日もあるから皆、各々好きにすると良いわ。そして…これから話す事が今回、皆に集まってもらった本当の理由よ。」

この曹操の発言に反応したのは軍師の3人と夏候淵である。この4人は何となく天下一品武道会の事だけでは話が終わらない気がしていた。

『華琳様…やはり何か話されるのですね。天下一品武道会の事を話すには時期的には早過ぎますし、今まで天下一品武道会の会議でこのように急に招集された事なんてありませんでしたから。』

ジュンイクと同じように夏候淵・郭嘉も同じような事を思っていた。しかし…テイイクだけは違った。

『華琳様…いよいよ話されるのですね。』

チラ

曹操が一瞬だけテイイクを見た気がした。

「北郷一刀の事です。これから話す事は絶対に他言無用よ。もし誰かに話して…何か起こったら…」

「か，華琳様？大丈夫ですか？」

急に俯いてしまった曹操に夏候淵とジュンイクが心配そうに声を掛ける。

「華琳様、風が…」

「大丈夫よ。私が話します。」

テイイクは見てられなかった。曹操にも一刀を好きという感情で負けてるとは思っていないが、少なからず劣っているわけがない。それに曹操は一度、一刀が消えるその場を経験していたから…

「皆、聞きなさい。もし他言して一刀が消えるような事があれば、私がその者の首を刎ねます。」

顔を上げた曹操の眼は潤んでいるようだった。そして誰もがこの言葉を胸に刻みつけた。

「皆に分かるように順番に話します。一刀が前に消えた理由は前に少し話したはよね？」

「一刀殿の世界と私達の世界の歴史の相違ですよね？」

「そう稟の言う通り、一刀はその結果消えたわ。」

既に典韋・楽進の眼は潤んでいた。

「でも再び彼は此処に…この世界に来た。誰か理由は分かるかしら？」

…

皆が一刀に会った時に心のどこかで僅かに思った事だろう。でも誰も一刀には直接聞いた者はいない。

「そう…誰にも理由が分からないの。勿論、私にも。」

「以前、お兄さんが私達に会う為に戻ってきたと言ってくれてる場には居たのですが、本当の事を言ってるようには見えませんでした～」

テイイクが繋げるように発言した。

「じゃあ、隊長は一体どうして？」

「分からないわ。でも、意味があるのは間違いないわ。」

「まちぃな華琳！！じゃあ、一刀はその意味とやらを終えたらまた消えるん言うんか？」

「「うるさーーーい！！」」

突如、恐らく城の中に居る者なら全員に聞こえるんではなかろうかという声が魏の玉座の間に響き渡った。

「け，桂花…」

「どいつもこいつもうるさいのよ!!黙って華琳様の話が聞けないなら出ていきなさいよ!!」

『桂花…アナタ。』

曹操もこのジュンイクには驚いた。ジュンイクとはもう長い付き合いになるが、こんな姿は見た事が無かった。

「桂花ちゃん、落ち着いて下さいね～。霞ちゃんも静かにですよ～」

テイイクのマイペースな仲介により曹操の話は再び始まった。

議題2　戻った意味（後書き）

内容は頭にバッチリ浮かんでるんですが、それを文章で書くと中身がグダついて自分にイライラしてます。

小説、難しい←←

…今更かよって感じですよね，笑

議題3　気付いた事

「じゃあ、少し話を変えて全員に尋ねます。帰ってきた一刀には皆、1度は会ったと思うのだけれど何か一刀の変化や行動に気付いた子はいるかしら？じゃあ…春蘭から何かあるかしら？」

「はい…私は…北郷について気付いた事は全て秋蘭に話してるので、秋蘭が上手くまとめてくれると思います。」

夏候惇が夏候淵をチラりとみれば夏候淵は静かに頷いていた。

「じゃあ秋蘭、春蘭の分もまとめて何かあるかしら？」

「はっ。まずは私が自身で気付いたのは一刀の体型です。」

「体型やて。」

「そうだ霞。北郷…身体が痩せ過ぎだと思わないか？」

「ウチは大して気付かんかったなぁ～。」

「華琳様は…」

「直ぐに気付いたわ。」

「そうですか。それと…北郷は私達に会ったのは5年ぶりの再会です。」

「「え！！」」

「「な！！」」

「そ，それは本当なの秋蘭？」

「はい。たまたまですが、聞いてしまいました。」

「そう…誰か一刀に5年ぶりとか言われた子はいるかしら？」

…

誰も答える者はいなかった。しかし、場は静まってるのでなく、動揺の色が滲み出ていた。

「華琳様。」

「何かしら風。」

「お兄さんは風達が3年振りにお兄さんに会った事は間違いなく知ってますよ～」

「そう、分かったわ。」

「華琳様。」

「まだ…あるのね。」

「はい。」

曹操も内心穏やかではなかった。今すぐにでも一刀を尋問したい…でも一刀の身に何が起こるか分からない以上、何も出来ない自分にイライラしていた。

「恐らく北郷は前に消えてから私達に会うまでの5年間、つまり天の世界での5年間の事はあまり良い記憶ではないようです。」

「皆の中に帰ってきた一刀から天の世界の話を聞いた者はいるかしら？」

…

誰からの返事もない。

『一刀…アナタは一体…』

曹操はどんどん不安になっていた。最愛の人の事が何一つ分からない今の状況に…そしてそれは他の将達も同じである。

「では次は…」

夏候淵は口を開き話そうとした時に感じた。このなんとも言えない雰囲気に…

「華琳様、姉者の話は最後で良いでしょうか？」

「良いでしょう。」

正直、曹操もこれ以上は夏候淵の話は平静を装いながらも聞くのは辛かった。次はどんな事が話されるのか…曹操を含めた将全員が息

を呑んでいた。

「じゃあ先に…桂花、何かあるかしら？」

「私はアイツの体型が痩せているという事しか気付きませんでした。」

「そう…じゃあ、他にまだ新しく何か気付いた事がある子はいるかしら？」

「はい～」

「風、何かしら？」

「はい～実はお兄さんの上着を脱がそうとした時があったんですが、思い切り怒鳴られてしまいました。」

「風…アナタは只、本当に脱がそうとしただけだったのかしら？」

「はい～」

曹操はこの事は知っていた。初めて聞いた将達にはテイイクが脱がそうとしたという事など頭には残っておらず、テイイクが怒鳴られたという事だけが頭に溢れていた。

「では…一刀の身体に触れた子は何人いるかしら？」

曹操の質問に対して、全員が手を上げていた。

「では…一刀と既に寝た者。正直に答えなさい。」

…

「良いでしょう。では…一刀と口づけを交わした者。」

「はい～」

この質問に手を上げたのは只1人、テイイクだけであった。

「そう。じゃあ、一刀の裸を見た者はいるかしら?」

「はい。」

夏候惇が静かに手を上げていた。

「分かったわ。稟…今までの結果をまとめてくれるかしら?」

「分かりました…一刀殿は風に上着を脱がされるのを怒鳴った。風が嫌いなら口づけなど交わす筈もない。触られるのを嫌がったのなら他の将達とも触れ合うはずがない…しかし、触れている。つまり…」

「最後に秋蘭様の口から話される春蘭様の話が、お兄さんの裸に関係しないものなら意味が分からない事になりますねぇ～」

「風、私のセリフを取らないでくれるか?」

「それ以外だと、その時にアイツの上着に何か入ってたとかでしょうけど…」

「秋蘭…アナタの春蘭が気付いたという話は…」

「私の話で全てが解決するでしょう。」

「そう…なの。」

誰もが思っていた。夏候淵の話は一刀の身体には関係しないで欲しいものだと…

「じゃあ、この話は後からにします。他に何かある子はいるかしら？」

「華琳様。」

「稟、何かしら？」

「もしかしたら余り関係ない事なのかもしれませんが、風と深夜に一刀殿の寝台を訪ねたのですが…風、ここからはアナタが言いなさい。」

「はい～。お兄さんが直ぐに起きてしまいました。」

「それのどこがおかしいんや？」

「あの日はたまたまだったのかもしれませんが、お兄さんは1度寝ると朝まで中々起きない筈なんですけどねぇ～」

…

「眠りが浅くなったかもしれないという事ね。とりあえず、覚えて

おきます。他にはまだいるかしら？」

「か，華琳様…あの…退室したいのですが…」

小さい声を必死に震わせ典韋が答えていた。

「流琉、どうしてかしら？」

「その…私と季衣にはこんな話は…」

典韋の隣に座る許緒を見ればまるで魂の抜けた抜け殻のようになっていた。

「許緒！！しっかりしろ！！」

「！！」

途端に夏候惇が許緒に向かい発声した。

「華琳様を含めた全員がこんな話を楽しい訳ないだろう。でも、この話をしっかり聞かないと北郷がまた消えるかもしれないんぞ！！お前はそれで良いのか！！」

「い…嫌です。」

「声が小さい！！」

「嫌です！！」

「流琉もそうだろ？お前1人じゃない。私達全員が一緒だ。」

夏候惇が許緒に呼びかけている最中、夏候淵も静かに典韋に話かけていた。

「それにしても本当に息が詰まるのなのぉ。」

「隊長…」

「凪、まだまだ落ち込むのは話を聞いてからにしいや。」

「風、大丈夫ですか？」

「稟ちゃんこそですよ～」

「あ～もう。一刀は隠し事が多過ぎるで。ウチらの身にもなってほしいわぁ。」

「全くね。あのド変態。」

夏候惇の声を皮切りに全員が一息吐くように軽く言葉を口にした。
曹操はそんな光景を見ながら最後に夏候淵の口から話される内容が怖かった。

「ふぅ、次に何かある子はいるかしら？」

「はい。」

「凪、何かしら？」

「気付いた方もいると思いますが、隊長に今の服を渡したのは私で

す。」

「あら…あの服は此方の世界に来た時から一刀が着てたものじゃないの？」

「わ，私が作って贈らせていただきました。」

「覚えてるのなの。凪ちゃんがずっと前に一所懸命に作ってたの。」

「あぁ。それだ。」

「それで凪、その服と今の一刀が何か関係あるのかしら？」

「はい。実は服を私の自室で渡したのですが、服を初めて見た時なんですが隊長は…大量の涙を流されました。」

「一刀が涙を？アナタの贈り物が嬉しかったんじゃないかしら？」

「いえ、あの涙は…うれし涙なんかではなく、悲しい涙でした。」

「そう。悲しい涙を。」

「華琳様。やはりアイツは…」

「向こうの世界で何かあったと考えるのが妥当でしょう。他には何かある子はいるかしら？」

…

「いないようね…じゃあ秋蘭。」

そして、いよいよ夏候淵の話が始まった。

議題3　気付いた事（後書き）

微妙にシリアスになってきてますかね？

作者も沙和同様に確かに息が詰まってます。笑

でも、ここまで過敏になるのは前例がある以上仕方ない事だと割り切って読んで貰えると幸いです。

あ…現在仕事中です，笑

議題４　痣？

「華琳様すいません。姉者…やはり自分の口で説明してくれ。」

「なっ！！いや…しかし…」

「姉者が北郷の身体を見て気付いた事、そして、思った事を姉者らしく皆に伝えてくれれば良い。」

「…分かった。」

「じゃあ春蘭、お願いするわ。」

「はっ。」

曹操を含めた全員が不安と戦いながらも夏候惇の話に聞き耳を立てた。

『どうか、これ以上酷い事は…』

夏候惇・夏候淵を抜いた、曹操を含めた全員がそう願っている表情が見て取れる。

「私が北郷の身体を見たのは先日の成都から洛陽に戻る朝だったのですが、ヤツを私が呼びに行った時に返事が無かったので勝手にドアを開けた時です。北郷は着替えていたようで上半身だけが裸でした。」

「それで…春蘭は何を見たの？」

「秋蘭…」

「うむ。」

「はい。まずは奴の背中です。私が感じたのは、あれは老人の背中のようでした。肌は肌色というよりは白に近く、背骨がはっきり見えるほどに痩せていました。」

夏候惇の発言に一刀が痩せている事に気付かなかった者・気付いていた者までが動揺を隠せていなかった。

「あ，アンタの見間違いなんじゃないの？」

「そ，そうやで春蘭様、冗談きついわぁ。」

「春蘭様、冗談ですよね？」

「兄様が…そんな…」

「皆、落ち着きなさい。」

「華琳は…何も感じないんか？」

曹操の冷静過ぎる態度に張遼が問いかける。

「私は…今は春蘭の話に集中する事が大事よ。」

「華琳…本当に一刀が好きなんか？」

バチン！！

突如、玉座の間には凄まじい音が響いた。

「な，凪ちゃん。」

「な，何するんや！！凪！！」

「霞様、落ち着いて下さい。」

この行動に1番驚いたのは叩かれた張遼自身だろう。まさか楽進に頬を叩かれるなんて頭の片隅にも入ってなかっただろう。

「霞様にだって華琳様の気持ちが分かるでしょう！！私達がこんなにも心を乱している事に1人冷静に…それがどれだけ辛い事か…」

楽進の表情は今にも崩れそうであった。それでも彼女は崩すことなく必死に絞り出した。曹操を含め、他の将達は何も言わず止めることもせず状況を見ていた。

「華琳…アホな事聞いてホンマ…」

「良いのよ。春蘭、話を続けてくれるかしら？」

楽進の言った言葉は張遼に限らず、曹操を抜いた将全員の心に響いただろう。だからこそ、冷静に振る舞う曹操の姿に涙を堪える者までいた。しかし…夏候惇の話は終わらない。

「はっ。それと私が見たのは背中だけではなく腕もなのです。」

「腕？一刀の腕がどうかしたのかしら？」

「はい。北郷は直ぐに隠したのですが、腕の内側と言いますか、中側が手首から肩の下辺りまでにとても黒い痣のようなものが広がっていました。」

「痣？本当なの春蘭？」

「恐らく間違いありません。そして、痣の中心かと思われる肘の真裏の辺りは特にドス黒い色をしておりました。」

「春蘭…アナタは今まで人の身体に似たような物を見た事があるかしら？」

「私の訓練する新兵になら何度か…」

「華琳様、恐らく打ち身の事です。」

「秋蘭、助かるわ。じゃあ皆に聞きます。誰か一刀に自らその痣らしき物を見せられた子はいるかしら？

…

「華琳様。」

「分かってるわ、桂花。間違いなさそうね。」

「恐らく風が怒鳴られた理由ですね～」

「どうやら、そのようね。でも一体、その痣は…」

「もしかして隊長はドコか悪いんじゃ。」

「凪。しっかりしぃ。」

「霞様…」

「ウチの言えるセリフやないけどな。」

「誰か何でもいい。一刀の症状に思い当たる子はいるかしら?」

…

「一刀殿の身体は一体…」

郭嘉が思わず頭を抱えていた。俯いてしまっていた。

「稟ちゃん…」

「流流、兄ちゃん大丈夫だよね?」

「わ，私には分からないよ…」

「春蘭…話はそれで全部かしら?」

「はい。私が見たのはそれが全てです。」

瞬間、曹操が椅子の背もたれに大きく身体を預けた。

『やっと…終わったわね。一刀、アナタは私達の悲しみと同じくらい…いえ、それ以上に向こうで何かあったのかもしれないのね。』

「桂花…今までの話をまとめてくれるかしら？」

「…」

「桂花？聞いているの？」

「も，申し訳ありません。今の私には…まとめられません。」

まとめる事。今までの全てを頭で整理し、全員に分かりやすように伝える事。簡単な文章で書くと簡単に説明出来る事だが、これを実際に行う事は容易なことではない。そしてそれが辛い話ならなら、尚更の事である。

「仕方ないわね。今回は私が言いましょう。今から、私が言う事は絶対に他言無用。そして、私達がこれから一刀について気付いた事は逐一報告する事。全員で情報を共有します。」

曹操はその場に立ち頭では必死に情報を整理していた。そして、その間に握られた右の握り拳からは血が滴っていた…

議題４　痣？（後書き）

相変わらず、文章で表すのに大苦戦中の作者です。

たった一言…一刀に直接聞けば解決する事なんですけど、一刀は優し過ぎるから自分の身体に影響を及ぼす事も話しそうですからね。

だからこんな事に…

ちゃっかり、このシーンに出てくる華琳様と桂花たんを想像したら…作者涙目です。

議題5　終わらない会議

「華琳様、大丈夫ですか?私が皆に…」

「大丈夫よ、秋蘭。では今から皆の言った事を簡単にまとめて言うからよく聞くように。」

「「はいっ!!」」

「まず、一刀が私達に会ったのは5年振りだと言う事・そして何か目的があって再び戻った事・そして恐らく天の世界での5年間で何か辛い事があった為に身体は痩せ、腕に痣らしきモノが出来て何か病気を患ってるかもしれない事…そして、恐らく一刀はそれらを私達に隠そうとしている事。つまり、一刀が私達に色々とバレていると知った時…一刀の身に何かが起こるかもしれない事。」

「何かが…つまり再び消えるかもしれないと?」

「あくまで可能性の1つよ。」

「でも、隊長が本当に病気ならお医者様に見せないとなの。」

「沙和は一刀が正直に言うと思う?」

「思うのなの。」

「それじゃ困るのよ。」

「一刀は優し過ぎるのよ。もし私達に色々とバレている事が分ったら…前のように自分の事なんかお構いなしに全てを話すでしょうね。」

「…」

「つまり、間接的に北郷を医者に見せると言う事ですね。」

「そうするしかないでしょう。だから…華佗を使います。」

「華陀…天下一品武道会ですね。」

「桂花。その通りよ。天下一品武道会には必ず華陀は来る。その時に一刀を見せるわ。」

「ですが、無理に見せれば…」

「良いのよ。先に華陀に話を通して、一刀の症状を一刀には内緒で教えてもらうようにするわ。そうすれば、一刀はまだ私達に何もバレてないと思っているという事実は作れるわ。万が一に一刀が何度も拒否した場合には諦めます。でも…そんなことをするより一刀の口から先に私達に話してくれれば良いのだけれどね。」

「でも万が一に兄様が何も話してくれなくて天下一品武道会前に倒れるような事があれば…」

「流琉、恐らくその可能性は低い。北郷が再びこの世界に来たのには華琳様が言われた通り、意味があるのだろう。だとすると一刀がいきなり倒れて大変な事になるなどの問題が起きるの可能性は極めて低いだろう。」

「秋蘭様…そう…ですか。」

「流琉、心配なんだね。大丈夫だよ。流流の料理をあんなに美味しそうに食べてたんだし。」

「…うん。」

『一刀…アナタ、こんな子達にまで余計な気を遣わせて。』

曹操は身振り手振りで励ます季衣と励まされている典韋を眼を細め見ていた。

「華琳～それでウチらはこれから一刀とどう接したらいいんや?」

「まず…絶対に一刀の身体・過去に触れる内容は話す事を禁じます。勿論、一刀から話してきた時は良いけれどこちらから聞きだすような事は絶対にダメよ。」

「…大変ですね。でも、隊長が消えるよりは良いです。」

「凪…」

「凪ちゃんは成長しましたねぇ～」

「あ…いえ。」

楽進の発言は誰もが心で抱いていたものであった。『一刀が消えるよりは…』誰もが思いながら口に出さなかった言葉…曹操も楽進に軽い微笑を溢すほどである。

「皆で一刀が少しずつ話してくれるのを待ちましょう。」

そう発した曹操は静かに席に着いた。

「何か改めて質問がある者はいるかしら?」

…

誰もがこの重苦しい会議が終わりを告げると思っていた。しかし…

「華琳様…私は…北郷に直接聞くべきだと思います。」

議題5　終わらない会議（後書き）

さって息詰まる会議…作者も息詰まる会議が中々終わりません。

果たしてどのように会議は終わりに向かうのか…

楽しみにして頂ければ幸いです。

議題6　和やかな終決

…

魏の玉座の間は今、恐ろしいほどの静寂に包まれていた。

「…アンタ、何言ってるのよ。」

誰もが1人の将の発言によって動揺を隠せない中、ジュンイクだけは違った。

「だから、北郷を此処に連れて来て全て話させろと言ったんだ。」

「華琳様が今まで言った事を聞いてなかったの？」

「それは勿論、聞いていたぞ。」

「なら…アンタは何を言っているの？」

「私なりに考えたんだが…北郷は向こうの世界に帰りたいのだろうか？」

「えっ？」

「北郷に何があったかは私にも分からないが、身体に影響が出るほどの出来事があって向こうでの5年間の良い話すら誰にもしてない。アイツは本当に戻りたいのか？華琳様の言う通り、北郷は何か目的があって来たのかもしれないです…が私には此方の世界に逃げて来

たように感じたんだ。」

「あ…姉者、熱はないか？」

「私は元気だぞ。」

「まさか、春蘭様が気付くとは不吉ですねぇ～」

「全くです。」

「悪夢だわ。」

軍師の3人が各々に驚いていた。それは曹操も同じである。

「春蘭、今日は何か変な物を食べなかったかしら？」

「普通に食べれる物しか食べてませんが…」

「ふふふ♪参ったわね。」

夏候惇のまさかの発言に曹操は微笑していた。

「か，華琳様、私はまた変な事を言ってしまったんでしょうか？」

「いいえ。春蘭。アナタは何も変じゃないわよ。」

「じゃあ、私の言っている事は…」

「間違ってないわ。でも、全てはあくまで想像の話なの。私達が今まで話した事も、アナタが言った事も…」

「はぁ。」

夏候惇に限らず、魏の武官達の頭には?が浮かんでるようだ。

「全ては想像の話…でも私は最悪だけは絶対に避けるために一刀を避けるという結論にしたのよ。」

「最悪…つまり凪が言った北郷が消えると言う事ですね、華琳様。」

「そうよ。秋蘭。」

「それだけは二度と起こしてはいけない。そうよね?」

曹操の問い掛けに全員が静かに頷いている。

「その為には一刀からは何も聞かない…尋ねないという決断をしました。」

「ようは普通に接してれば良いんやな?」

「えぇ。只、一刀に何か不自然を感じた時には全員に報告する事。これは命令です。」

「隊長と普通に…」

「凪、変に気ぃ遣うと隊長にバレるで。」

「流琉、僕は大丈夫かな?」

「季衣は大丈夫よ。」

『だって私達は…兄様とそんな難しい話した事ないでしょ。』

「姉者…口を滑らせるなよ。」

「わ，私がいつ滑らせたんだ！！」

『姉者は可愛いなぁ～』

曹操はそんな和んだ光景を静かに眺めていた。右の手を机の下に隠しながら…

「話は以上です。それと…私が最初に言った約束だけは忘れないように。では…解散！！」

「「はいっ！！」」

議題６　和やかな終決（後書き）

まさかの春蘭に閃いて頂きました。笑

でも春蘭って時々、誰もが思いつかない事を言ったりするんですよね♪

ようやく会議も終わりです。

無意識の中の変人

「暇だな…」

時間は少し遡り此処は一刀の部屋。成都から帰った一刀は1人部屋にいた。

「でもなぁ～部屋を出たら…『一刀、部屋から私の許可があるまで出るんじゃないわよ。もし出たら刎ねるわよ。』って華琳に言われてるしな。それに…」

『今日は朝から春蘭に起こされて目覚めが悪かったんだよな。一眠りするか。』

そして、一刀は寝台に横になった。

…

「だ～りん。」

「…」

「どぅあ～りん。」

「…」

「起きろってんだろうがコラァ！！」

「ん…これは。」

一刀の夢の中で久しぶりに声が聞こえていた。

「イヤン♪ご主人様。やっと起きてくれたわね。」

「随分と久しぶりだな。それにしても…」

「そんなに躊躇って…告白かしら?」

「いえ、違います。じゃなくて最後に物凄く太い声が聞こえたんだけど…」

「…なぁんの事かしら?」

「まぁ…うん…いいや。それで久しぶりに何の用ですか?もしかして…」

「敵の事ねん♪残念ながら分からないわぁん。でも…雪蓮ちゃんは…呉は要注意よん。」

「雪蓮が!!ま,まさか!!」

「あんらぁ?だ~りん、雪蓮ちゃんに最後に言われた事を忘れたのかしらん?」

「それは…覚えてるけど。って、見てたのか!!」

「いつでも見れるわけじゃないわよぉん。それにいつでもご主人様の夢に入り込めるわけでもないのよん…あ~ん、歯痒いわ。」

「気持ち悪いです。」

「あ～ん。それがご主人様の愛情表現の仕方なのかしらん？」

「いえ、事実です。」

一刀は声の主が神に近いような力を持っていると分かっていながら、どこか苦手だった。

「本当に照れ屋さんねん。」

「いいえ、全く照れてません！！それで、用件は呉に気をつけろという事だけですか？」

「ヒドイわん…グスン。」

「あ…あの…。」

「天下一品武道会」

「え？」

「華琳ちゃんに聞いたでしょ？」

「は，はい。」

「今回はそれが呉であるの。」

「それがどうかしたんですか？」

「絶対に魏の子を優勝させるのよん♪」

「優勝って…俺には何も…」

「アナタなりに必死にやればいいのよん。それだけで彼女達は強くなるわん。」

「…分かりました。」

「イヤだ。可愛いわん。欲しいわ。」

「あの…」

「あん。どこかに逝っていたみたいね。そういえば…」

「はい？」

「春蘭ちゃんにダ～リンの腕のそれ、見られてるわよん。」

「えっ。」

最後の声とともに一刀は目を覚ました。

無意識の中の変人（後書き）

…変人…上手く表現されていますかね?笑

恋姫を詳しく知る人なら誰かは一瞬で分かりますよね?

まぁ、オリキャラにしちゃっても良いんですが…

そんなことより!!

恋姫がパチンコに出るみたいです（≧ω≦）b

あ～楽しみ過ぎます♪笑

覇王の懸念（華琳（前書き）

初めに…

「」は普通に声に出して喋っている部分

『』は心の中での部分

と思い出してくれると助かります。

『やっぱり、見られてたのか。春蘭のやつ、固まってたしな。それにしても夢のあの声の人…いつも途中で消えるな。というか待てよ!!何であの人、俺のこの痣の事…姿なんてお互い見せた事無いし、ましてや腕なんて…着替え中も見てたのか?無理だ。俺が考えた所で答えは一生でないな。そんなことより、見られた…か。春蘭ならどうするか…俺が春蘭だったら、間違いなく華琳・秋蘭には洩らすだろうな。万が一、華琳に詰め寄られたらどうすれば…本当の事なんて…絶対に言えないしな。』

一刀は目覚めてから天井を見つめ考えていた。

コンコンコン

「一刀、起きてる?」

「ん?華琳?」

「えぇ。もう出て良いわよ。というか早く開けなさいよ。」

「今、開けるよ。」

『なんで華琳が1人で俺の部屋に?そりゃ、過去にも何度か…あ~何を考えてんだ俺は!!もし痣の事を聞かれたらどうするんだ!!』

ロクに考えもまとまらないまま、一刀はドアを開けた。

「や，やぁ」

「ずっと、寝ていたの？」

「あぁ、今日は朝から春蘭に起こされたからなんだか眠くてね。」

「そう…」

『春蘭がアナタの着替えを見た時ね。』

「それで何か用かい？」

「アナタの外出許可と…」

「！！」

「ん……ちゅ……っ。」

曹操が不意に一刀の唇を奪った。でもそれは、長い口づけではなく本当に一瞬の出来事だった。

「か，華琳…さん？」

「な，何よ。風とはしたクセに私とは嫌とでも言うつもり？」

「えっ…いや。もう少し長く…」

「…バカ。」

こうして2人は長い口づけを交わした。

「それで一刀。私は2人目なのよね？」

「えっ！！何が？」

口づけを終えた2人は並んで寝台に座っていた。

「だから…その…」

「何？」

「どうして！！こうもアナタは！！こういう事は鈍いのかしらね。」

曹操が強く一刀の腕をつねっていた。

「ちゃんと言ってくれなきゃ分からないよ。」

言いながら一刀は自分の腕をつねる曹操の腕をゆっくり払っていた。

「だからその…私は…」

『それよりも一刀、私…結構強くつねったと思うのだけれど痛くなかったのかしら？もしかして、腕の痣らしきものと関係が？』

「華琳？」

「だから！！口づけよ！！口づけ！！当然に2人目なのよね！！」

『もう一度、つねってみようかしら？』

「そ，それが…ひ！！」

一刀が口を開いた刹那には首元に曹操の愛鎌である絶が首に突き付けられていた。

「華琳、そんな危ない物持ってきてたんですか…。」

「あら…男の部屋に1人で行くんだから当然じゃない♪それで…私は何人目なのかしらね？」

「それは…」

『何が痣の事を聞いてくるだよ北郷一刀！！的外れも良いとこじゃないか！！なんか華琳の背中辺りから危ないオーラが見えるし…正直に話すか。』

「さ，3人目です。」

「そう、それで当然に2人目も魏の子なのよね？」

「あ，あの…違うと言った場合はどうなるんでしょうか？」

「とりあえず此処は血の海になるわね。」

『そんなことするはずないじゃない。』

「華琳、本当にごめん。実は呉のし…孫策さんとしました。」

「雪蓮ですって！！アナタ、真名まで預けてもらったの！！」

「な，成り行きで…」

「まぁ、予想はしてたわよ。」

「華琳？」

曹操は絶を引いて、再び一刀の横に座った。

「でも…まさか流されて寝たんじゃないでしょうね！！」

『一刀、ごめんなさい。』

曹操は一刀の腕を再びつねった。さっきよりも強く。普通の人なら吃驚するほどの力で…

「イテッ。」

「どうしたのかしら？」

『やっぱり、只の痩せ我慢だったようね。』

「痛いじゃないか華琳、俺はつねられるの苦手なんだよ。」

『え？何を言っているの一刀？』

「そ，そんなに痛かったかしら？」

「そりゃ、す…！！」

『やべっ！！そういえば腕の感覚が少し麻痺してるたんだった。普段は気にもしないから…つまり今の華琳のは本当は相当痛いのかもしれない。』

「…す，凄い痛かったんだぞ、華琳。ほんと、何するんだよ。」

『今の間は、一体何のよ一刀！！』

「それにしてはよく耐えたわね。」

「5年で成長したのかも。」

『上手く、誤魔化せた…のかな。』

「そんな成長聞いた事ないわよ…それで、雪蓮とは寝ていないのよね！！正直に言って…お願い。」

『一刀…その腕…なんなのよ。』

曹操は少し潤んだ目をしながら一刀を見つめた。勿論、潤んだのは一刀の腕が原因である。しかし、一刀には理解できていなかった。

『華琳…』

「寝るわけないだろ。こんな事言ったら、また種馬とか言われそうだけど俺は魏の皆としか寝るつもりはないからさ。」

一刀はいつもの屈託のない笑顔で答えていた。

「…相変わらず、節操がないわね。」

曹操は直ぐにいつものイヤな微笑に表情を変えていた。

「ごめんなさい。」

「ま…良いでしょう。」

『一刀、本当にその腕…隠し通せると思っているの？』

曹操はゆっくりと一刀にもたれかかった。

覇王の懸念（華琳（後書き）

まず、大変読みずらい文章になってしまい申し訳ありません。

でも…必要だと思い書きました。

この時の華琳様の心情を思うと…作者涙目です，笑

実はこの中に…作者は恋姫の病気に掛かってる事が分かる場所があります。

…もし分かった方がいたら…同じ病気かもしれません。笑

新しい朝と書簡

次の日の朝

「はぁぁあぁぁぁぁ！！」

「どうりゃぁぁあぁぁ！！」

魏の庭では武将達の大きな声が響き渡っていた。全ては天下一品武道会の為である。昨日の会議の日以来、曹操の計らいにより魏の主力武将達は各々の鍛錬に集中出来るようになっていた。と言っても一刀のいなかった3年間の魏は曹操を含めた将達は勿論、訓練・警邏・警備等をやっていなかった訳ではないがどこか上の空だった為に逆に3年の間に若い者たちが成長をする事に繋がっていた。

「季衣、少し休むぞ。」

「はいっ！！」

今日は早速朝早くから夏候惇・許緒が仕合を行っていた。庭に来る者は個人の鍛練と言うよりも仕合をしに来るのが常である。

「それにしても季衣、本当に成長したな。」

「ありがとうございます。でも僕は、華琳様の親衛隊ですから。」

「頼もしいな。」

一刀のいない3年間、1番の成長を見せたのは許緒・典韋の2人かもしれない。勿論、身体も成長したのだが曹操が覇気の無くした3年間…自分達も辛いのも我慢し、曹操を支えようと2人でお互いを支え合い鍛練を怠らなかった。

「今日は誰が来ますかね？」

「そうだな…多分、凪あたりじゃないか？」

「僕は流琉かなと思ったんですけどね。」

「じゃあ、勝負だな。」

「いいですよぉ。僕が勝ったら肉まんたくさん買って下さいね。」

「な！！…ふふふ。良いだろう。この夏侯惇元譲！！逃げも隠れもしないぞ！！」

「はいっ！！」

許緒はこんな他愛のない夏候惇との会話が出来る事が楽しくて仕方がなかった。3年間止まっていた2人の時間がまるで動きだしたかのように…

ガサガサ

「季衣、おはよう。」

「あ！！流琉♪」

茂みが揺れるのと同時に伝磁葉々を抱えた典韋が姿を現した。

「春蘭様、おはようございます。今日はよろしくお願いします。」

「私のお金がぁ！！」

「し，春蘭様？」

「あ、いや、うむ、何でもないぞ。決して季衣と賭けなど…」

「してたんですね？」

「…うむ。」

「やった～♪春蘭様、肉まんですよ。肉まん。」

「ぐぐぐ、仕方あるまい。」

「ちょっと季衣！！春蘭様にお金を出してもらうなんて…」

「流流、良いんだ。私が言いだした事なのだから。」

夏候惇が笑顔で典韋を制した。典韋もまた夏候惇の笑みに気付きそれ以上は何も言うつもりはなかったのだが…

「やったぁ♪」

「だから調子に乗らないの。」

「流琉、きら～い。」

「…あの春蘭様、季衣とやらせてもらって良いでしょうか？」

「あ，あぁ、私は構わんぞ。」

『気のせいか…流琉の背中から何やら邪悪な。』

夏候惇は典韋の語気に圧され、少し離れた茂みに腰を下ろした。

「季衣ー！！朝から私を怒らせたわねぇ！！」

「だって、流琉が朝からうるさいから…」

「でえやぁぁあぁぁぁぁ！！」

「はぁぁあぁぁぁぁ！！」

『それにしても2人とも…本当に成長したな。私もダラダラやっていると追い抜かされてしまうな。』

夏候惇は静かに戦う2人を見つめていた。一刀がいなかった3年間…曹操を支える為にも支え合い2人で頑張り続けた者と、どこか上の空で政務・訓練・鍛練等をしてきた者…違いは明白である。恐らく、曹操を含めた殆どの将が後者になるだろう。しかし、もう1人前者にあたる者が姿を現した。

「おはようございます。春蘭様。」

「凪！！来るのが遅いではないかぁ。」

夏候惇は楽進の両肩を掴みグラグラと揺らしていた。

「も，申し訳ありません。」

「次は流琉より早く来い！！良いな。」

「わ，分かりました。」

楽進には訳が分からなかったが、とりあえず今度は典韋より早く来る事を胸に刻んでいた。

「じゃあ、やるか凪。」

「宜しくお願いします。」

…

そんな光景を遠くから見つめる者達がいた。

『全く、朝からうるさいわね。あの腑抜け猪武者…今は只の猪武者かしら?あの全身精液男が帰ってきて単純に元気になるなんて憐れね。…フン！！』

猫耳の軍師が庭を数分見つめてから再び歩き出した。

「いいですね。武将の皆は。」

「それは、お兄さんに活躍が見せられるからですか～?それとも仕事を鍛練で休めるからですか～」

「言わなくても分かっているでしょう？」

「そうですねぇ～。風も同じ事を思いました。」

「行きましょうか。」

「はい～」

また違う場所では郭嘉・テイイクが鍛錬に励む将達を見つめていた。
そして…

「ふふふ♪早速、やってるわね。」

少し風の強い城壁の上、金髪を靡かせ曹操が静かに庭を見つめていた。

「春蘭…その３人は手強いわよ。今のアナタなら苦労するでしょうね。」

曹操も今庭にいる許緒・典韋・楽進の３人の努力をよく知っていた。

「魏武の錆びた大剣…天下一品武道会までにどこまで砥げるか…見物ね。さて、桂花達も動き始めたみたいだし、私も行こうかしら。まずは政務ね。今日から戻るわよ華琳！！」

それぞれが新しい朝を迎えた日…魏には１つの書簡が届いた。

新しい朝と書簡（後書き）

とりあえず…一刀・華琳のあの後は何もありません！！笑
華琳は帰りました！！

さて、相変わらず時間が進むのが遅くて申し訳ありません。
本当に作者の好き勝手小説になってきましたね，笑

でも…作者自体は結構気に入ってます♪

良かったら次回もお楽しみにです。

一刀の仕事

「「おはようございます。華琳様。」」

「おはよう。」

此処は玉座の間、曹操・夏候淵・ジュンイク・郭嘉・テイイクが1つのテーブルを囲んでいた。

「華琳様。揃ったので始めて良いでしょうか？」

「待ちなさい、桂花。一刀も来るわ。」

「えっ！！何でアイツが！！」

「北郷に仕事をですか？」

「あの頃を思い出すでしょ。秋蘭。」

「懐かしいですね。しかし、恐らく北郷はまた字を…」

「5年経ってますからね～」

「分かっているわ。身体の事もあるし、大した仕事はさせないつもりよ。」

「厠の掃除でもさせとけば良いんじゃないですか？」

「桂花ちゃんの毒舌も絶好調ですね～」

「そのようですね。」

「ち，ちょっと風！！凜！！それはどういう意味なのよ！！」

「桂花。そんなに怖い顔しないの。可愛い顔が台無しよ。」

「華琳様～」

「ふふふ♪」

コンコンコン

久しぶりの騒がしく懐かしい会議は1つのノックにより治められた。

「華琳いるか？俺だ。一刀だ。」

「華琳様、北郷が来たようです。」

「そのようね。一刀！！入りなさい！！」

「あぁ、じゃあ入るぞ。」

ギィ

一刀が扉を開けば、曹操を皮切りに武将達の姿が見えた。

「華琳、1人じゃなかったんだな。」

「はぁ？朝っぱらから何でアンタと華琳様が2人きりになるのよ。」

「一刀、早く席に着きなさい。」

「あ，あぁ。」

曹操に言われるまま、一刀も直ぐに席に着いた。

「桂花。」

「はいっ！！それでは今日の会議を始めます。では、華琳様。」

「えぇ。もう耳には入ってると思いますけど、改めて報告するわね。今日から天下一品武道会迄、魏の武官達には鍛錬に集中してもらう事にしました。引き継ぎ状況をお願いできるかしら？稟。」

「はい。特に大きな心配はありませんが…」

「え！！」

「どうかしましたか、一刀殿。」

「心配ないって、鍛錬に集中するってつまり普段の仕事をしないって事だよな？」

「そうですが…」

「新兵の訓練・街の警邏・国境の警備とかは誰がするんだ？」

「若い兵達がしますが…」

「若い兵って、それで大丈夫なのか？」

「一刀。何か勘違いしてるんじゃないかしら？いつも春蘭が新兵訓練したり、凪達が街の警邏ばかりするんじゃないのよ？」

「それは分かってるけど。」

一刀は曹操に言われても未だに納得がいってない感じであった。

「天の世界の魏はどうなったの？」

曹操が不意に一刀に尋ねた。

「赤壁で負けて、でも新しい…意味が分かったよ。華琳。」

一刀が何かに気付いた。

「お兄さんの頭はようやくお目覚めですかねぇ～」

「3年経って、新しい人材も増えたんだな。」

「そこに辿り着くまでにどんだけかかるのよ！！バカなの？死ぬの？」

「その通りよ、一刀。簡単に言うならアナタの毒牙に掛かってない者達よ。」

曹操はニヤっと擬音でも聞こえそうな表情で一刀を見た。

「あはははは。」

一刀は只、苦笑いで笑みを溢した。

「何を笑っているのよ！！気持ち悪いわね。」

『華琳のヤツ、完璧に俺をおちょくってるな。桂花は全力で突っ掛かってくるし。でも安心したよ。魏でも新しい芽が成長しているんだな。』

「稟、進めなさい。」

「はいっ。魏での問題は特にないのですが、蜀から兵を少し貸して欲しいという書簡が届いております。」

「そう…あそこは五胡との距離も近いし、当然か。出せるだけ出してあげなさい。勿論…」

「細作ですね。」

「そうよ。」

「相変わらず、抜け目ないなぁ。」

「魏にとって利になる事なら何でも盗む。当然よ。」

今にもウインクが飛んでくるんじゃないかと言うぐらい曹操は生き生きしていた。

「じゃあ、秋蘭・桂花・風から何かあるかしら…特にないようね。

では一刀。どうして朝からアナタは呼ばれたか分かるかしら？」

「え…今の話を聞かす為…じゃないのか？」

「今の話の中にアナタのいる意味があったかしら？」

「い，いや。」

「前にも言ったわよね。また、犬以下になりたくないでしょう？」

「懐かしいよ。」

犬以下…この言葉は3年前に一刀がこの世界に来て間もない時に曹操に言われた言葉である。働かない者は犬よりも役に立たない。

「今回は私が一刀に直々に命じます。」

「分かりました。」

「まず1つ、必ずこの朝の会議に参加する事。2つ、これから天下一品武道会迄に私や秋蘭も含め多くの将が誰かと仕合をする為に庭を訪れるでしょう。その仕合の結果を今日から毎日欠かさず、私か軍師の3人に寝る前に伝える事。3つ、魏の子達を平等に扱う事。」

「それだけ？」

一刀は本当にこれが仕事と呼べるのかという内容に呆然としていた。

「一刀。良いわね？」

「はぁ。」

「つまり、アナタは朝の会議以外は殆どが庭にいると言う事よ。良いわね！！」

「わ，分かったよ…ちょっと待って華琳！！秋蘭が庭に来るのは分かるけど、華琳は見学で？」

「北郷。華琳様も出るのだぞ。」

「え！！嘘だろ？」

「私が出ちゃいけないのかしら？」

「い，いやっ、そういうわけじゃ。」

一刀は気付いた。猫耳の軍師が恐ろしい形相で睨んでいるのを…そしてその意味も…

『華琳の独断か…』

「か，華琳は過去2回の天下一品武道会にも出たのか？」

一刀は必死に食らいつく。

「いえっ、今回が初めてよ。」

「どうして急に？」

「なんで私がアナタにそんな事を話さなければいけないのかしら？」

「あ，うん。話す義理はないよね。」

『桂花、これは無理だ。』

一刀が軽く難しい表情をジュンイクに向ければ…『死んで。』と聞こえてきそうな表情で返された。

『ぐぐぐ…でも華琳に口で勝つなんて普通に無理だろ。』

そんなやり取りを交わしている最中…コンコンコン

再び、玉座の間にはノックが響いた。

「曹操様！！呉から書簡が届きました。」

「呉から？秋蘭。」

「はい。」

夏候淵が入り口で兵士から書簡を預かり、曹操に手渡した。一刀を含む全員が静かに見守る中、曹操はそれを静かに読み始めた。そして…

「な，なんですって！！」

曹操の驚く声が玉座のに間に響いた。

一刀の仕事（後書き）

文章は出来ていたのですが、更新が遅れました。

次は少し引っ張った書簡の話になる予定です。

願い

「華琳様、どう致しましたか！！」

呉からの書簡に目を通し終え、声を洩らした曹操にジュンイクが心配そうに尋ねた。

『雪蓮…』

曹操は額に手をあて…微笑を洩らしていた。

「華琳、どうしたんだ？呉からの書簡にはなんて？」

「一刀…アナタは呉と蜀の願いみたいよ。」

「願い？」

一刀には全く意味が分からなかった。そしてそれは、その場にいる夏候淵・ジュンイク・郭嘉・テイイクも同じであった。

「秋蘭。天下一品武道会で優勝するとどんな褒美が貰えるかは知ってるわよね。」

「はいっ。その優勝者には最強という称号、そして常識範囲内で可能な願いが…まさか北郷がですか？」

「へっ！！俺？」

「その通りよ。どうやら呉・蜀の両国が一刀を要求しているわ。」

「要求って…」

一刀は苦笑いをするしかなかった。

「華琳様。しかし、呉・蜀がこのバカを要求しているというのはどういうことなのでしょうか?天下一品武道会は個人の武を競うものでは?」

「書簡によると上位5名の所属国の中で1番成績の良い国を優勝国とするらしいわよ。」

「つまり、今回は個人ではなく国という事ですか。」

「そのようですね~。でも呉からの書簡なのに蜀もというのはどういうこなんですかね~?」

「全て、蜀は承知済みらしいわよ。」

「完璧な根回しですね。華琳様、具体的な願いは何と書かれているんでしょうか?」

「天の御遣い北郷一刀を魏だけが所持するのではなく、期間を設けての呉・蜀への分配を要求する。だそうよ。」

「分配って…俺は物か!!」

「重大な問題ですね。」

「へっ？稟、全然重大じゃないだろ。自分で言うのもおかしいけど、メチャクチャな要求じゃないか。」

「困りましたね、華琳様。」

「桂花！！お前は俺がそんなに嫌いなのか…」

「お兄さん、呉での話を覚えてませんか～？」

「えっ？呉での？」

1人周りの反応に焦る一刀にテイイクが静かに語りかけてきた。

「呉でお兄さんは危険人物という話ですよ。」

「危険人物…」

一刀は眼を瞑り、必死で記憶の糸を辿っていた。

「思い出したよ。俺が呉にいるのが気付かれたら大変ってやつだよね？」

「そうですぅ～。」

「でも、それが今回の話に何の関係があるんだ？」

「お兄さん、一度しか言いませんよ～。あの時に雪蓮様達が言ってたように、三国にはお兄さんの事を色々な解釈をしてる民が数多くいるのです。」

「言っていたね。」

「万が一にもこの願いが叶えば、お兄さんは呉・蜀に期間は分かりませんが身を置く事になるでしょう。つまりそれは、魏を天下に導いた天の御遣いの知識を呉・蜀にも分配すると言う事。また、民の中には天からの遣いがやってくるというだけで変わる者もいるでしょう。」

「別に俺はそんな凄い人じゃ…」

「桂花。アナタの意見を聞かせてくれるかしら？」

「とりあえず、この願いが叶わなかったとしても天下一品武道会の後には短期でこのバカを呉・蜀に貸し出さなければなりませんね。」

「そうね。一刀も理解しておきなさい。」

「あぁ。」

『でも、これは良い機会かもしれないな。』

一刀は呉・蜀に派遣されるかもしれない状況になり１つ思い出していた。

『魏の敵…敵が同じ三国の中にいるなんて考えたくもないけど、今の魏をどう思っているのか知るには絶好のチャンスかもしれない。』

「華琳様。勿論、これまでの話は呉・蜀の中での仮事項であって確定事項ではないのですよね？」

「勿論そうよ。あくまで提案よ。只…断るには相当な覚悟が必要よ。もし魏が断れば、呉・蜀は天の御遣い北郷一刀にそれほど執着していると…勘違いするでしょう。」

「華琳、勘違いって。」

イヤな笑顔を見せる曹操に一刀は再び苦笑いを浮かべた

「それに天の御遣いが戻ってきたにも関わらず、魏の将達は私を含め相変わらずなのだと思われるでしょうね。」

…

『ん…なんだ?』

曹操が発言を行った時、項垂れていた一刀は何となく周りに漂う雰囲気が変わったように感じていた。

「華琳様、その条件…受けましょう。今回の天下一品武道会の上位5名は我ら曹魏が独占するのですから問題ありません。」

「秋蘭?出来るの?」

「桂花、今回の魏は違う。そうだろ?」

「アナタがそこまで言うなら良いでしょう。では受けるという事で良いかしら?」

「華琳様、質問が。」

「何かしら、桂花。」

「我らが優勝国になった場合の願いはどうなるのでしょうか？」

「我ら魏の願いに2国が出来るだけ協力してくれるそうよ。」

「分かりました。武官にはどう伝えますか？」

「私が全員に伝えます。庭で会う事も出来るでしょうし。」

「分かりました。」

「では、呉からの提案を全て呑むという事で返事をします。」

「御意。」

「ではこれにて会議を終了します。」

此処は先程まで会議の行われていた玉座の間。曹操が1人残っていた。

『雪蓮…やってくれたわね。堂々と書いてくるとはいい度胸じゃない。』

書簡の最後には曹操個人にあてられた言葉が書かれていた。

『やっほ～華琳♪一刀が帰ってきてすっかり元気になったかな？いきなりこんな書簡をごめんね。魏の本気を見たくて意地悪しちゃった。一刀を餌にするのは気が引けたんだけど、実は私も一刀の事…

天下一品武道会、会えるのを楽しみに待ってるわね♪』

『こんなふざけた提案をしてきた事を後悔させてあげるわ。』

願い（後書き）

少し分かりづらい文章で意味が分からなかったら、申し訳ありません。上手く、作者の言いたい事が伝えられてると良いのですが…不安です。

何かココを訂正した方が良いのでは？
という場所がありましら、気軽に感想でお願いします。

勿論、疑問も感想でお待ちしております。

「それにしても大変な事になったな～」

「相変わらずお気楽なのですね、一刀殿。」

「もう、お兄さんが魏にいる事は周知の事実ですからね～」

「帰ってこなければ良かったのよ。」

「け，桂花、もう少し優しくしてくれないか。」

「フンッ！！」

「それにしても秋蘭、本当に大丈夫なの？」

「俺としても嬉しいけど上位５人を魏で独占って…そんなに過去２回の天下一品武道会は成績が良かったのか？」

「…過去２回については華琳様から直接聞いてくれ。」

会議を終えた一刀・夏候淵・ジュンイク・郭嘉・テイイクはそれぞれの持ち場に向かう最中だった。

「ごめん。聞いちゃいけなかったのか。」

「良いんだ。だが、今年は違うから見ててくれ。」

「あぁ、俺も出来る限り精一杯応援するよ。」

「良いですね～。武官の方達はお兄さんに良い所が見せれて。」

「私達軍師はむしろ忙しくなるばかりです。」

「そんな事ないさ。桂花に稟・風、それに若い子達が頑張ってくれるから春蘭達だって鍛練に集中できるし、華琳だって皆を信じてるから天下一品武道会に出るんなんて言い出したんじゃないのかな。少なくとも俺は武官だけじゃなく文官の皆も…魏の皆が頑張ってくれてるからこそ天下一品武道会での優勝国に近付くって信じてる。」

「相変わらず、調子の良い事ばかり言って…アンタもしっかり庭で仕事に励みなさいよ。」

「あぁ、桂花も…稟・風も頑張ってな。」

「あ，アンタに言われるまでもないわよ。行くわよ、稟・風」

「ふふふ。お兄さん、失礼します～」

「一刀殿、それでは。」

少し顔を赤くしたジュンイクを先頭に、笑みを溢しながら一刀と夏候淵に軽く会釈をした郭嘉・テイイクがその場を後にした。

「秋蘭は鍛錬だけには集中出来ないみたいだね。」

「あぁ、いくら良い若い者達が増えていると言ってもそれを指揮する武官がいなくてはな。」

「それで秋蘭が。」

「あぁ、だが指揮を終えた後には私も庭に顔を出すだろうから宜しく頼む。」

「待ってるよ。でも華琳には鍛錬の暇なんてあるのか？」

「ふふふ。北郷、誰の心配をしているのだ？」

「…魏の覇王様の。」

一刀も思い出したように笑みを溢した。

「華琳様なら政務も完璧にこなし、鍛錬も怠らないだろう。ただ…」

「ただ、無理はするかもしれないな。」

「そうだ。そして無理をしていても華琳様は絶対に外には出さない。北郷、すまないが時々様子を見てくれないか？」

「あぁ、分かってる。」

「後…姉者が庭を壊さないように気をつけてくれ。」

「それは、俺には止められないよ。」

「ふふふ、期待してるぞ。じゃあ、私はこっちだ。そのうち庭でな。」

「あぁ。」

夏候淵も次の仕事をするべく、一刀と別れた。

『さてと俺は庭に来る武官達のサポートってわけか。俺だって呉・蜀が勝って長い時間は魏を離れる事にはなりたくないし、頑張るか。』

武官と文官（後書き）

さて、更新完了です♪
はい…展開が遅くて申し訳ありません。
それにしても秋蘭の雰囲気が…キャラが崩壊してるような…すいません。
そして…重大報告です！！
実は…
…
新しい小説を書き始めようかと考えてます♪
と言っても、同じく恋姫のですけどね。更に短編ですけどね。そして携帯投稿限定ですけどね。つまり仕事中もガンガン更新しちゃうかもですけどね。
つまり、こっちはＰＣからの投稿一本にしようと思ってます。
まぁ、更新スピードは今までと変わらない予定ですが…
そして今日初めて、ＰＣでアクセス解析を見ました。…凄い細かく出てるんですね。普通にビックリしました。
そして疑問に思ったのですが、この小説の累計アクセスとかって読

者様は見れるものなんですかね?機械音痴過ぎてすいません。笑

私…未だにサイトの機能が…

新しい短編を作るまでにも恐ろしく時間がかかりそうだ。笑

そういえば3連休は仕事ばかりで更新は遅れるかもしれません←←

まぁ、日曜の夜は女子会ですけどね♪

でも時間があれば更新します。

長々と色々と失礼しました。

呂布がまさか…（前書き）

久しぶりの更新になってしまい申し訳ありません。

三連休の予定が仕事で全て潰れました（泣

そして読者の皆様に感謝しなければいけない事を発表するの忘れてました。

それは・・・後書きで，笑

呂布がまさか…

「雪蓮様。魏から恐らく前回の返事と思われる書簡が雪蓮様宛てに届きました。」

「私に？」

「はい。遣いの者が華琳様は雪蓮様だけに書簡の内容を見せるように言われたとの事らしいです。」

「まぁ、良いわ。見せてくれるかな♪」

「コチラです。」

此処は呉の南陽、今は周泰が庭にいる孫策に書簡を手渡しているところであった。

「なになに～♪」

「雪蓮、こういう風に書簡で会話をするのも久しぶりね。」

『そうね♪』

「アナタの提案してきた天下一品武道会での決まり、全て呑むわ。」

『流石ね，華琳。』

「そして、これから天下一品武道会が近付くにつれての細かい決ま

りも魏は全てを呑むわ。」

『あら…一刀の帰りは予想以上みたいね。』

「雪蓮…魏の本気、久しぶりに見せてあげるわ。」

『華琳…完璧に覇王に戻ったみたいね♪』

「そして…一刀は呉にも蜀にも絶対に渡さない!!」

『ぷっ。あははは♪一刀、アナタのお陰で強い魏とやれそう。もう熱くなっちゃうじゃない♪』

「あ，あの雪蓮様？」

書簡を見て微笑を洩らしたり、声に出して笑う孫策に恐る恐る周泰が声を掛けた。

「あ、ごめんごめん。明命、お願いしていいかな？」

「はいっ!!なんなりとお申し付けください!!」

「この書簡の事で後で蓮華のトコに行くから伝えといてくれるかな？後、冥琳にも♪」

「分かりました。では…」

「お願いね。」

周泰は直ぐにその場を後にし、再び庭は孫策だけになった。

『果たして魏が私の眼にどう映るか…楽しみにしてるわよ、華琳。』

酒を嗜みながら不敵に微笑む小覇王が此処にいた。

「桃香様、本当に良かったのですか？」

「ほえっ？」

「ほえっ？ではありません！！天下一品武道会の事です。」

此処は蜀の地である成都の城のとある一室、劉備・関羽がいた。因みに関羽の真名は愛紗。

「決まりの事？」

「そうです。ロクに私達にも相談せずに朱里と勝手に決めてしまうなんて酷いじゃありませんか？」

「愛紗ちゃん、ごめんね。でも雪蓮さんがどうしても返事を早く欲しいって、それにまだ決まったわけじゃないんだよ。魏の華琳さんが断ったらいつもの天下一品武道会にするんだって。」

「桃香様は華琳殿が断ると？」

「戦乱の時の華琳さんなら間違いなく断らないと思うけど…今はどうかな？」

「そうだったのですか。今の華琳殿なら断られるでしょう。」

「華琳…断らない…」

「えっ！！」

「なっ！！」

劉備・関羽、２人しかいない部屋の筈が突如違う声が聞こえた。２人は声の聞こえた方を直ぐに見ると半開きになったドアから赤い２本の触覚らしきモノが動いていた。

「恋ちゃん、おかえりなさい。」

「恋！！帰って来ていたのか。」

赤い触覚の正体は呂布であった。呂布は魏に派遣されていたのだが、一刀が戻った事により三国での派遣の決まりは一時中断され呂布も蜀へと帰ってきた。

「…ただいま。」

「おかえり、恋。それで急なんだがどうして華琳殿は断らないと？」

関羽は呂布の言った言葉を聞き逃さなかった。

「ご主人様…良い匂い。」

「…ご主人様？良い匂い？」

関羽の頭の中では疑問の？が多く浮かんでいた。

「そ，その恋ちゃん、ご主人様ってもしかして…」

「…一刀。」

「あ～恋ちゃん良いなぁ。真名を預けてもらったんだね。」

「…ご主人様…真名ない。」

「真名がないだと。御遣い様には真名もないのか。」

関羽も劉備・呂布の会話に一刀の事を話している事に気付いた。

「それにしても、どうして恋は御遣い様をご主人様と言っているんだ？まさか、そう呼べと言われたのか？」

関羽の表情は険しい。

「…違う…ご主人様、優しい。恋が…頼んだ。」

「恋ちゃん、もしかして？」

「桃香様、どうしましたか？」

劉備は何やらニヤニヤと笑みを溢している。

「私も早く会いたいなぁ。」

「御遣い様にですか？」

「御遣い様もそうだけど、御遣い様に会った華琳さんにも。」

「華琳…魏…強い。最後に戦った時と同じ。」

「御遣い様が魏に戻っただけで、それ程に変わるものなのか。」

「愛紗ちゃんも御遣い様に早く会いたくなっちゃった？」

「わ，私はただ恋がそれ程言う人物がどんな方なのかと。」

「天下一品武道会で皆が頑張ってくれたら会えるよ。」

「恋…勝つ。ご主人様、蜀に呼ぶ。」

「恋が言うように魏が戻ったのなら、華琳殿は必ず今回の天下一品武道会のやり方を全て呑むでしょう。」

「あ，愛紗ちゃん？」

劉備は関羽から洩れる何かに軽い恐れを感じた。

「魏は私達に勝ち、今があると言うのに天下一品武道会での魏の武官の情けなさに同じ武官として怒りを感じていたので丁度良いです。戻った魏…どれ程なのか楽しみです。」

呂布がまさか…（後書き）

はい、まずはタイトルの謝罪を…申し訳ありません。反省してません，笑

でも内容は真剣です！！そして、蜀の子を少し出させていただきました。

嫌いじゃないんですけど、蜀の子達は表現がどうも…3年経って少し変わったんだと言う事にして下さい↑オイ

そして発表いたします。

２０１１／１０／１１

現在…

累計ＰＶ…４５５７２４アクセス
累計ユニーク…５７８６５人

になりました。

正直作者は…えっ！！という感じです。笑

これだけ多くの方が私の自己満で駄文な文章を見て下さった事に本当に驚きました。

これからも多くの方が見てくれているという事を糧に頑張らせて頂

きます。

覇王と一刀と武官達の誓い

「はぁっ！！」
「どりゃぁぁあああぁぁぁぁ！！」
「やぁぁあぁぁぁぁ！！」

今日も魏の庭では自分の武器を存分に振るいながら、武官達が仕合を行っていた。

「春蘭様、今日こそ片膝つかせてみせるのなの！！」

「お前達には無理だろう。」

「やってみんと分からんでぇ！！」

今日は朝から夏候惇・李典・于禁の3人が庭に姿を見せていた。そして、試合の良く見える少し離れた場所には机と椅子が置かれており一刀が座っていた。

『それにしても、春蘭のやつ毎日来てないか？』

机に置かれた書簡を手に取りながら一刀は苦笑いしていた。書簡には武官が庭を訪れた時にサインする場所があり、夏候惇は書簡を設置した日から全てにサインがなされていた。

『もしかしたら、俺の身体の事を誰にも言ってないみたいだけどそれを心配して？まさかな。』

「おっ。」

一刀が書簡に目を向けてる最中にどうやら仕合が終わったようだ。

「今日もダメだったの。」

「あと一押しなんやけどな。」

「まだまだ貴様達に片膝をつくわけがなかろう。」

「お疲れ様。春蘭・真桜・沙和。」

一刀は地べたに座る3人に竹筒を配っていた。

「もう貴様も仕事には慣れたようだな。」

「春蘭が毎日来てくれて色々とやってくれるからね。」

「貴様…私を馬鹿にしていないか？」

夏候惇が愛刀の七星餓狼に手に掛けようとしていた。

「い，いや誤解しないでくれよ、春蘭が毎日来てくれるから本当に助かってるんだって。」

「春蘭様、隊長は嘘は言わないのなの。」

「そ，そういえばそうだったな。」

「沙和、ありがとう。」

「隊長、良いのなの♪」

「沙和…それでこの腕は何？」

見れば、沙和が一刀の腕に自分の腕を絡めていた。

「沙和、まだまだ元気なようだな。私と1対1でやるか？」

「それは勘弁してほしいのなの～」

「さ，沙和、俺まで巻き込むなぁ～」

「春蘭様は本当に元気やなぁ。」

李典は走る3人を見ながら地べたで竹筒を飲んでいた。すると、一刀の席のすぐ後ろの茂みから庭を訪れるのが初めてな2人が姿を現した。

「どうして一刀が鍛錬に参加してるのかしら？」

「あ，姉者…」

姿を現したのは愛鎌の絶を持った曹操と愛弓の餓狼弓を持った夏候淵であった。

「た，大将に秋蘭様、おはようございます。」

「おはよう、真桜。これはどういうことなのかしら？」

「実は…」

「…全く、元気過ぎるのも困るわね。春蘭!!沙和!!一刀!!」

曹操の雷鳴のような声が庭に響いた。

「か，華琳様!!」

「かかかか，華琳様なの!!」

「か，華琳、それに秋蘭。」

曹操の声に夏侯惇・于禁はその場に直立不動のような形になった。

一刀は苦笑いを洩らした。

「や，やぁ、華琳。」

「アナタは向こうに座ってなさい。」

「はい。」

曹操は指をさして一刀に指示し、直立不動する2人の方へと向かっていった。

「アナタ達。」

夏侯惇・于禁は既に片膝を着き頭を下げ曹操の前にいた。それは曹操の身体に纏う怒気に起因していただろう。

「まず、始めに言っておきます。遊ぶなら鍛練等やめて構わなくて

よ？こうしている今も若い者達がアナタ達の代わりに必死に頑張ってるというのに…情けない。それに…」

曹操は2人の耳元まで、腰を落とした。

「一刀を走らせてアナタ達は何を考えているの!!私にこの絶で刎ねられたいの!!一刀にどうして私がこの仕事を任せてるか分かってるわよね。一刀の監視よ。身体もそうだけど、一刀がこの世界に意味があって来たのなら何か行動を起こすかもしれないからそれを見る為。分かったかしら？」

「大変申し訳ありません。」

「ほ，本当にごめんなさいなの。」

于禁の眼には既に涙が溜まっていた。

「アナタ達もよ!!出てきなさい!!」

曹操は前にある茂みに向かって言い放った。

『華琳のやつ、一体何を話してるんだ？あっ!!』

一刀の座る位置からは何も聞こえない…が、曹操が何か言ったかと思うと夏候惇・沙和の後ろの茂みからは張遼・許緒・典韋・楽進の姿が見えた。

「あら…天下一品武道会に出る武官が勢揃いじゃない。丁度良いわ。」

曹操は武官達をつれて椅子に座る一刀の前にやってきた。

「一刀、今から天下一品武道会の願いについて話すわね。」

「あ，あぁ、全員いるみたいだし俺は構わないよ。」

そして曹操は話し始めた。天下一品武道会でのルールや一刀が魏だけのものではなく、呉・蜀にも行かなければならなくなるかもしれない事を…

「華琳様！！」

曹操が話を終えると1人元気に手を上げた者がいた。

「何かしら、季衣？」

「要は勝てばいいんですよね？勝てば兄ちゃんを他の国に少し貸すだけで良いんですよね？」

「季衣、貸すって。」

「そうよ。」

「な～んだ♪大丈夫ですよ、華琳様。」

「大丈夫？」

「皆は知らないですけど、僕と流琉は負けるつもりありませんから。」

「ち，ちょっと、季衣。」

自分の名前が出た事に驚いた典韋が許緒の身体を揺さぶっていた。

「凄い自信ね、季衣・流琉」

曹操はそんな2人を不敵な笑みで見ていた。

「僕達は1日も鍛練をしなかった日はありませんし、それに…」

許緒は一瞬だけ一刀に目を向けた。

「今回は兄ちゃんがいますから。」

「季衣…」

一刀は季衣に眼に涙を溜めながら笑みを溢した。

「兄様を他の国には渡しません!!」

「流琉…2人とも。」

「一刀、愛されてるわね。」

「俺も本当に好きだよ。2人の事、勿論ここにいる皆も、今も政務を頑張ってるだろう軍師の3人も…それに張三姉妹の3人もね。」

「魏の種馬は伊達じゃないようね。」

「華琳、俺は本気だよ。」

「…バカ。」

曹操も一刀の真剣な眼に見つめられ頬を赤くしていた。

「皆、俺だって魏を長い間は離れたくない。自分の事だし、俺は何もしてあげられないけど、皆…勝ってくれ。」

一刀は頭を下げた。

「してるやないか。」

「えっ？」

「ウチらの事を笑顔で庭で見ててくれてる。」

「そうですよ、隊長。それだけで私達は。」

「それに貴様はその…朝から夜まで相手がいない時は話相手になってくれてるではないか。」

「霞・凪・春蘭…」

「らしいわよ、一刀。」

「俺、本当に帰ってこれて嬉しいよ。」

「天下一品武道会、上位5名は魏で独占する事を命じます！！」

「「はいっ！！」」

そしてその日は一刀が見守る中、曹操を含めた天下一品武道会に参加する全員が夜まで仕合を行っていた。

覇王と一刀と武官達の誓い（後書き）

今回は少し長めです。

誤字脱字が無いと良いですけど…

開催国到着（前書き）

先に謝罪を…短過ぎてすいません。

開催国到着

『此処に来るのも久しぶりだな。』

一刀は目の前に広がる光景に思い出していた。再びこの世界に戻ってきた時の事を。

「一刀、行くわよ。」

「あ，あぁ。」

目の前に広がるのは呉の都である建業、天下一品武道会の開かれる地である。そして、城門には予想外の人物が立っていた。

「あっ!!華琳♪」

「し，雪蓮!!アナタが自ら出迎えを?」

なんと魏の面々を出迎えたのは前呉王である孫策であった。

「国境で華琳達が来たって行ってたから、そろそろだと思ったわよ。」

「相変わらず勘なのかしら?」

「当然♪」

「相変わらず恐ろしいわね。」

「褒め言葉として受け取っておくわ。それにしても…」

「どうかしたかしら?」

孫策はまじまじと曹操を見つめていた。

「もうバッチリみたいね♪うんうん♪」

「バッチリ?私は別におかしくないわよ。」

「コッチの話よ。魏の子達も長旅で疲れたでしょ?部屋を用意してるから案内するわ。」

「お願いするわ。桃香達も近くの部屋なのかしら?」

「あれ?私、桃香達が来てる事言ったっけ?」

「さぁ、どうかしら?」

「相変わらず恐ろしいほど鋭いんだから。すぐ近くよ。」

『華琳、最高よ。一刀のお陰で元通りみたいね♪』

こうして孫策に案内され、各自が部屋に到着した。

開催国到着（後書き）

お気づきの通り、物語の中で結構な時間が経ちました。

そして、天下一品武道会編に突入です。

部屋割

『どうして、こんな事に…』

苦笑いをしながらその光景を見る一刀が今、庭にいた。何故に一刀がこんな状態になったのかは話を少し遡らなければならない。

「華琳、そういえばね！！」

「どうかしたの？」

「実はね、部屋なんだけど…」

孫策が苦笑いを浮かべながら、曹操に手を合わせていた。

「部屋？私達が天下一品武道会の間、借りる部屋の事かしら？」

「そうなんだけど実は部屋がね。３人部屋が２つと２人部屋が３つしかなくて。えへっ♪」

「何がえへっ♪よ。全員で来ると言ってあった筈よね？」

「あははは。実は蜀の子達も全員で来ちゃったし…そうそう、今回の天下一品武道会は言わば三国の戦いみたいじゃない？だから呉の民だけじゃなく、魏や蜀の民までたくさん来てて部屋が…」

「アナタ、民を盾にしたわね？」

ギクッ！！

「冥琳に言ってこようかしら？」

「か，華琳、早まらないで！！ねっ♪」

踵を返した曹操の前に回り込むように孫策が立ちはだかった。しかし、曹操の表情は硬い。

「もう分かったわよ。単純に部屋を私が開放し過ぎました。」

ふてくされたように言う孫策に曹操の表情は益々硬くなっていた。

「ご，ごめんなさい。」

「そう、それで良いのよ。」

『華琳…天下一品武道会で覚悟しときなさいよ。』

「でも困ったわね。さっきのアナタの言った部屋数だと、1人余るわね。」

「一刀なら私の部屋で歓迎するわよ。」

「冗談♪一刀は魏の一員よ。」

「でも一刀は男の子じゃない。何日もの間、男女が同じ部屋なんて♪」

「たった今、その男の子を自分の部屋に招待しようとしたのはドコの誰かしら？」

「一刀は特別♪」

その瞬間、曹操・孫策の間を強い風が通り過ぎていった。そして話は戻り、曹操が部屋の事を話した結果、どういう部屋のメンバーにするかが庭で話されていた。

「華琳様、如何なさいますか？」

「私は誰とでも構わないわよ。というか、それは皆同じよね？」

曹操の問いに魏の将達は頷いていた。

「問題は1人余ると言う事。そして、一刀をどうするかという事。」

「俺はドコか外で寝るから、そしたら部屋も人数も丁度だし…」

「一刀、アナタは誰の物？」

話している最中の一刀に被せるように曹操が言った。全員の視線が一刀に注がれる。

「で，でも、異性が同じ部屋に何日も一緒は良くないだろ。」

「今更、何を言ってるのかしら？少なくとも、此処にいる皆は1度はアナタに身体を預けているでしょう？」

曹操の言葉に何人かは顔を赤くして俯いてしまっていた。

「では公平に一刀殿が1日毎に部屋を回ると言うのはどうでしょうか。華琳様。」

「稟、良い案ね。部屋は少し狭くなるかもですけれど、一日おきなら問題ないでしょう。一刀は良いわよね？」

「皆が良いなら、俺は構わないよ。」

一刀は言いながら1つの不安があった。それは痣の事である。これから暫く魏の皆と寝食を伴にするという事は、それだけ痣を見られる可能性が高まると言う事に繋がるからである。

こうして部屋は…

・2人部屋
曹操・ジュンイク
夏候惇・張遼
郭嘉・テイリツ

・3人部屋
夏候淵・許緒・典韋
楽進・李典・于禁

という事になった。

「じゃあ、一刀にはコレをお願いしようかしら？」

曹操は目線をある物に向けた。

「運べと？」

ある物とは全員の荷物の山である。

「えぇ。アナタは大会に出ないんだし、良いわよね？」

曹操はゆっくりと腕を愛鎌の絶に伸ばそうとしていた。

「わ，分かったよ。」

こうして一刀は大きな荷物を持って姿を消した庭に魏の将だけが残った。

「私はこれから、蓮華の所に言って華佗の居場所を聞いてきます。」

曹操の口から華佗という言葉が出た瞬間に将達からは、さっきまでの部屋のメンバー決めの楽しい雰囲気は消えていた。誰もがあの会議を思い出してたに違いない。

「それと言わなくても分かってると思うけど、一刀の身体と行動には気を配るのよ。」

「自然にですよね。」

「凪、硬いで。」

「秋蘭、私は大丈夫だろうか？」

「姉者は…問題なかろう。」

「それと、春蘭!!霞!!」

「はっ!!」

「なんや?」

「霞、一刀がアナタ達の部屋を訪ねた時に春蘭と一刀の2人だけになるようにしてほしいの。というか、2人だけにした時に私を呼びに来てくれるかしら?」

「なるほどなぁ～」

「そして、春蘭…アナタは普通にしてなさい。」

「はぁ。」

夏候惇はイマイチ曹操の意図が読み取れていなかったが、それ以外の将には何となく理解できていた。痣を見ているのは唯一、夏候惇だけという事を。

「では、今日は各々ゆっくり休みなさい。くれぐれも呉・蜀の者には迷惑を掛けるんじゃないわよ?解散!!」

部屋割（後書き）

部屋割…学生時代を思い出します，笑

過去に立てたフラグを忘れず消化させていけるか不安です。

今から友達と居酒屋でガールズトークしてきます♪笑

乙女の心

「私に触れたら埋めるわよ。」

「本当に相変わらずだな、桂花。」

此処は曹操・ジュンイクの部屋、今日は一刀はこの部屋で過ごす事になっていた。曹操は孫権を訪ねているので部屋には居らず2人だけの状態である。

「それにしても、桂花。」

「何よ?」

「魏は大丈夫なのか?」

「当然じゃない。アンタが心配するまでもないわ。」

「そうだよな。そういえば…魏に今は敵っているのか?」

「敵?そんなものいないわよ。」

『敵が…いない。魏に迫る脅威って一体なんなんだ。もしかして本当に雪蓮達が…そんなまさか。』

「ちょっとアンタ?ねぇ!!バカ!!変態!!節操なし!!聞こえないの?…天の御遣い北郷一刀!!」

「あ，あぁ、ごめんごめん。少し考え事してて…」

「び，ビックリさせないでよ!!また倒れるかと思ったじゃない!!」

ジュンイクの顔は今にも泣きだしそうだった。頬を真っ赤に染めて興奮したような表情なのに眼には涙が溜まっているのが一刀にも直ぐに分かった。

「け，桂花…」

一刀はジュンイクの表情に何も言えなかった。

「し，心配させないでよね!!いきなり消えられでもしたら、華琳様が悲しむじゃない!!私はアンタが消えるのは大歓迎だけど、そうじゃない人達もたくさんいるんだから!!」

ジュンイクは一刀から目線を外し背を向けながらも怒っていた。一刀はそんなジュンイクを後ろから抱きしめた。

「ち，ちょっと!!触らないでって言ったんだけど。」

「桂花、ごめん。大丈夫、大丈夫だからそんな顔しないでくれよ。」

「あ，アンタ…」

ジュンイクは驚いた。表情は見えないが、泣いてると思わせるような寂しい声に…

「ね，ねぇ、どうしたのよ?」

「似て…たんだ。」

「似てた?」

「俺の見た母さんの最後の顔に…」

『一刀の母親。コイツからこんな事聞いたの初めてね。でもどうして…』

ジュンイクは何もせず、何も言わずにその場に立ち尽くしていた。
一刀も同様にそれ以上は何も言う事無く抱きしめていたのだが…

「あら、お邪魔だったかしら?」

「えっ!!」

「良いわよ。そのままで。」

声のする方を向けば、曹操が立っていた。

「か，華琳様これは!!」

「随分と静かだったから2人で出掛けたと思ったらこういう事だったのね。」

「ち，違うんです。コイツが勝手にって、アンタもいつまで抱きついてるのよ!!」

「一刀?どうしたの?」

2人が心配そうに見れば、一刀はジュンイクに寄りかかるように眠っていた。

「長旅で疲れたのね。それにしても桂花、一刀には触られても平気なのね。」

「そ，そんな事より華琳様、コイツを寝台に。」

「全く、魏の覇王の私と魏の最高軍師であるアナタに寝台に運んでもらうなんて感謝しなさいよね。」

2人は一刀を寝台に寝かせて椅子に座っていた。

「それで、何があったの?」

「そ，それが…」

「話したくないのかしら?」

「い，いえ。」

そして、ジュンイクは起こった事を詳しく曹操に話した。

「そう、敵…ね。」

「今の私達には敵なんていませんよね?」

「確かに戦乱の時のような大きな敵はいないわね。でも一刀はどうしてそんな事を言ったのかしら?確か風も一刀に五胡の事を聞かれ

たと言っていたけど…」

「私にも…」

「もしかしたら、一刀が再び来た理由と関係あるのかしら。それと一刀の母親…か。私はアナタよりも少しだけ長く一刀と一緒にいるけど、母親なんて初めて聞いたわ。」

「母親の最後の顔と言っていました。」

「…亡くなったのかしら。それとも、この世界に再び来る時に何か…考えても分からないわね。」

一方で…

「あれ、此処は?俺は一体?」

「はぁい、ダ~リン♪」

「アナタは…つまり此処は…」

「そう。夢の中よん♪ご主人様は魏から呉への長旅で疲れてて、桂花ちゃんに抱きついたまま眠っちゃったの。」

「そうだ、俺は桂花を抱きしめて。」

「あ~ん。桂花ちゃんズルイわん!!」

「…それで何の用ですか?敵が分かったんですか?」

「あーん、焦らないで。」

「もし、何か分かったのなら教えて下さい!!お願いします!!」

「やん素敵。ごめんねダーリン、私にも分からないのよぉん。」

「そう…ですか。とりあえず、他国に魏を脅かす程の敵はいないみたいです。」

「そうなると1番怪しいのは雪蓮ちゃんね。それか…」

「でも雪蓮がそんな…」

「用心に越した事はないでしょう?」

「それは…そうですけど。それに、それかって何ですか?」

「それは敵が人じゃないと言う事。」

「…人じゃない?」

「ご主人様に意味が分かるかしら?」

「天災や病気という事ですか?」

「あ~ん。ダ~リンやるじゃない♪」

「でも万が一、そんな事が原因なら俺は何も…」

「じゃあ、ダーリンは見捨てるの？」

「…見捨てません。皆で協力して切り抜けて見せます。」

「流石、私のご主人様ねぇい。実際に会って抱きしめたいわ～ん。」

「あの…そういえば俺の痣なんですけど、春蘭に見られたのって本当なんですか？」

「春蘭ちゃんにはバッチリ見られちゃったわん。それに今は皆知ってるわよ。」

「えっ？華琳達もですか？」

「勿論、そうよ。」

「ははは，ははは、何言ってるんですか！！そんなわけないじゃないですか！！春蘭だけならともかく、華琳も知ってるなら俺はきっと何か問いただされてる筈です！！」

「ご主人様は乙女心が何も分かってないわねぇい。皆、怖いのよ。」

「怖い？」

「そうよん。もしかしたら、前のようにダーリンが消えてしまうかもしれないから。」

「…」

「ご主人様は結果的に華琳ちゃん達に力を貸したから消えたのよん。

」

「でもそれは俺が自らした事で…」

「それが怖いと言ってるのダーリン！！」

「っ！！」

「もし痣の事を聞けば、ダーリンはきっと話してくれる。そんな事は分かっているの！！そうじゃなくて、ダーリンは包み隠さず話すから怖いの。」

「話すから…怖い。」

「勿論、ご主人様があの子達に話してはいけないのは、何か危険が迫っているという事だけよん。だからご主人様が痣の事を話そうが消える事はない。でも、あの子達はそんな事は知らないのよん。ご主人様に分かる？乙女の気持ちが。」

「…」

「だから、華琳ちゃん達からは何も言わない事に決めたの。」

「…そうだったのか。」

「思い当たる節があるでしょ？ダーリン♪」

「はい。あ，あの…アナタは話した方が良いと思いますか？全てを正直に話すべきだと…」

「それはご主人様が自分で決める事。彼女達を安心させる為だけが目的なら嘘を言うのも1つ。このままの状態でご主人様が良いならそれも1つ。全てを打ち明ける事もまた1つ。」

「嘘…苦手なんです。」

「ダーリンはそうね♪」

「でも、もし本当の事を話したら…」

「怖い？」

「はい。俺の過去は…」

「ストップよん♪」

「えっ？」

「それは私が聞くことではないわん。それに私だって痣の理由とかは何も知らないのよん。もし話すなら、最初に話すのは私じゃないわん。」

「…はい。」

「頑張ってね、マイだ～りん♪」

こうして一刀の夢での会話も終わりを告げた。

「惇ちゃ～ん。」

「どうした、霞？」

一刀が眠っている頃、隣の部屋では…

「少し飲み過ぎではないのか？」

「惇ちゃんもいらへん？」

大量の酒が机に並べられていた。

「私は、いらん。それよりも誰かと鍛練をだな。」

「今からかいな！！」

「絶対に天下一品武道会は勝たねばならん。」

「それは、一刀の為に？」

「あ，アイツは華琳様の所有物だ。他の国にやるわけにはいかん。それに…自分の名誉の為でもある。」

夏候惇は握り拳を開いたり閉じたりしていた。

「ニシシ。惇ちゃんらしいな。ウチは一刀の為だけに気張るだけや！！」

「勝つぞ、霞。」

「任せとき！！ただ今回はキツイかもしれへんな。」

「なんだと！！」

夏候惇は張遼を睨みつけた。

「違うで惇ちゃん。ウチも他国に負ける気はないんやけど自国がな。」

「そういう事か。確かにな。」

「季衣・流琉・凪の成長は見てて惚れ惚れするわぁ～」

「うむ。あの3人は本当に成長した。だが私も負けん。」

「相変わらず、負けず嫌いやなぁ～」

「う，うるさいぞ。」

その隣の部屋では同時刻

「お兄さんは何をしてますかね～」

「華琳様と話でもしてるんじゃないですか？」

寝台で寝そべるテイイクと椅子に座り本を読む郭嘉がいた。

「暇ですね～」

「仕方ないでしょう。」

「華琳様の部屋にお邪魔しに行きませんか～」

「一刀殿ならそのうち私達の部屋にも来るでしょう。」

「どうします～お兄さんと華琳様、それと桂花ちゃんとで変な事をしていたら。」

「へ，変な事と言うのは？」

郭嘉の持つ本のページは既にめくられていなかった。

「それは風の口からは恥ずかしくて言えませんねぇ～」

「恥ずかしい事…」

『一刀殿と華琳様が寝台で…あ～』

「稟ちゃん、呉から借りてる部屋の中で流血はダメですよぉ～」

「ふ，風が変な事を言うから！！そういえば…」

「どうしましたか～」

「その，こういう事を聞くのはアレなのですが、帰ってきた一刀殿とその…風は閨を伴に過ごしましたか？」

「…いいえ～」

「そう…ですか。」

「どうしましたか、稟ちゃん？」

「いえ、私だけならともかく風とも閨を伴にしていないなんて…少し不自然に感じました。一刀殿が来られて結構経ちましたよね？」

「そうですねぇ～。飽きられちゃいましたかね～」

「風！！」

「分かってます。お兄さんはそんな人ではありません。恐らく、身体と関係があるんじゃないでしょうか？」

「本当に病気などではないと良いのですが…」

「季衣・流琉、何をしているんだ？」

「いつも寝る前にはこれを。」

「今日は勝つよ！！」

その頃、また隣の部屋では許緒・典韋が胡坐をして眼を閉じて奇妙な事をしていた。

「流琉、教えてくれないか？」

「秋蘭様、これは頭の中で鍛錬をしてるんです。」

「頭の中で？」

「毎日のように流琉と仕合をしていたら、静かに眼を瞑っただけで頭の中にも流琉が出て来ちゃって♪」

「でもこれは春蘭様・秋蘭様に比べたら大した事ではありません。

「姉者と私？どういう意味だ？」

「戦乱の時の戦いの時っていつも春蘭様がその…」

「突っ込んでいたな。」

夏候淵が笑みを浮かべていた。

「そうなんですけど、その動きを分かってるように上手く軍を動かすのが秋蘭様じゃないですか。そして、それに呼応するように春蘭様も。」

「でも姉者は姉妹だし、どこか私にも感じるところがあるのだろう。しかし、お前達は違うだろう？それはとても凄い事だぞ。」

「「ありがとうございます。」」

『本当に成長したな季衣・流琉。』

そして隣の部屋では楽進が腕立てをしており、李典・沙和は雑談をしていた。

「凪ちゃん、頑張り過ぎなの。」

「お前達は頑張らないのか？」

「そりゃ、隊長が他の国に行くのはイヤやけど…なぁ。」

「ねーなの。だって恋様とかにはどうせ勝てるわけないのなの。」

「それは私も同じだ。でも私が頑張って恋様の体力を少しでも削れれば春蘭様・秋蘭様が倒してくれるかもしれないいだろう？それに鍛錬もしてきたんだ。」

「言われてみればそうやな。」

「頑張るのなの！！」

「あぁ、隊長を他の国には渡しはしない！！」

こうして各々の呉での1日目が終わった。

乙女の心（後書き）

さって少し長めな最新話を投稿してみました。

どうでしょうか？

作者は結構ドキドキです。

夢の中のあの人に今回は頑張ってもらいました，笑

それと稟…笑

斜め上の再会と決めた覚悟

『一体、俺は…どうしたい？』

起きてから心の中で同じ事を何度も考えてる、一刀。

『何もかも話した方が…でも、それは華琳達を悲しませるだけなんじゃないのか？』

時間はまだ日も昇っていない時間、目覚めた一刀は無意識の世界で話した事を思い出していた。

『それに俺は皆にそんな事を話したくない。でも…嘘だってつきたくない。じゃあ、このまま言わないのか一刀？皆が俺に遠慮して何も言わない…いや、遠慮なんかじゃない。俺が怖いんだ。でも俺の腕がこんな風になった理由は…』

一刀は喉まで出かかっていた。『この世界に来たから』という言葉が…この言葉はつまり、この世界を否定する事に繋がる。一刀の人生がこの世界に来た事で変わったのは間違いない。もし、この世界に来る事が無ければ普通な生活を過ごしていたのは間違いない。少なくても親との絶縁や腕の痣が出来る事など無かっただろう。

『俺は華琳達を目の前にして言えるのか？…言えるわけがない！！』

ダンッ！！

一刀は床に拳を叩きつけた。

「やべっ…ふぅ、良かった。」

勿論、一刀の寝てる部屋には曹操・ジュンイクも眠っていた。恐らくジュンイクの策だろうか…一刀の眠る位置とは全くの逆側で静かに2人とも眠っている。

『少し…出るか。』

一刀は頭を冷やす為に静かに部屋の外に出て行った。

「…何が良かったよ。桂花、起きてるんでしょう?」

「はい。」

一刀が部屋を出た後、2つの影が動いていた。勿論、それは曹操・ジュンイクである。

「急にどうしたのかしらね?」

「私にはあのバカが何を考えてるのか分かりません。」

「少なくとも何か悩んでいるんでしょうね。私達には言えない事に…」

「華琳様…」

曹操の寂しそうな表情にジュンイクは只寄り添っていた。

「まだ、暗いな。」

一刀は部屋を出て近くにある柱に背を預けていた。すると…

「久しぶりじゃな、魏の客将よ。背が伸びたようじゃな。」

こんな時間にも関わらず話し掛けられた事に一刀は驚き、声のする方に身体を向けた。

「えっ!!あっ!!アナタは!!」

なんと、一刀の前に姿を現したのは赤壁の戦いで一刀は死んだと思っていた黄蓋であった。因みに真名は祭

「い，生きてられたんですか?」

「何を言っておるんだ孺子は。儂はこうして目の前におるではないか。」

「あの…赤壁で秋蘭に…」

「はっはっはっ。確かに死の淵を彷徨いはしたが、生きておる。また見せてやろうか?」

「えっ?」

黄蓋は自分の胸元を指さし、一刀に微笑みかけた。

「いっ，いえっ!!結構ですから、止めて下さい!!」

黄蓋は過去に一度だけ、一刀だけではなく一刀を含めた魏の面々の前で胸元を広げた事があった。

「変わったのは体格だけのようじゃの。」

「えっ…はい。」

一刀は内心ドキっとしていた。その体格の意味に…

「あの…黄蓋さんが生きている事は？」

「皆が知っておるに決まっておるじゃろう。」

「そ，そうだったんですかぁ。」

大きな溜め息を吐くように一刀は一呼吸ついていた。

「どうしてこんな時間に？」

「冥琳から聞いたぞ。孺子、知っておったのじゃな。赤壁での我らの策を。」

「はい。知ってました。」

一刀は真剣な眼差しで答えた。例え黄蓋にどんな顔・事をされようと決意し。

「ふむ。どうやら本当に知っておったようじゃな。しかし、あそこまで完璧に対処されるとは。」

「それは、知っていたからで…」

「その知識を知っているのと使うのでは訳が違うのだぞ、孺子よ。本当に華琳殿を始め、魏の者達に信頼されてたからこそあのような対処が出来たのじゃぞ。」

一刀は改めて赤壁での戦いを思い出していた。

「確か北郷だったか？」

「は，はいっ。」

「儂の真名は祭じゃ。今度から祭と呼んでくれて構わんぞ。私は一度、北郷に負けておるからな。」

「そ，そんな事は…」

「本人が良いと言ってるのだから黙って受け取らんか！！」

「は，はいっ。」

「それで良い。そういえばどうしてこんな時間にとか言っておったな。」

「はい。」

「少し前に帰って来たのじゃ。」

「何処かに行かれていたんですか？」

「三国の中を旅していたのだ。魏の娘達も一緒にの。」

「娘達？もしかして…天和達ですか！！」

天和とは張角の真名であり、三姉妹の長女である。次女は張宝で真名は地和・三女は張梁で真名は人和

「そうじゃが、まったくあやつらときたら…どうした北郷？」

「いえっ…そうですか、天和達も建業に。でも、どうして天和達と旅を？」

一刀は内心とても喜んでいた。ずっと気掛かりだったが、あえて言わなかったその子達が今同じ場所にいる事に。

「北郷よ、お前が原因なのじゃぞ。あやつらときたら、お前が消えたと知ったら声が出ないだのもう歌わないだと華琳殿を困らせたようじゃぞ。」

「あいつら…」

一刀は怒っているのではなく、苦笑いを溢していた。

「そこで療養をしておった儂が軽い鍛練がてら護衛を引き受け、あやつらと旅をしておったというわけじゃ。」

「あの…つまり天和達は何の為に旅を？」

「華琳殿に追い出されたようじゃぞ。」

「追い出しただって！！」

「まぁ、聞け！！それは表向きなだけで、あやつらを想っての事であった。詳しい事はあやつらに直接聞けば良かろう。それで儂が今、建業にいるのは天下一品武道会に出る為じゃ。」

「えっ？身体は大丈夫なんですか？」

「儂は前大会では2番目じゃぞ。策殿には負けてしまったが、今年は負けん！！それに、あやつらには天下一品武道会で仕事がある。だから、天下一品武道会には必ず戻ってくるように旅をしとったわけじゃ。しかし、旅も今回で終わりじゃろうな。」

「そ，そうだったんですか。でも、どうして終わりなんですか？」

一刀は黄蓋の恐ろしさに唾を飲んだ。

「北郷、お前が帰ってきたからじゃよ。風の噂で天の御遣いが再び魏に舞い降りたと聞いてからときたら、あやつらも今までとは別人のように変わりおって。」

「なんだか、すいません。」

「なぁ～に、儂もそろそろ落ち着きたいと思っていたところだ。それに今回の開催は我が呉の建業、丁度良かったわい。そういえば北郷はこんな時間に何をしておったのだ？儂は自室で一眠りしようとな。」

黄蓋との長話で既に外は明るくなり始めていた。

「俺は…ちょっと厠に。」

「そうだったか。随分と長話に付き合わせてしまったな。」

「いいえ。」

「では、儂は行くかの。あ…あやつらは北郷に会うのを凄く楽しみにしておる。後で会いに行ってやってくれんか？」

「分かりました。」

黄蓋は一刀に背を向けたまま手を上げ、去っていった。

「信頼か…」

一刀は黄蓋とたくさん話した中で赤壁での話を思い出していた。

『俺が魏の皆に信頼されてる…か。俺はそのみんなに嘘をつこうと…本当にそれで良いのか、一刀？』

一刀は大きく深く深呼吸してから、部屋に戻った。

斜め上の再会と決めた覚悟（後書き）

さて、とうとう祭様に初登場して貰いました。

キャラ崩壊してたら申し訳ありません。

さて、祭様の登場で少し駄文を…

私もこのサイトや違うサイトで恋姫の小説を数本…数十本読んでますが、魏√の一刀って呉に凄く嫌われてるパターンが多いんですよね。

それは勿論、祭様が一刀の知識によって死んだり重症という事なんですけど…私の祭様は一刀を認めた祭様にしてみました♪

という只の報告のような駄文でした，笑

次も楽しみ！！と思われた皆様は更新をお待ち下さい（●＾ｏ＾●）

準備と三姉妹（天和・地和・人和

『行くか！！』

一刀は心の中で何かを決めたように部屋を出た。時間はまだ早朝、外には軽く霧が掛かっていた。

「一刀、こんな早くからどうしたのかしら？」

「後を付けさせますか？」

「いいわ。好きにさせときましょう。」

「分かりました。」

一刀が部屋を出て行く音に曹操・ジュンイクは目を覚ましていた。

「アナタ様は、確か…」

「北郷一刀です。孫権様にお会いしたいのですが、良いでしょうか？」

一刀は孫権の部屋の途中にある通路で呉の警備の兵と話していた。

「こんな朝早くに孫権様に？何か重大な事なのでしょうか？」

「俺にとってはとても重大な事なんだけど…」

「どうした？北郷。」

一刀が警備の兵と話す中で兵の後ろから、綺麗な女性が姿を見せた。

「周瑜様！！おはようございます。」

「あぁ、おはよう。私が北郷の話を聞こう。下がって良いぞ。」

「はいっ。」

「それで北郷、こんな朝早くにどうしたんだ？それにしても久しぶりだな。」

「おはよう、冥琳。実は部屋を貸してほしいんだけど良いかな？」

「部屋を？何に使うんだ？」

「実は…俺は魏の皆に大事な話をしなくちゃいけないんだ。そして、その話は皆以外には誰にも絶対に聞かせたくない話でそれで…」

「こんな朝早くから蓮華様を直接訪ねなければならないほどの重大な話というわけか。」

「呉の人は察しが良くて助かるよ。」

「事情は分かった。私から蓮華様に伝えておくとしよう。」

話を終えると周瑜は昼までは空いている魏全員が入れそうな部屋を教えてくれた。

『さてと…次はここだな。祭さんと一緒だったみたいだから、まだ寝てるかな？』

コンコンコン

「誰か起きてるか？」

一刀は決して大きい声ではなく少し控え目な声で語りかけた。

…

『3人とも寝てるみたいだな。話の前に1度会っておきたかったけど…』

一刀は反応が無い事に諦め、朝も早いという事でその場を立ち去ろうとした時だった。

ギィ

「んっ？」

ドアの開かれる音に一刀は後ろを振り返った。

「こんな朝早くから何か御用ですか？揮毫なら…」

目を摩りながら、1人の女の子がドアを開けた。

「やぁ、人和。起こしちゃったみたいだね。」

「か，一刀さん。本当に？」

「ただいま、人和。」

一刀は最高の笑顔で応えた。

「一刀さん！！」

張梁は言葉と同時に駆け出し、一刀の胸に飛び込んだ。

「一刀さん。一刀さん。」

「心配かけちゃったね。」

一刀は優しく包み込むように抱きしめた。張梁が顔をくつけた場所は直ぐに湿っぽくなっていた。

「ずっと私達の歌を後ろで聞いていてくれるって約束したのに。」

「…ごめん。」

「声も出なくなったんです。」

「…ごめん。」

「認めたくはありませんけど。」

「…ごめん。」

「あのぉ～」

突如聞こえた声に2人が顔を向ければ張角が立っていた。

「天和姉さんっ！！」

「私も一刀に抱きつきたいー！！」

言葉と同時に張角は既に走り始めていた。

「て，天和っ！！うわっ。」

「ね，姉さんっ！！」

一刀は飛び込んできた張角を受け止めきれず、3人は倒れこんだ。

「イテテテ、大丈夫か？2人とも。」

「私は大丈夫です。」

「お姉ちゃんも大丈夫だよ♪一刀。」

「んっ！！」

張角は倒れた一刀の唇を奪った。一刀は急な事に何も分からないまま、唇を奪われていた。

「ね，姉さんっ！！」

「一刀、おかえり。」

「た，ただいま。」

「ずっとこうしたかったんだよ。一刀が帰ってきたって聞いた時から。」

倒れている一刀に覆い被さるようにしていた張角の表情には笑顔の中に涙も見えた。

「俺もだよ。」

一刀はそんな張角の表情に無意識に今度は一刀から唇を重ねた。

「ありがとう、一刀♪」

「ちょっと姉さんっ！！それに一刀さんも！！」

「人和ちゃんも一緒にしたかった？」

「そ，そうじゃなくて。」

「天和、地和は寝てるのか？」

「きっと、起きてるよ。そしてきっと怒ってる。」

「怒ってる？」

「ちー姉さんは一番酷かったから…。」

「一刀が帰ってきて嬉しんだけど、それを素直に認めたくないんだ

よ。ちーちゃんは♪」

「ちょっと、入って良いかな？」

「私は構わないですけど。」

「お姉ちゃんも良いよ。」

「ココで待っててくれ。」

一刀は1人立って、張三姉妹の部屋に入っていった。

「地和、起きてるのか？」

一刀は明らかに1ヵ所だけ毛布の盛り上がってる場所に話かけた。

しかし、応答は無かった。

「寝てるのかな？実はさ、後で大切な話が魏の皆にあるんだ。それには必ず来てくれ…俺の為にも一所懸命に歌ってくれる地和を、長い間見てあげれなくて本当にごめんな。」

一刀は言い残して背を向けて歩き出そうとした時だった。

ガシッ

一刀の腕が強く握りしめられていた。

「地和。」

「どうして。どうして、ちぃに内緒でいなくなったの？どうして何

も言ってくれなかったの？一刀はちぃの事なんかどうでもいい女だったの？」

張宝は涙ながらに訴えていた。

「そんなわけないだろ！！俺だって消えたくて消えたわけじゃないんだ。それだけは…信じてくれ。」

「信じない。」

「えっ。」

「もう、絶対に離さないから。」

「じ，冗談だよね？」

「ちぃ、冗談嫌いなのよね。」

張宝の顔をみれば泣き顔の中には既に小悪魔のような笑みも見えた。

「ちぃ姉さん。あまり、一刀さんを虐めないでよ。」

「そうだよ、ちぃちゃん。それに一刀はお姉ちゃんのだもん。」

「天和・人和。」

「何を言ってるのよ、天和姉さん！！一刀は…」

「魏の物よ、姉さん達。そして…私達の世話係…ですよね？」

「人和…物って…」

「これから、いなかった分も世話して貰うんだから！！」

「一刀。お姉ちゃんが直ぐにまためろめろにしてあげるからね♪」

何だかんだで3人のペースに流された一刀はしばらく雑談をしてから部屋を出た。

準備と三姉妹（天和・地和・人和（後書き）

忙しい＋体調が悪くて更新が…

ごめんなさい。

張三姉妹、好きなんだけどイマイチ上手く会話が…

静かな部屋

『さてと、そろそろ来るかな。』

一刀はまだ誰もいない静かな部屋で1人座っていた。張姉妹の部屋を出た後にそれぞれの部屋を回り、此処に来てもらうように一刀は魏の皆に頼んでいた。

『皆…どんな顔するだろうな。この身体を見たら…俺の過去を知ったらどう思うんだろう。』

ガチャ

一刀が1人心の中で呟いていると部屋の扉が開く音が聞こえた。

「もう、いたのね。」

「華琳か。桂花は？」

「もう全員、外にいるわよ。」

「そっか。」

「みんな何かに勘付いてるわ。」

「だろうね。俺がみんなを1つの部屋に集める事なんて初めてだと思うしね。」

「あの子達も呼んだのね。」

「張三姉妹の事かな？」

「えぇ。」

「当然だよ。俺は、あの子達も好きだから。」

「堂々と言える事なのかしら？」

「申し訳ありません。」

「まぁ、流石は魏の種馬ね。」

「…」

「それ程に大事な話なのね。」

「あぁ。」

「アナタの話を聞く前に１つだけ教えてほしいの。」

曹操は一直線に一刀を見つめる。その目はいつもの力強い眼光ではなく、どこか怯えるような悲しい目だった。

「なんだい？」

「もし、私達がアナタの話を聞いても…アナタは…消えないのよね？消えるのが早まるという事は無いのよね？本当の事を教えて、一刀。」

曹操は一刀の前まで来てゆっくりと一刀の胸に頭を預けた。

「華琳…」

一刀はそんな曹操の両肩に手を置いて応えた。

「約束する。この話で俺が消えたり、消えるのが早まったりはしないよ。」

「本当に?」

「あぁ。絶対にだ。」

「もし、消えたら。」

「だから、大丈…」

「本当に消えたらどうするのよ!!残された私達はアナタに文句も言えないのよ!!」

曹操の激しい口調に一刀も思わず口を止めてしまった。

「華琳、信じてくれ。俺も…華琳を…皆を信じてるからこそ話をする気になったんだ。」

「一刀…」

一刀は曹操を静かに抱きしめた。

『一刀、アナタも怖いのね。』

曹操は抱きしめられた時に、一刀の背中に震えを感じた。

「信じるわ。」

「本当にありがとう。華琳。」

「でも、もしアナタの身体に異変が起こったなら私は絶対にアナタを許さない。」

「それでいいよ。」

「…バカ。じゃあ、皆を呼んでくるわ。」

「あぁ、頼む。」

曹操は部屋を出て魏の将達を呼びに行った。

「華琳様。」

「大丈夫よ、桂花。」

「北郷はなんと?」

「自分が消える事は絶対にない話らしいわ。」

「華琳様、それは本当に何でしょうか?」

「また、兄様は自分の身体なんて気にせず私達の為に何か言うんじゃ…」

「流琉…」

「華琳様、一刀さんは他に何か言ってませんでしたか？」

「自分を信じてほしいって。私達を信じてるから話したいそうよ。」

「お兄さんのその言葉が怖いんですよねぇ～」

「一刀はウチらの為なら何でもしてくれるやろうからな。」

「ちぃは聞くよ。」

「ちぃちゃん？」

「必ず聞いて欲しいって言ってたの。一刀は。」

「ちぃ姉さん。」

「私も隊長が話したいと言うなら聞くだけです。」

「凪ちゃん…でも、もし隊長が消えたらどうするのなの？」

「私は信じてる。隊長は絶対に嘘はつかないと。」

「私も聞くぞ！！」

「姉者…」

「あの…華琳様はどうなさるんですか？」

将達が様々に言い合う中、許緒が曹操に投げかけた。途端に将達の視線は曹操に向けられた。将達には分かっていた。前に一刀が消えた時に一番変わってしまったのは曹操だという事を…

「私は…聞くわよ。」

「華琳様は怖くないんですか？」

「本音を言えば勿論怖いわよ。でも怖いのは私達だけじゃない。一刀だって怖いのよ。」

「兄ちゃんも…」

「さて、一刀を長い時間待たせるのも気の毒だわ。アナタ達はどうしたいの？話を聞きたい者だけついてきなさい。」

曹操は言うと踵を返し、再び一刀の待つ部屋に向かった。

ガチャ

「来たかな。」

開かれた扉に一刀は視線を向けていた。

「全員、来てくれたみたいだな。」

「えぇ。」

部屋には曹操を含め、魏の将達が全員来ていた。そして、恐らく一刀・曹操を含めた全員が恐ろしい緊張に襲われていたに違いない。

「皆、急にごめんね。俺なんかの為に集まってもらって。」

一刀は申し訳なさそうに笑顔を溢した。

「でも、どうしても皆に伝えないといけない事があるんだ。」

ゴクっ

唾を飲む音までが聞こえるほど部屋は静まりかえっていた。

「これを…見てほしいんだ。」

一刀は言いながら、制服の上着に手を掛けて上半身を魏の皆に曝した。

「か，一刀…」

その曝された一刀の身体に曹操までが思わず声を漏らしていた。一刀の両腕の内側はドス黒く、身体は白く痩せて肋までが浮き出ていた。

「春蘭は2度目…だよね?」

「あ，あぁ。北郷、大丈夫なのか?」

一度は見た一刀の身体とはいえ、夏候惇も呆気にとられていた。

「皆も春蘭から聞いて知っていたんだろ？」

「姉者から聞いてはいたが、北郷、お前は…」

「ちょっと！！ちぃは何も聞いてないわよ！！何なのよ！！その腕にその身体は！！」

「ち，ちぃちゃん。落ち着いて。」

「天和達には知らせてなかったんだね。」

「変な心配をさせたくなかったのよ。それで、その身体は一体…どうしたというのよ。」

「その前に…風。怒鳴ってごめんね。」

「その身体が原因だったんですねぇ～」

「あの時はどうしても…見せたくなかったんだ。」

「隊長…その腕の色は…」

「凪、大丈夫だよ。」

楽進の眼には既に多くの涙が溢れていた。一刀はそんな凪に笑顔を向けてから上着を羽織った。

「さて、何から話そうかな。」

『あははは。改めて皆を前にしたら何をどう話して良いか分からなくなっちゃったな。』

「一刀？」

「ごめん。どう話したら良いか分からなくなった。」

一刀は苦笑いを浮かべながら、頭を掻くような動作をしていた。しかし、曹操を含めた将達は誰1人笑うのでもなく文句を言うのでもなく黙っていた。

「じゃあ、私達が色々聞いて良いかしら？」

「あぁ。」

静かな部屋（後書き）

お久しぶりになりました。

体調が完璧じゃないせいか、文章作成力が大変な状態に…

罰

一刀は過去を打ち明ける為に…全てを話す為に魏の皆を集めたにも関わらず急に話す事を戸惑い、曹操を含めた将達が一刀に質問する事になった。

「一刀、質問の前に私がさっき言った事を覚えてるかしら？」

「絶対に俺が消えたり、消えるのが早まるような事は絶対に言わない…だろ？」

「そうよ。それが私達の命に関係する事でもよ。」

「え…命？華琳。俺はそんな約束はしてないぞ！！」

「じゃあ今、この子達の前で誓いなさい。」

「俺は…」

『華琳。俺は君を…皆を守るために来たんだ。もし、俺が危険が迫ってる事を皆に伝える事で皆が助かるなら…俺は…』

「華琳…それは約束できない。」

「…私に意見するの？」

「俺は…やっぱり出来ないや。もう俺には…君達しかいないから。」

その時の一刀の悲しい笑顔を忘れる人はいないだろう。笑顔でありながら、涙が頬を伝っていた。

「一刀。」
「北郷。」
「バカじゃないの？」
「兄ちゃん。」
「隊長。」
「お兄さん。」
「兄様。」

そんな一刀の表情に多くの将達にも涙が見えた。

「…一刀。」

『私は只、アナタにもう二度と会えないのはイヤなだけなのにアナタという人は…』

「アンタ！！種馬のクセして華琳様に逆らってるんじゃないわよ！！華琳様はアンタの為に言って下さってる事が分からないの？」

一刀・曹操だけが会話をする中、ジュンイクが口を開いた。

「そんな事は分かってるさ。」

一刀は涙を拭った。

「だったら、黙ってなさいよ！！」

「そんな事、出来るわけないだろ！！華琳が…桂花が万が一にも命

の危機に関わる事があって、俺が何かを伝えるだけで桂花が助かるなら俺は消えても構わない！！」

「ば，バカじゃないの！！良いわけ無いでしょ！！」

「だったら桂花は俺が、華琳に知っている事を伝えなくて結果…華琳が死んでも良いって言うのか？」

「そ，そんなの良いわけがないじゃない！！ふざけた事言わないでよ…あ，アンタ。」

「俺も同じさ。桂花がそれぐらい華琳を想っているように、俺は魏の皆を想ってる。勿論、桂花の事も。」

「へ，変態のクセに何を言ってるのよ！！私はアンタなんか…別に…」

「一刀、今すぐアナタ消える事は無いのよね？」

「いや…無くは無いんだ。」

「えっ…」

曹操を含めた誰もが驚いていた。

「俺が此処に来たのには意味があるんだ。その意味を皆に話した時は…俺は消える。」

「やっぱり、お兄さんには何か目的があるんですね～」

「一刀殿、とりあえず上着を着て下さい。私には…」

「あぁ、ごめん。稟。」

「それで、北郷…その腕に身体はどしたのだ?病気を患っているのか?」

「秋蘭。大丈夫だよ。病気ではないんだ。」

一刀は服の上から腕に触れていた。

「だ,だったら、その腕の痣は何なのだ?」

「これは…俺が嘘をついた罰さ。」

「嘘?隊長は嘘をついたのですか?」

「俺は何一つ嘘なんてついてないさ。只、誰にも信じてもらえなくてね。」

「一刀さんが誰にも信じてもらえないなんて…」

「俺がこの世界にいたという事を向こうの世界では証明する事が出来なくてね。」

「兄ちゃん、その腕…痛くないの?」

「これかい?痛みはないんだけど、実は両腕とも麻痺が残ってて何も感じない時があるんだ。」

一刀は腕を軽く抓ったり、叩く仕草を見せていた。曹操は将達が質問を投げかける中、黙って一刀を見ていた。

「兄ちゃん…治るんだよね？」

「難しいかもしれないなぁ。でも大丈夫だよ。生活に支障はないしさ。」

「なんで！！誰も一刀を信じないのよ！！本当に一刀はいたじゃない！！」

張宝が憤りを示していた。

「何もこの世界にいた事を示すモノがなかったんだ。時間も俺がこっちの世界に来る前に戻ってたし、口で信じてもらうしかなくてね。」

「何よ！！言ってやれば良いじゃない！！一刀はこの地和と寝たって…」

「ちぃちゃん…」

「隊長、身体が痩せてるのも罰が原因なの？」

「多分、そうだと思う。いくら食べても太らないんだ。肌の色もなんだか戻らないし。」

「一刀殿、眠りが浅くなったのも罰とやらですか？」

「そんな事まで見られていたんだね。」

「どうなんですか？」

「多分、罰と言うより俺の行動に原因があったんだと思う。自業自得だよ。」

「そう…ですか。」

「あの…兄様、その腕の痣は消えるのですか？」

「これも難しいかもしれないな。」

「隊長、その痣ってどうやって出来たんや？」

「これは…」

「無理に話さなくて良いわ！！」

「華琳…ごめん。」

「もう…良いわ。これ以上は個人で聞くように。」

『もう聞いてられないわよ。』

「「はっ！！」」

「私はこれから天下一品武道会の抽選に行ってくるわ。一刀、アナタも来なさい。」

「あ，あぁ」

急に話を終わらせた曹操に一刀を含めた全員が戸惑っていた。

罰（後書き）

お久しぶりです。

なんとも皆様には消化不良な話になってしまったかもしれないですね。

誰が話してるかは皆様の想像力を，笑

この時の華琳様の心情を考えると…かわいそうだぁ（＜＿＞）

始まった抽選

「華琳。」

「…」

『怒ってるのかな?』

曹操・一刀は今、天下一品武道会の組み合わせ抽選をする部屋へと向かっていた。

「華琳様…」

「と，とりあえず北郷は病気じゃないようだな、秋蘭。」

「姉者…北郷の話の意味が分かったか?」

「な，なんとなくは分かったぞ。」

「霞、お前なら分かっただろう?」

「当然や…辛いな。ウチらも一刀も。」

「秋蘭様…私…」

「流琉が心配する事は何もない。私もだからな。」

「それよりも、華琳様の方が心配ですね～」

「天下一品武道会に影響が出ないと良いですが…」

「華琳様、隊長…」

武将達はまだ部屋に留まっていた。一刀の発言の裏に気付いた者・何も気付かなかった者、それぞれが思い思いに考えていた。

「おい、華琳ったら！！」

曹操に命じられ、付いて行く一刀は何も言わない曹操の腕を掴んだ。

「なによ！！」

腕を掴まれた曹操は一刀を睨みつけた。

「華琳、怒ってるよな？」

「別に、怒って無いわよ。」

「怒ってるじ…ゴホッゴホッ！！」

一刀が話してる時だった。予想外の辛さに一刀は直ぐに自分の手を口に当てた。

「か，一刀、大丈夫？」

「だ，大丈夫だよ。急になんだか込み上げて…」

一刀は言いながら口に当てた手を曹操に見えないように後ろに隠した。しかし、曹操は見逃さなかった。

「手…見せてくれるかしら。」

「え…どうして？」

「良いから、見せなさい！！」

「か，華琳。」

曹操は強引に一刀の腕を掴み手の平を見た。

「アナタ…私達…私に嘘をついたの？」

「つ，ついてないよ。」

「じゃあ、コレは何なのよ！！」

「分からない。」

「どうみても血よね？病気じゃないって言ったじゃない！！」

「本当に今初めて出たんだ。」

曹操は先程の表情と違い、むしろオドオドしているようだった。

「もしかして…私達に痣の事を話したからなんじゃ。」

「その心配はないと思うけど…」

『俺の消える条件を言ったのは不味かったかな。それで身体に影響が…』

「一刀。」

「華琳？」

1人考え込む一刀に曹操が頭を一刀の胸に圧しつけた。

「お願い。もう何も言わないで。私は知らなくて良い！！何も知らなくて良いから！！もう…消えないで、一刀。」

一刀は何も言わず曹操を優しく抱きしめた。

「呉でも見せつけてくれるわね～華琳・一刀♪」

「「！！」」

後ろから突如聞こえた声に2人は咄嗟に離れた。

「あ，あら雪蓮。アナタが抽選に？」

「ふふふ♪顔を赤くしちゃって華琳もやっぱり乙女なのね。」

「う，うるさいわよ。」

「一刀も久しぶり♪元気してた？」

「あぁ、雪蓮も元気そうだね。冥琳も。」

「私がいるんだもん。冥琳は元気に決まってるじゃない♪」

「北郷。」

周瑜が一刀を軽く手招きするような仕草をしていた。

「どうしたの？」

「アレの発作を見たんだろ？」

曹操・孫策が何か雑談をしてる中、一刀・周瑜も静かに話していた。

「雪蓮の？」

「あぁ、大丈夫だったか？」

「なんとか…ね。」

『俺の理性が危なかったけど。』

「何もされなかったのか？」

「…」

「すまん。」

「良いんだ。むしろ、雪蓮が俺でしか止められないって言ってくれて嬉しかったぐらいさ。」

「北郷…雪蓮と寝たのか？」

「…口づけだけ、強引にされたよ。」

「口づけだけだったのか！！」

「め，冥琳、声が大きいよ。」

「ゴホンッ。すまん。しかし、よく逃げれたな。雪蓮は魅力的じゃなかったか？」

「そ，そんなわけないさ！！」

「声が大きいぞ。」

「すいません。」

「只の種馬ではないようだな。」

「冥琳・一刀！！行くわよ♪」

「分かった。」

「今、行くよ。」

「冥琳、とりあえず今の話は魏の皆には内緒にしてくれよ。」

「あぁ。」

そして、一刀・曹操・孫策・周瑜は抽選の行う部屋に向かった。

「あっ雪蓮様、冥琳様ー」

「隠、1人で準備をさせてすまなかったな。」

「いえいえー。桃香さん、愛紗さんが手伝ってくれたので助かりましたー」

「桃香・愛紗、ありがとうね♪」

「良いんですよ。少し早く来ちゃいましたから。」

「桃香、久しいわね。」

「華琳さん、お久しぶりです。」

「アナタは相変わらずのようね。」

「ふぇ？」

「愛紗は相変わらず綺麗な黒髪ね。」

「あ，ありがとうございます。」

「華琳さん、その方が…」

「そういえばアナタ達は初めてね。」

曹操が一刀をチラっと見た。

『自己紹介しろって事だよな？』

「俺は北郷一刀。真名はありません。天の御遣いとか呼ばれてるけど、只の男です。あっ、北郷か一刀と気軽に呼んで下さい。」

「ふふふ♪」

孫策の静かな笑いが聞こえた。

「何度か戦いの時に見た面影が残ってますね。私は劉備元徳。真名は桃香です。良かったら桃香と呼んで下さいね。」

「私は関羽雲長。真名は愛紗だ。御遣い様も良かったら愛紗とお呼び下さい。」

「あの…真名を良いのかい？真名は本当に大切な名前なんだろ？」

「恋ちゃんから良い人って聞いてますし、三国同盟なんですから遠慮はいりません。」

「じ，じゃあ呼ばせてもらうよ。」

「本当に一国の主なのかしら？」

「残念ながら。」

曹操の軽い嫌味に劉備は舌を出して反論していた。

パンパンパン

雑談を交わしている中で、誰かの手を叩く音が響いた。

「これより、天下一品武道会の抽選会を始める。雪蓮・華琳殿・桃香は前へ」

周瑜の宣言により抽選会が始まった。抽選会と言っても只のクジ引きである。

「あの…愛紗さん？」

一刀は近くに立つ、関羽に声を掛けていた。

「どうしましたか、御遣い様？」

『御遣い様って…とりあえず今は後だ。』

「この抽選って1回戦から同じ国同士が戦う可能性は…」

「ありますよ。」

「やっぱり。」

「天下一品武道会は個人の武を競うもの。国など関係ありませんから。」

「ではまずは開催国である我が国、呉の雪蓮から取ってくれ。」

「はいは～い。」

周瑜の前の机の上には大量の紙が並べられており、孫策はその中の1枚を手にした。

「え～っと仲謀は…弐!!」

孫策が言うと陸遜が弐と書かれている場所に孫権と名前を書いていた。

「なるほど。アレで表を埋めていくのか。」

「そうですよ。次は魏の番です。」

「では次に華琳殿、頼む。」

「えぇ…曹操孟徳、壱拾七。」

「えっ!!」

横にいる劉備は驚いていた。

「華琳さん、出るんですか?」

「あら、おかしいかしら?」

「あっ…いえ。」

「雪蓮、お前知っていたな。」

「私が先に手紙で宣言していたものね。」

「華琳と殺るの楽しみぃ～♪」

「御遣い様、華琳殿も出られるので？」

「はい。本人の意思です。」

「華琳殿が出られるのは初めてですね。」

「みたいですね。」

「では次に桃香。」

「はい！！え～っと…コレ！！関羽雲長、壱拾壱です。」

「壱拾弐にならないかなぁ～♪」

「雪蓮、落ち着け。」

「愛紗ちゃ～ん。壱拾弐だって～。」

劉備が振り返り手を上げていた。そんな劉備に関羽は軽く笑顔で会釈した。

「愛紗さん、決まりましたね。」

「えぇ。」

こうして、順番に曹操・孫策・劉備の手により紙は取られて表にはびっしりと各国の将達の名前が書き込まれていた。そして、その場にいた全員で表を眺めていた。

「凄い事になりましたねー」

「あ～楽しみだわ♪」

「雪蓮、死者は出すなよ。」

「愛紗ちゃん、頑張ってね。」

「任せて下さい…しかし、相手が…」

「華琳、この表を見ての感想は？」

「一刀、アナタは何も心配いらないわ。」

始まった抽選（後書き）

次回は対戦表やルールなどで終わる可能性があります。

それにしてもこの小説…終わるのかな?笑

開幕一日前（魏（前書き）

さてと、いよいよ天下一品武道会の開幕です。

その前に私の小説…皆様の恋姫の子達の想像力次第では誰が話してるか全く分からないかもしれません，笑

本当に今更ですがね。

では本編スタートです！！

開幕一日前（魏

抽選の行われた次の日の朝、ある一室に曹操・一刀を含めた魏の面々達が集まっていた。抽選の結果を知る為に。

「流琉、ボク…なんだか胸が熱いんだ。」

「私もよ。」

「さって、ウチの相手は誰やろ？」

「霞様、私だったらどうします？」

「凪と？全然良いで。」

「真桜ちゃん…」

「沙和、しっかりしぃ！！」

「姉者…」

「うん？」

「大丈夫か？」

「何がだ？」

「…いや何でもない。」

『ふっ。それでこそ姉者だ。』

「じゃあ桂花、見せて頂戴。」

「はいっ！！」

曹操の言葉により、桂花が紙を机の真ん中に置いた。

「どうして3枚なんだ？」

「風ちゃんも書きました～」

「私も書きましたよ。」

「私も書いたのよ！！」

「でも軍師の3人は抽選会には出てないよな。」

「私が口頭で言ったのを3人は書き記しただけよ。」

「…もしかして1回で？」

「当たり前じゃない。何で何回も言う必要があるのよ。」

『ひぇ～。昨日の抽選会での対戦表を一回で覚えた華琳も凄いけど、華琳の口頭を一発で書き記す3人も凄いな。』

一刀達が話す中、対戦表に目を通した武将達は…

「「！！」」

「か，華琳様が…」

「姉者、大丈夫か！！」

「どうしよう季衣。私、思春さんとだ。」

「流琉、ボクも星さんとだよ。」

「公孫賛？凪ぃ、これ誰だっけ？」

「？耶さん…か。」

「一回戦はあの悪戯っ子かいな。」

「紫苑さんって強いのなの？」

それぞれが各々に声を洩らしていた。

「抽選会の時も思ったんだけど、凄い数だよね。」

「今回は全ての武将が出てるわよ。」

「どうりで。そういえば、華琳は一回戦は誰とだっけ？」

「馬超よ。」

「馬超さんか。強敵なんじゃないか？」

「どうかしらね？」

曹操はニヤリと聞こえてきそうな不敵な笑みを浮かべた。

『そういえば俺…華琳があの鎌で本気で戦ってるの見た事無いな。』

「か，華琳様！！」

「あら、どうしたの春蘭？」

「私と華琳様の名前が直ぐ近くなのですが…」

「それがどうかしたのかしら？」

「その…つまり華琳様と私が一回戦を勝てば…」

「アナタと戦う事になるわね。」

「…」

「何を気にしているの？」

「私は華琳様とは…」

「黙りなさい春蘭！！」

「「！！」」

曹操の怒号とも言える声に一刀を含めた曹操以外全員が驚いていた。

「アナタは私に恥をかかせたいの？」

「そ，そのような事は…」

「夏候惇、お前は何の為に戦う？」

「…私は魏の強さを他国に見せつける為に戦います。」

「だったら、主君になど遠慮するな！！国とは民がいてこそ成り立つもの。主君がいるからではない。今回は雪蓮の仕業か、それとも景品のせいか我が魏・それに蜀からも多くの民が天下一品武道会を見に来ている。春蘭は相手が誰だろうと全力で当たり、魏の強さを見せてあげなさい！！」

「はっ！！」

「他の皆も同じよ。逃げるなどと将として情けない真似をするなら天下一品武道会に出なくて良いわよ？」

「民がいてこその国…か。」

「一刀？」

「俺が前に来た時に言われたのを思い出したよ。」

「そうだったかしらね。」

「兄ちゃん！！絶対に他国には渡さないからね。」

「兄様は魏の…私の大事な方ですから。」

「ウチが興味があるのは最強の称号だけや。」

「霞～！！」

「冗談や。最強のついでに一刀も渡さへんようにしちゃるわ。」

「頼むな。」

曹操の発言の後からだろうか…武将達からは何か硬さが取れたようだった。

「それにしても、一回戦目がいきなり姉妹対決とはね。」

「間違いなく、雪蓮が来るでしょう。」

「真桜、魏では最初に雪蓮様と戦う事になるかもしれないな。」

「凪、やめて～なぁ。考えないようにしとるんやから。」

「前回の決勝の祭との戦いは凄まじかったな。」

「祭殿の回復力にも驚いたが…」

「雪蓮様、恐かったのなの～」

「そういえば、祭は一回戦誰と？」

「華雄殿のようです…」

何故か華雄の名前を郭嘉が口に出した瞬間、部屋の中は静まりかえった。」

「…そういえば、祭の横…亞莎も出るのか？」

「呂蒙？」

「亞莎ちゃんも出るんだね。」

「私と同じで初めてね。」

「あんまり、強そうには見えんが…」

「姉者、見た目で判断するのは良くないぞ。」

「う，うむ。」

『亞莎…か。確か関羽を殺したのは…それに他のゲームやアニメでも呂蒙はかなり強かった筈。亞莎も相当に強いんだろうか。』

「そういえば天下一品武道会っていつからなんだ？」

「明日よ。」

「えぇ！！」

開幕一日前（魏（後書き）

さてと、では…後書きにてトーナメント表の発表をさせて頂きます。

読者様の頭の中でトーナメント表を想像して下さり、左から名前を入れてもらえば良いと思います，笑

孫策ー孫権
李典ー馬岱
典韋ー甘寧
夏侯淵ー文醜
張飛ー顔良
関羽ー呂布
孫尚香ー厳顔
楽進ー魏延

曹操ー馬超
周泰ー夏侯惇
于禁ー黄忠
張遼ー公孫賛
趙雲ー許緒
なしー孟獲
華雄ー黄蓋
呂蒙ーなし

見づらくて申し訳ないです。

コレが一回戦の組み合わせです。

トーナメント表を想像して下さると分かりやすいと思います。

皆様の好きな子が一回戦負けしたら…ごめんなさい，笑

開幕一日前（呉

魏の面々が何処かの一室に集まってる同時刻に玉座の間には呉の面々が集まっていた。

「全員揃ったかなぁ～♪」

「雪蓮、祭殿がまだだぞ。」

「あ～祭は別に良いわよ。」

パタン

孫策の言葉と同時に扉の前には黄蓋が立っていた。

「策殿、酷いではありませんか。」

「祭～！！」

黄蓋が孫策に笑みを溢しながら席に着こうとした時、孫尚香が久しぶりに会う黄蓋に飛びついていた。

「小蓮様、お久しぶりでございます。」

「おかえり、祭。」

孫尚香の言葉と同時に将達が軽く黄蓋に会釈をしていた。黄蓋はそんな将達に右手を上げて応えた。

「では、蓮華様。」

「あぁ、ではこれより天下一品武道会での組み合わせを発表する。と言っても今回の抽選に言ったのは私ではなく、姉様なのだがな。」

「隠。」

「はいー」

陸遜がゆらゆら大きな胸を揺らしながら組み合わせが書かれた紙を机の真ん中に置いた。

「ち，ちょっと姉様!!これはどういう事ですか!!私と姉様が一回戦って!!」

「あはは。ごめん♪」

全く悪びれる様子もなく孫策は笑っていた。

「あ～!!シャオ、桔梗さんとだ。」

「さて儂は誰とじゃ…華雄…あの猪小僧か。」

「流琉…か。」

「春蘭殿…強敵です。」

「あ，あの私には…いないのですが…」

「亞莎、それは一回戦目は戦わなくて良いという事だ。」

「はぁ。」

初めて出る呂蒙には周瑜の言う意味が良く分かっていなかった。

「亞莎。つまり一回戦は戦わないで勝ちと言う事だ。良かったな。」

「雪蓮様！！」

「は，はい！！」

途端の呂蒙の大きな声に孫策も思わず身震いを起こしていた。

「私のような初めて参加する者をこのような場所に選んで下さり、ありがとうございます。」

「別に私は適当に選んだだけだから、気にしなくて良いのよ。それよりも亞莎♪」

「はいっ！！」

「アナタの本気…祭に見せてあげなさい♪」

「えっ？」

「あー！！祭・亞莎が隣同士になってる～」

「な，なんじゃと！！」

黄蓋は紙を持って自分の場所と呂蒙の場所を確認した。

「策殿…ワザとですかな？」

「なんのことかなぁ～♪」

「わ，私が祭様と手合わせして頂けるなんて。」

「遠慮はいらないわよ。ねぇ～祭♪」

「と，当然じゃ。本気で来るが良い。」

「本気で…本気で…本気で…」

「あ，亞莎？大丈夫か？」

「蓮華様。私、天下一品武道会では軍師を忘れ昔の呂蒙で祭様に挑戦してみます。」

「あ，あぁ。」

「ふふふ♪あ～大変ね。」

「冥琳。」

孫権が周瑜にしか聞こえない声で静かに尋ねた。

「どうなさいましたか？蓮華様。」

「亞莎はそんなに腕が立つの？」

「蓮華様はご存知ないのですか？」

「何がだ？」

「亞莎に軍師の才能を見た目は確かですが、まだまだですね。」

「なっ！！」

「亞莎の仕合…楽しみになさって下さい。」

「…分かったわよ。待てば良いんでしょ。待てば。」

「どうしたの蓮華？」

「あ，いえ何でもありません。」

「明日はよろしくね♪」

「姉様。」

「何かな？」

「少しは手加減を…」

「…無理♪」

孫策の満面な笑みに孫権はガクッと肩を落とした。

「そういえば、皆分かってると思うけど今回は過去2回の天下一品

武道会とは違う。」

「天の御遣いですよね？姉様。」

「そうよ。勿論、優勝者には私が今持ってる最強の称号が手に入る。只、今まではそれと優勝者の願いが１つ叶えられていたけど今回は違うの。優勝者を含めた天下一品武道会で活躍した上位５名の中で一番多い国の願いが叶えられる…いわば、三国での国と国の対決よ。」

「今は呉が最強である事を他国に示す絶好の機会ですね。雪蓮様。」

「えぇ。そして、今回は偶然にも私達の呉と蜀の願いが重なったの♪」

「それが、一刀の事なんだね。お姉ちゃん。」

「そう、天の御遣いである北郷一刀を魏だけに留まらせるのではなく、呉・蜀にも派遣する事。」

「今でも北郷殿が魏を導いたと思っている民・将が多くいると言う事か。」

「でもそれだと魏は不利なんじゃありませんか？」

「亞莎…一刀の戻った魏は強いわよ。それに華琳も承諾してる事だしね♪」

「そういえば今回は華琳も出るのだな。」

「蓮華姉ちゃんじゃ、多分勝てないよ。」

「う，うるさいぞ小蓮。」

そんな2人が口喧嘩をしている最中、周瑜は孫策を何も言わず見つめていた。いつか孫策が言っていた魏と本当に戦うかもしれないと言っていた事を思い出しながら…

開幕一日前（呉（後書き）

…亞莎に力を入れ過ぎたか…まぁ、いっか♪笑

次は蜀ですよ～（●＾ｏ＾●）

開幕一日前（蜀

抽選日の朝、魏・呉のように蜀の面々もある一室に集まっていた。

「朱里ちゃん、みんないるかな？」

「はい、大丈夫ですよ。」

「じゃあ、みんな揃ったので今から明日からの天下一品武道会の組み合わせを発表しまーす。」

「待ってたのだぁ！！」

そう劉備が述べると諸葛亮・鳳統が同じ大きさの紙を持って武将達に見えるように掲げた。そして、諸葛亮の持つ紙を一番最初に覗きこんだのは張飛である。

「愛紗の一回戦が恋となのだぁー！！」

その大きな声に、既に知っていた関羽は苦笑いを漏らしていた。張飛が諸葛亮の紙を覗き見る中、鳳統の持つ紙を趙雲が眺めていた。

「なんと…フムフム…これはこれは。」

「おいっ！！星、何を考えている？」

「いやぁ～いよいよ私の時代が来たかなと。」

「星!!言っとくけど、今回の天下一品武道会の最強はアタシのもんだぜ!!」

「お姉様、そんな事言って1回戦で負けたりして～」

「うるさいぞ、蒲公英。そういえばお前の一回戦の相手は誰なんだ？」

「真桜ちゃんだし、きっと勝てるよ。」

「そういう油断が命取りになるんだ。」

「脳筋は黙っててよ。」

「貴様…殺す。」

「アンタ何かには一生殺されないもん。」

ゴンッ!!

突如、口喧嘩を始める2人の頭に拳が振り下ろされた。

「いったぁ～い!!」

「ぐぅ!!」

「お前達ときたら、場所をわきまえんか!!全く。」

「き，桔梗様っ。」

「え～ん。お姉様、桔梗に殴られたよ～」

「お前が悪い。」

「それで、わしは誰とだ?」

厳顔は言いながら鳳統の持つ紙を覗きこんだ。

「孫尚香?祭のところの小娘か。これまた随分と歯ごたえの無い…」

「あら桔梗、その隣の組み合わせを見てみたらどうかしら?」

「隣だと?」

厳顔と一緒に諸葛亮の紙を見ていた黄忠が投げ掛けた。

「お!!?耶がいるでないか!!?耶ぁ!!」

「はいっ!!」

「お前と戦うのを楽しみにしとるぞ。」

「必ずや、凪を。」

「それで紫苑、お主は誰と何だ?」

「私は沙和ちゃんとよ。」

「紫苑なら問題あるまい。」

「仕合はやってみるまで、分からないわ。」

「この女狐め。」

蜀の面々達が組み合わせを見終わり、蜀に身を寄せているという事で蜀として出る公孫賛・文醜・顔良・華雄も自分の組み合わせを見る為に前に出てきた。

「さって、あたいの相手は誰かなぁ…夏候淵…」

「ぶ，文ちゃん？」

「斗詩、先に地獄で待ってるよ。」

「ち，ちょっと文ちゃん！！諦めるの早過ぎるよ。私達だって鍛練してきたんだから。」

「それはそうだけどさ～」

「ちょっと、猪々子！！」

文醜が顔良にぼやいていると後ろから声が響いた。

「はっはい！！」

文醜もその声に思わず直立不動になっていた。

「麗羽様。」

「猪々子、クルクル小娘の配下何かに負けたら許しませんわよ！！」

「そんなぁ～無理ですよ。」

「それで、斗詩さんは誰と何ですの？」

「えっと私は…」

「鈴々となのだぁ！！」

袁紹に促され、顔良は自分の名前を探し始めた時に張飛が名乗りをあげた。

「…麗羽様、鈴々ちゃんとみたいです。」

「せ，せいぜい頑張りなさい。」

「斗詩ぃ。よろしくなのだ。」

「お手柔らかにね。」

こうして袁家の3人は後ろに下がった。そして次に紙の前に現れたのは…

「白蓮殿、今回は出られるんですな。」

「桃香に言われては出ないわけにはいくまい。」

「白蓮ちゃん、ありがとう。」

「気にするな。私もたまには身体を動かさないとな。それで私の名前はっと…」

「白蓮殿。」

「ん？なんだ星？」

「お疲れ様です。」

「…まさか！！」

趙雲の含み笑顔の言葉に公孫賛は直ぐに自分の名前を探した。

「張遼…あははは。私の天下一品武道会は終わったな。」

「白蓮ちゃん。ごめんね。」

「い，良いんだ。桃香は何も悪くない。」

「白蓮！！突撃！！そして玉砕なのだ！！」

「鈴々！！」

「良いんだ、愛紗。」

「白蓮殿…応援してますぞ。」

「星…」

「大穴ですからな。」

「一瞬でも期待した私が馬鹿だったよ。」

全員が対戦表を見終え、各自で雑談が繰り広げられていた。

「それにしても、愛紗と恋で一回戦なんて凄い事になった。まぁ、最強を狙うあたしには好都合だけどさ。」

「翠、確かに最強の称号は武将にとっては名誉な事だが今回はそれだけじゃないんだぞ。」

「そう、桔梗さんの言う通り今回はもし天下一品武道会で皆が頑張ってくれたらご主人…天の御遣い様がこの蜀に来てくれるんだよ。」

「天の御遣いねーあたしは興味ないなぁ。」

「私は興味がありますぞ。」

「星ちゃん？」

「皆も知っているだろう？御遣い様のもう一つの呼び名を…」

趙雲は微笑を洩らしながら将達を見つめた。

「それに、あの華琳殿が唯一そばに置いている男性…興味がありますな。」

「お兄ちゃんはとっても良い人なのだ。」

「そういえば、鈴々は帰ってきた御遣い様に会ったのだな。」

「ご主人様…良い人。」

「恋？」

この部屋に来てからずっと寝ていた呂布もいつの間にか張飛の後ろに立ち会話に参加していた。

「恋、ご主人様って？」

「御遣い様。」

「なんと。恋は真名も預けたのか？」

…コクッ

「星も…会えば分かる。」

「ねぇねぇ。恋様、御遣い様ってカッコイイ？」

「…ん？」

「蒲公英。お前は何を聞いてるんだ。」

「そういえば、愛紗も会ったのだろう？」

「どうだったのだ。」

「べ，別に私は何も…」

「あれ～愛紗ちゃんも真名預けてたよね。」

「と，桃香様！！」

「私も御遣い様に会ってみたくなったわ」

「お主もか紫苑。実はわしも思っていた。」

「恋…蜀にご主人様呼びたい。」

ガチャン

そう言いながら、呂布は関羽の前まで歩き方天画戟を関羽の眼前に向けた。

「れ，恋殿！！」

「愛紗…恋…本気で行く。愛紗も…本気。」

関羽は呂布の言葉と行動に最初は驚いた表情を見せたが、直ぐに笑顔を作り答えた。

「恋、前々回の天下一品武道会決勝での借りを返させてもらうぞ。」

「恋が…勝つ。」

「私が勝つ！！」

そんな二人を皆で見つめながら各々が様々な思いを馳せていた。

開幕一日前（蜀（後書き）

久しぶりの更新になってしまい申し訳ありません。

仕事が忙しく…何もする時間が…

次の更新…早くできるように頑張ります。

「さてと、どうしようかな。」

一刀は天下一品武道会の組み合わせの部屋から出て1人ぼっちだった。天下一品武道会が明日からと言う事で曹操や参加しない軍師達も明日の打ち合わせ等と様々な仕事があるようで、話相手も無く仕方ないので建業の街を1人散歩していた。

「仕方ないよな。それにしても昨日とは違って凄い人だな。殆どの人が天下一品武道会を見るんだろうな。」

「御遣い様ぁ。」

「んっ？」

ふと一刀は自分が呼ばれた事に気付き、顔を声のした方に向けた。

「おっ！！お前等も来たのか。」

「御遣い様、お久しぶりです。」

声を掛けてきたのは魏で警備の仕事をしているもので、過去に警備隊長であった一刀の下で働いた事がある者達であった。

「それにしても魏の警備は良いのかい？」

「若い者達がやってくれてるので心配はありません。」

「そうか。今回は天下一品武道会を見に？」

「もちろんですよ。御遣い様。」

「あのさ…御遣い様は…」

「し，失礼しました。しかし、今の隊長は楽進様ですし…」

「別に俺は北郷・一刀でも構わないよ。」

「では、北郷様で失礼いたします。」

『譲らないなぁ。』

「それにしても今回は大変な事になりましたね。北郷様。」

「どうしてだい？」

「他国の将の活躍次第では北郷様は他国に行かれる事になるらしいではありませんか。」

「あぁ、その事か。皆も知っていたんだね。」

「恐らく民達は他国も含めて皆知っておりますぞ。」

「そ，そうなんだ。」

「相変わらず、北郷様はお気楽と言うかなんというか。」

「大丈夫だよ。俺は信じてる。」

「しかし、北郷様…我ら魏の天下一品武道会での過去2回の成績は…」

「そんなに良くなかったのか？」

「恐らく、上位5名に入る活躍した者は過去2回にはおりません。」

「えっ！！春蘭…夏侯惇・張遼は出ていなかったのか？」

「いえ、出てはいたのですが…」

「そうなんだ。」

「そ，そうなんだって御遣い様！！」

「大丈夫だよ。今回はきっと違うから。」

「しかし…」

「俺は信じてる。だから皆も応援してやってくれ。」

「それは、当然です！！」

「頼む。」

「では、私達はこれで。北郷様も街の外や裏通りには1人で行ってはいけませんよ。」

「分かってるよ。」

「では、失礼いたします。」

一刀も魏の兵達と別れて城に戻り始めた。

『それにしても過去2回あって皆…俺のせいなんだな。今回は勝ってくれるよな、皆。』

そんな事を思いながら、一刀は今日寝泊まりする夏候淵・許緒・典韋の部屋のドアを叩いた。

コンコンコン

「誰もいないかな?」

カチャ

『まぁ、今日この部屋に俺が来るのはあの3人も知ってるだろうから少し寝させてもらおう。』

そして一刀は3台ある寝台には目もくれず部屋の隅の床に横になった。

「だ~りん!!ダーリンったら!!」

「あ!!出てくる気はしていました。」

一刀は横になる前に感じていた。

「もう!!ヒヤヒヤしたわよ!!ご主人様がこの世界に来た理由も言っちゃうかと思ったじゃない。」

「流石に消えたくはありませんから、言わなかったですけど…」

「あの血は警告よ。」

「やっぱりそうですか。ビックリしました。」

「ダ～リン。無茶しちゃダメよ。」

「華琳には見られてしまいましたけどね。」

「乙女をあんまり心配させちゃだめよん。」

「それで、敵について何か分かりましたか?」

「何も分からないわねん。」

「そうですか。」

「でも魏の子達の危機が去ってはいない事は確かよん。」

「危機が去ったらアナタには分かるんですか?」

「当たり前じゃない♪漢女…私を誰だと思ってるのかしらん?危機が来ると分かったからダーリンを呼んだんだから♪」

「そうですよね。」

「今は天下一品武道会での魏の子達の力を信じるのがご主人様の役目。」

「分かってます。」

「頑張ってね。マイダ～リン♪」

一方、一刀が横になり無意識の世界に入ってる時にこの部屋の住人が帰ってきた。

ガチャ

「いよいよ明日だね、流琉。」

「うん。」

「決勝で勝負だからね。」

「季衣こそ勝ちあがってきてね。」

「任せてよ。」

この部屋に入ってきたのは天下一品武道会前日と言う事で軽い鍛練を終えた許緒・典韋であった。

「あ！！誰かいるよ！！」

「えっ！！」

「に，兄ちんんんむぅ。」

一刀に気付き大きな声を上げようとした許緒の口を典韋が押さえた。

「な，何するんだよ流琉。」

「大きな声を出したら、兄様が起きちゃうじゃない。」

「そっか。」

「きっと疲れてるんだよ。でも兄様ったら…」

典韋は言いながら部屋を眺めた。許緒も典韋を見て何が言いたいか分かっていた。

「兄ちゃん、別にボクの寝台で寝たっていいのに。」

「兄様はいつでも私達の事を思ってくれてるのよ。」

「流琉…目から…」

「えっ!!あっ!!ち，違うよ!!別に泣いてた訳じゃないからね。」

典韋は許緒に言われて直ぐに目の何かを拭った。

「流琉、兄ちゃんを絶対に他国には行かせないようにしようね。」

「うん。」

『…結構、寝ちゃったのか？』

一刀は目を覚ました。

『間違いなく気配はするんだが…これは寝息かな？この部屋は確か秋蘭・季衣・流琉の部屋だから3人のだろうか。』

目を覚ました一刀は静かに身体を起こし、寝台に目線を向けた。

『季衣・流琉は寝てるみたいだな。でも…昼寝だな。』

確かに2つの寝台の上には許緒・典韋はの姿は確認できた。しかし、もう1つの寝台だけは一刀が部屋に入った時と同じ状態だった。

『秋蘭…俺が寝てる間に部屋には戻ったのかな？何してるんだろう？』

ガチャ

一刀は静かに2人の眠る部屋を出た。

「北郷。」

「あっ！！秋蘭。」

「もう部屋に来ていたのだな。」

部屋のドアを閉めると夏候淵が立っていた。

「あぁ。少し眠くて昼寝にね。」

「そうか。季衣・流琉はいなかったのか？」

「2人も昼寝中だよ。」

「そうか。では私達は部屋にはまだ入らない方が良いのだろうな。」

「秋蘭は寝なくて大丈夫？」

「私は夜に寝れれば大丈夫だ。」

「そっか。」

「北郷。」

「ん？」

「私達を恨んでないか？」

「えっ？恨む？どうして？」

「その身体は…」

「恨む訳無いさ。むしろ俺は秋蘭に…魏の皆と会えた事に感謝してるさ。」

「…そうか。」

「秋蘭？」

「北郷、明日は座りっぱなしで大変だろうが頑張れよ。」

「あぁ、秋蘭…魏の皆を応援するよ！！」

一刀は夏候淵にドコか違和感を感じながらも、何も聞かなかった。
その後、目覚めた許緒・典韋と夕食に出掛け全員が静かに眠りについた。

因みに、夏候淵の案で寝台を３つ並べて４人並んで寝たのは秘密である。

並べたベッド（後書き）

はい、タイトルを完璧にふざけてすいません，笑

でも内容はふざけてませんよ。

さて次回は…天下一品武道会開始予定です！！

孫策ー孫権
李典ー馬岱
典韋ー甘寧
夏候淵ー文醜
張飛ー顔良
関羽ー呂布
孫尚香ー厳顔
楽進ー魏延

曹操ー馬超
周泰ー夏候惇
于禁ー黄忠
張遼ー公孫賛
趙雲ー許緒
なしー孟獲
華雄ー黄蓋
呂蒙ーなし

一応載せました。

トーナメント表で考えて下さると分かりやすいです。

開幕宣言

「凄いな。」

一刀はただ驚いていた。眼前に広がるこの光景に。

「一刀、どうかしたの？」

一刀の前には２つの闘技場、そしてそれを囲むように大勢の民がいた。

「凄い人の数だと思ってね。」

「確かに今じゃここまで人が集まるのはこの時だけね。それに今回は…」

「今回は？」

「将という将が全員出るせいもあるんじゃないかしら。」

「なるほどね。」

「ちょっと、ちょっと！！何を２人で話してるのよ。私も入れなさいよ。」

「只の雑談よ。それにしても…」

「？」

「どうして蓮華じゃなくてアナタなのかしらね。」

「そんな細かい事は良いじゃない。ねぇ、一刀♪」

一刀は今、席に付いていた。右側には曹操・左には孫策がいた。蜀はいつも劉備が来るのだが、本人の希望もあり今回はこの席には付いていなかった。この席はつまり解説席にあたる。

「いつもは孫権さんなの？」

「そうよ。此処は三国の王だけが入れる場所。」

「俺は…良いのかな？」

「アナタは今回の願いだから特別よ。」

「そうそう特別なの♪」

「それで、蓮華はどうしたのよ？」

「多分、あの子には大変な仕事になるから私が変わり♪」

「…そう、分かったわ。」

「華琳、それだけかよ。」

「一刀…まだまだね。」

「？」

一刀は2人が何を言っているのかよく分からなかった。そんな時…

ゴーン!!ゴーン!!

大きな銅鑼のなる音が響いた。

「一刀、立ちなさい。」

「あっあぁ。」

曹操に言われ一刀はその場に立った。曹操・一刀が2人並んで立つ中、孫策が2人の前に立ち右手を上げた。瞬間、そこには大勢の民等まるで存在しないかのように静まり返った。

『す，すごっ!!』

一刀はこの光景に唾を飲んだ。そして…

「これより、第三回天下一品武道会を始める!!皆…思い切り楽しんでってね♪」

「「ワァー!!ワァー!!」」

孫策の大号令に民達が大声を上げて答えた。

「じゃあ、地和。後はお願いね♪思い切り盛り上げちゃって♪」

開幕宣言（後書き）

さて…いよいよ始まります。

先に言っておきますが、萌将伝の地宝を更に悪化させるかもしれません，笑

姉妹対決

「地和？」

一刀が言った時だった。

「さぁ～！！またやってまいりました天下一品武道会！！三国の代表による武の共演！！もしくは三国代表の脳筋達によるバカの共演！！！」

「おっ，おいおい良いのかアレ？」

張宝が２つある闘技場の真ん中に姿を現し、司会を始めていた。

「いつもの事よ。」

「そうなのか。しかし、脳筋って…怒る人もいるんじゃ…」

「人和がちゃんと三国に書状を出してるから問題ないわ。でも今回は…」

「今回は？」

「一刀がいるからか、凄い張り切ってるみたいよ♪」

「そっか。」

一刀は孫策の言葉に笑顔で張宝に視線を向けた。

「そして、なんと今回は…武に携わる三国代表！！更に袁家からなど全員の参加だよぉ！！」

「「「オォー！！」」」

「これはまさに個人の武を賭けた真の戦いと言えるんじゃないでしょーか！！ちぃ、すっごい楽しみです♪そして今回は民の皆も知ってる通り最強の称号だけではなく、大会で活躍した上位5名の中で一番多い国には…天の御遣い北郷一刀を差し上げま～す♪」

「差し上げるって…」

「民の皆さんの投票で上位5名は決まるので…好みの子じゃなくて、ちゃんと活躍した人に投票してあげて下さいね！！ちぃに投票しても残念だけど、無効だからね～♪」

「「「ワァー！！」」」

「上位5名は民から選ぶんだな。良い事だと思うよ。誰が考えたんだ？」

「誰だったかしらね～華琳♪」

「…知ってるくせに…私よ。」

ニヤニヤする孫策に素っ気なく曹操が答えた。

「流石だな。華琳は。」

「民を第一に考えるのは当然じゃない。」

「素直にありがとうって言えば良いじゃない、華琳♪」

「う，うるさいわよ。地和の話を黙って聞いてなさい。」

「つ・ま・り！！今回は個人の武を競うのは勿論だけど、三国でも競ってもらいま～す！！」

「「「ワァー！！」」」

「それでは解説を紹介するね♪まずは孫呉の麗しき孫策お姉様！！そして、私達魏の曹操様！！更に今回の退会の願いである天の御遣いの北郷一刀だぁ！！」

「「「オォー！！」」」

紹介された順に孫策・曹操・一刀はその場に立ちお辞儀をした。

「それでは早速第一仕合をはっじめるよぉ！！」

張宝の声が会場全体に響き渡った。

「さて、第一仕合はいきなり凄い組み合わせだぁ！！まず東から登場するのは前大会優勝者…この人に血を見せたら生きては帰れない。孫策伯符お姉様だぁ！！」

「さてと、軽く遊んであげようかしら♪」

「あれ、雪蓮いつの間に…」

「さっき楽しそうに駆けて行ったわよ。」

「あははは。」

「かずと～♪」

闘技場に上がる孫策が一刀を呼びながら手を振っていた。一刀も笑顔で応えた。

「か～ずと♪一刀は絶対に呉に貰うからねぇ～♪そして今度は…ふふふ♪」

「「「!!」」」

孫策の奇妙な発言に司会の張宝・そして周りを囲む大勢の民達までが静まりかえった…と思いきや…

「それはどうかしらね？」

「華琳…」

一刀の横にいる曹操が席を立ち発言していた。

「お，おぉっと既に一刀を巡って火花が散っております。天下一品武道会!!さて、西から登場するのは東から現れた孫策伯符の妹…孫権仲謀だぁ!!第一仕合は非情にも姉妹対決です!!」

「ど，どうしてこんな事に…姉様とだなんて…」

「早く出て来なさいよ、蓮華ぁ。」

「えーい、こうなったら前進あるのみだ!!」

そして孫権も姿を現した。

「では試合開始の合図を…華琳様、お願いします。」

張宝の言葉を受け取った曹操がその場に立ち静かに右腕を掲げた。途端に観客達は静まり、一刀も息を殺していた。そして…

「「始めッ!!」」

声と同時に右腕が振り下ろされた。

「ね，姉様、手加減して下さいますよね?」

「…どうかしら?」

「いくら真桜の特製の武器で死ぬ事は無いと言ってもまともに当たれば…」

「だったら避ければ良いじゃない。」

「そ，そんな無茶なっ！！」

「今の呉王の武がどの程度か見せて御覧なさい♪」

「…はいっ。では、参ります！！たぁぁあぁぁぁぁ！！」

「おっと孫権選手、猪突猛進で孫策選手に突撃だぁ！！」

孫権は知っていた。孫策に策など通じない事を…だから攻めて攻めて体勢を崩し、場外に突き落とすしかないと。

ガキィン！！

そして2人の真桜特製のレプリカである2つの南海覇王がぶつかった。

「なかなか力が付いたのね。」

「まだまだぁ！！」

孫権は言葉と同時に剣を弾き孫策の膝を狙い剣を振った。

「よっと♪」

孫策はそれをかわす様に宙を舞った。

「よしっ！！」

孫権は頭で描いてた通りの孫策の動きに好機を感じていた。着地を狙えば体勢を崩せるかもしれないと。しかし…

「えっ！！」

孫権は宙に舞う孫策に目をやった時だった。キラリと光る南海覇王が凄いスピードで向かって来ていた。

「くっ！！」

孫権は咄嗟に距離をとって後ろに下がった。

「危なかった…ね，姉様は！！」

「おしまい♪」

「えっ。」

ビシッ！！

孫策は孫権の後ろに立ち首に手刀を喰らわせていた。

…

「なんとも呆気ない勝利ですが、勝者は孫策伯符選手ぅ！！」

「「「ワァー！！ワァー！！」」」

「一刀、今の雪蓮の動きが見えたかしら？」

「宙を舞って剣を投げる姿は見えたけど着地した瞬間は全くだったよ。」

「でしょうね。」

「華琳は見えたのか？」

「…」

「華琳？」

「どうかしらね♪」

「人には聞いたくせに。」

「何か言ったかしら？」

「何でも無いです。」

「たっだいまぁ～！！」

「あっ！！おかえり雪蓮。」

「どうだった一刀！！私が見えた？」

「全然見えなかったよ。それにしても妹にも容赦ないんだな。」

「当たり前じゃない。天下一品武道会なのよ♪むしろ民の前で手を抜く方が蓮華が笑い物になっちゃうじゃない。」

「…なるほど。ちゃんと考えてるんだな。」

「何、一刀♪私の事好きになっちゃった？」

孫策は一刀の腕にワザと絡みついて来ていた。

「な，なってないよ。」

「本当かなぁ♪」

「ゴホンっ！！」

「…華琳？」

「雪蓮！！次の試合が始まるわよ。」

ニヤニヤニヤニヤ。孫策は曹操に笑顔を飛ばしていた。

「な，何よ！！」

「何でもな～い。」

「？」

一刀はそんな2人のやり取りの意味を何も気付いていなかった。

姉妹対決（後書き）

さてと、いよいよ天下一品武道会の第一仕合の開始です。

そして作者は思った…一仕合ずつやってたらこの天下一品武道会…どんだけ長くなるんだぁ！！ということで、何人か戦闘描写はなしでいきます。笑

一応、載せておこます。

孫策ー孫権
李典ー馬岱
典韋ー甘寧
夏候淵ー文醜
張飛ー顔良
関羽ー呂布
孫尚香ー厳顔
楽進ー魏延

曹操ー馬超
周泰ー夏候惇
于禁ー黄忠
張遼ー公孫賛
趙雲ー許緒
なしー孟獲
華雄ー黄蓋
呂蒙ーなし

隠れ爆乳と隠れ努力家

「では第二仕合を始めるよぉ！！選手入場ーーーっ！！」

「次って確か…」

「えぇ、真桜よ。」

「だよな。」

『真桜、頑張れよ。』

「では東より登場するのは三国一の発明家、そして隠れ爆乳の李典選手！！」

「だ，誰が爆乳やっ！！というか誰の情報や！！」

「…沙和ちゃんからの情報です。」

「沙和ぁ！！後で覚悟しときぃ！！」

「さって隠れ爆乳は置いといてと、西からの入場は…この人が出たらこう紹介するしかありません！！隠れ爆乳を倒せる者はいるか―！！」

「ここにいるぞーっ！！」

「お約束の登場をありがとう。」

「うぅ。そういう事言うなら言わないでよぉ。」

「お約束の言葉と同時に登場したのは実はコッソリ鍛錬に励む努力家さんの馬岱選手!!」

「ど，どうして知ってるのよ。」

「誰かさんからの情報です。」

「せっかくコッソリ鍛錬して皆を驚かせようと思ったのに。」

「では孫策様、開始の合図を…」

「始め!!」

「蒲公英、覚悟しぃや!!」

「真桜ちゃんになんて負けないからね。」

「やってみんと分からんでぇ。」

「やんなくても分かるじゃん。魏の人達って今じゃ全然だし。今の魏の人なら誰にでも勝てるんじゃないかな?」

「上等やないか!!ウチはともかく他の魏の将が本当に腑抜けかどうか自分の眼でしっかり見てみぃ!!」

「真桜ちゃん、怖〜い。」

「いくでぇ！！」

「コッチもいっくよぉ！！」

「でやぁぁあああぁぁぁぁ！！」

「はぁぁあああぁぁぁぁ！！」

ガキィン！！

李典の螺旋槍と馬岱の影閃が激しくぶつかり火花散っていた。

キン！！キィン！！

「2人とも中々ね。」

「俺には全然見えないよ。」

「真桜…しっかり鍛練したようね。」

「ちゃんと庭にも来てたしな。」

「真桜ちゃん、予想以上にやるの。」

「当然や。ウチだってしっかり鍛練積んだんや。それに…」

「えっ！！」

ギィィィン！！

辺りに何やら不気味な音が響いた。

「ニシシ。蒲公英、当たったら簡単に服が破けちゃうから注意してな。」

見れば、李典の螺旋槍が恐ろしい音を立てながら回っていた。

「そんなの当たらないよぉだ。」

「それはどうやろな？」

そして真桜は高く飛び上がったか。

「くらえ～！！」

『真桜ちゃん、私の勝ちだね。空中からの攻撃は着地に弱いんだよ。』

馬岱は李典が飛び上がった事で勝機を感じていた。着地の場所させしっかり見極められれば勝てると…ところが。

「蒲公英ぉ！！」

「えっ、なにっ！！」

ボンッ！！ボン！！

なんと李典は空中から螺旋槍で馬岱を狙ったのではなく、大量の煙玉を投げつけた。

「ゲホッゲホッ。何にも見えないよぉ。」

「終わりや、蒲公英。」

「えっ！！」

ガキィン！！

「駄目、踏ん張りがっ！！キャ！！」

「おぉっと煙から現れたのは馬岱選手！！そして馬岱選手の立っているところは場外だぁ！！よってこの勝負…李典選手の勝ちです！！」

「そ，そんなぁ～」

「残念やったな。蒲公英。」

「ずるいよ、真桜ちゃん！！ワザと変な音出して印象付けたり、突進だと思ったら煙玉使うなんて…最後の一撃は螺旋槍から音は出てないし見えないとこからだしっ！！」

「ニシシシ。」

「武器と道具を上手く使った知略の勝利ね。」

「真桜、やるじゃないか。」

「確かにまともに戦えば蒲公英が有利だったでしょうね。」

「雪蓮…」

「でも真桜は頭を使って勝った。やるじゃない。」

「雪蓮。」

「でも…私には通じないけど♪」

「あはは。」

隠れ爆乳と隠れ努力家（後書き）

え～実は大変忙しいのもあるのですが…ＰＣが…ｏｒｚ

という状態になりまして（泣

更新が最初の頃と比べ物にならないぐらい遅く…

それでですね！！

前にも一度言った事があると思いますが、新しい小説を書きたいと思っています。

メール小説執筆限定で！！

ＰＣが完全復活するまでの間、メール小説執筆でハイスピード更新な小説を書こうかと思ってるんですが…ネタが浮かばない…まぁ恋姫物は絶対ですが，笑

それに行き当たりバッタリで作者の思いつき小説みたいな感じにしたいのですが…最初の設定が…誰か…ネタを，笑

何でも構いません！！

例えば…

「桂花の弟に転生もの」

「桂花√で物語」

「桂花の幼馴染もの」

…笑

まぁ、何でも構いません！！笑

何か面白いタイトルで私に書いて欲しいというのがありましたら、言って下さい。

メールでも感想でも構いません。

もしかしたら、アナタの考えたタイトルの小説が…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2139v/

魏√END後…新しい始まり。

2011年11月27日02時46分発行